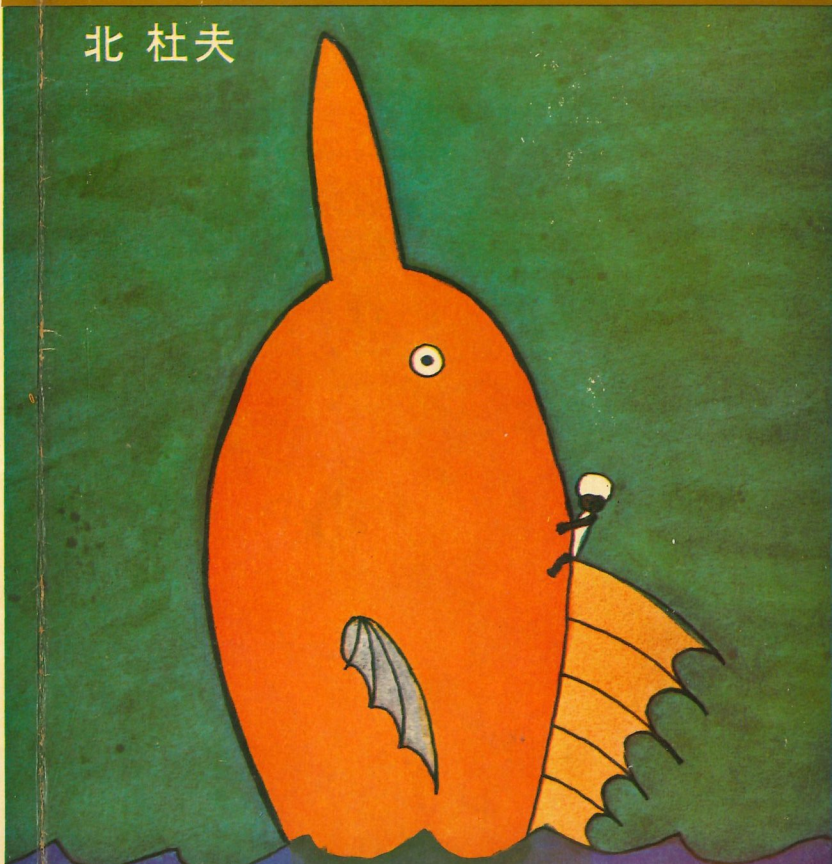
船乗りクプクプの冒険

北 杜夫



角川文庫

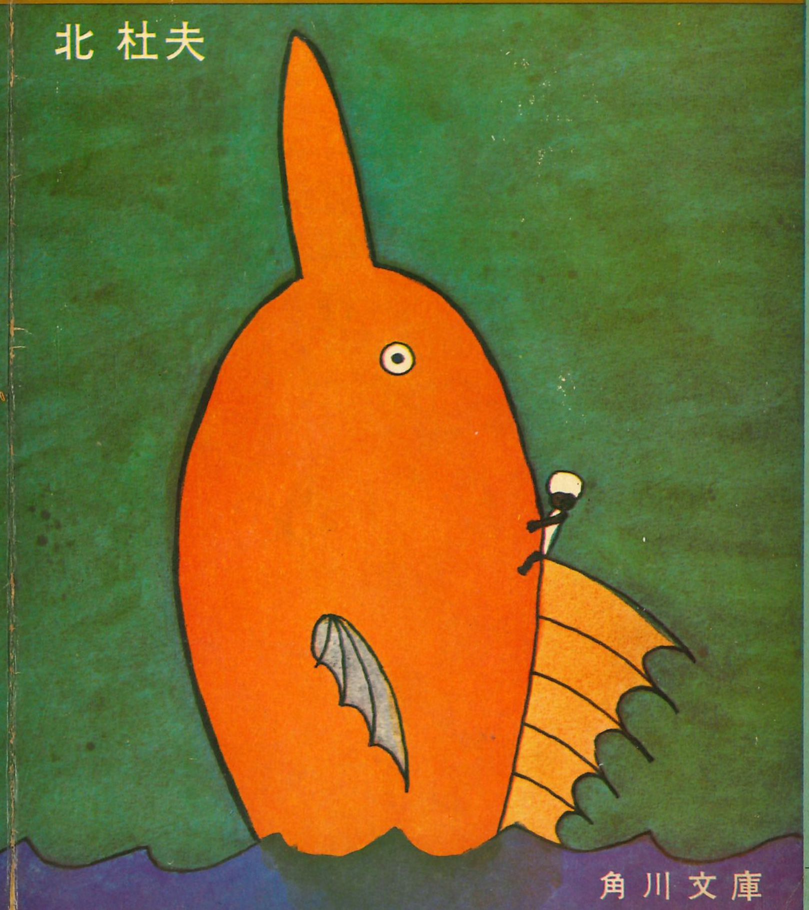
船乗りクプクプの冒険

タローは，突然不思議な夢の世界に引きこまれ，勉強の暇に覗き読んだ奇妙な本の主人公――土人の子のように黒く，頭に白いターバンをまいたチビのクプクプに変身した。一隻の帆船・白髪の老船長・怪力ヌボーと好人物のナンジャ，モンジャ…。紺碧の海をめざして航海と冒険ははじまった。…読者をメルヘン豊かな童話の世界へ誘う。

カバー 挿絵 長 新太

船乗りクプクプの冒険

北 杜夫



角川文庫

船乗りクプクプの冒険

北 杜夫

角川文庫 緑 二七一

—4—
¥180

¥180

0193-127104-0946(2)

角川文庫
北 杜夫作品集

どくとるマンボウ航海記
どくとるマンボウ昆虫記
幽 霊
船乗りクプクプの冒険

カバー 暁印刷

角川文庫
—2613—

船乗りクプクプの冒険

北　杜夫

角川書店

船乗りクプクプの冒険　北　杜夫　2613

船乗りクプクプの冒険

北　杜夫

角川文庫
2613

クプクプとは何者か？

諸君のうちで宿題の好きな人がいるだろうか。日本でもイギリスでもポルトガルでも中国でも、宿題というものはだれもがきらいだ。どんな偉い人でも、科学者でも、市長さんでも、校長先生でも、やっぱり宿題は好きでなかった。

それでも宿題というものはやらなければならない。

それだからタローは宿題をやっていた。どんな宿題かというと、算術、算数、数学とかいわれるもので、できがわるい子どもはみんなこれが苦手なのだ。そして、むろんのことタローはできがよいほうではなかった。

彼はブツブツひとりごとをいっていた。

「ええと、十八と五をたすと……二十七と……それを三で割ると……これは八だ。おかしいぞ。妙だぞ。ふしぎだぞ。ヘンチクリンだぞ。こんなふうにスラスラととけてしまうはずがないわけだがなあ」

彼は二、三度頭をたたいてからつぶやいた。

「この答えがあっているかあっていないかを、ひとつ確かめてみよう。それにはこれを逆にやってみればいい。そのくらいのことはちゃあんと知ってるぞ。ええと、八に三をかけると、これ

は三十二だ。それから五をひくと……ありゃありゃ、まるっきりへんだぞ」

それからタローは大きくうなずいた。

「つまり、この答えはまちがっている。それがわかっただけ、ぼくにしては大できだ。きょうはもうこれで宿題をやるのはやめにしよう。これは実にアッパレな考えだ」

こうしてタローは宿題をやめてしまった。

といって、すぐ外へ遊びにゆくわけにはいかなかった。なぜなら、おかあさんがちゃんと彼の部屋を見はっていたからだ。ぜひとも勉強をしているフリだけでもしなければならぬ。そこでタローは、一冊の本をとりだした。マンガだろうか？　西部活劇であろうか？　それとも科学冒険小説か？　いやいや、その本の表紙には、こう記してあった。

『船乗りクプクプ、キタ・モリオ著』

「クプクプだって？　へんてこな名まえだなあ」

と、タローは思った。

もっともその本はタロー自身が買ったのだった。彼は海が好きである。船が好きである。しかし、二、三度海水浴に行ったことがあるきりだし、ボートより大きい船に乗ったことはなかった。その代わり、彼は、いろんな海の本を、『シンドバッドの冒険』から『海賊物語』というような本をたくさんよんでいる。本屋で目についた『船乗りクプクプ』を中身をひらいてもみずに買ってきたのもそういうわけだったが、なによりその本がベラボーに安かったからだ。

「こんな安い本じゃ、きっとろくなこと書いてないだろうなあ」と、タローは思いながら表紙

をひらいた。

すると、最初に『まえがき』があって、それにはこう書いてあった。

わたくし、つまり小説家キタ・モリオは、これから船乗りクプクプの物語をかく。よみたい人はよむがよかろうし、よみたくない人はよまないがよかろう。

「なんだかこのキタ・モリオって人は、勝手な人だなあ」と、タローは思った。それから、ページをめくって、本文をひらいてみると、そこにはこう書いてあった。

いつの時代か、どこの国かは知らないが、クプクプという少年がいた。

これがつまり船乗りクプクプである。

それがいったいいつの時代であるのか、いったいどこの大陸や海洋の話であるのか、とんとわからぬ。読者はそんなことを知りたがってはいけない。作者のわたしが知らないのだから、どこのだれにきいたってわかりっこない。

「いよいよ勝手な人だなあ」と、タローは思った。

それから、次のページをめくってみると、そこにはこう書いてあった。

赤ん坊のときから、クプクプは海が好きだった。彼の家は海べにあった。風のない日、眠たげな波のさざめきを、風の吹く日、たけだけしい波のとどろきを、子守歌にして彼は育った。よちよち歩きができるようになるころから、波打ちぎわはクプクプの遊び場だった。いろんな海草がうちあげられ、カニやヤドガリや姿のおもしろい貝がごそごそとうごいていた。そうして砂にまみれ、潮水に足をぬらしたクプクプの前には広い青い海がひろがっていた。どこまでも青くはてしなくひろがる海。そうして潮風がちいさな少年の髪をみだした。

もうすこし大きくなると、クプクプははるかな水平線をながめて、ぼんやりと立っていることが多くなった。なにもかも忘れ、うっとりとしたまなざしで。水平線はわずかに丸かった。ときにはもやのためにかすんでいた。

あのむこうにはなにがあるのだろう。この広い海のはてにはどんな世界があるのだろう。そしてまた、そのまたむこうにも海はやはり広がっているのだろうか。どんな海が？　やっぱりこのように青いのだろうか？

クプクプはなにも知らないのであった。自分の遊び場である海べと、自分の家であるちいさな小屋をのぞいては、なんにも。

「なるほどなあ」とタローは思った。

「やっぱり小説家というからには、なかなかうまいところがあるなあ。これならツヅリカタにしてだせば、良の上か、ひょっとすると優をもらえるかもしれないぞ」

しかしまた思った。

「だけど小説家といえば文章をかくのが商売じゃないか。それにしてはあんまりうまくないなあ。きっと三文作家というやつかもしれないぞ」

それからタローは次のページをめくった。そしてビックリした。そこにはなんにも書いてなかったからだ。次のページも、またその次も、ただの一つの活字もないまっ白な紙にすぎなかった。これはいったいどうしたわけなのだ？

タローはいっしょうけんめい本をめくってみた。しかしどのページもどのページもまっ白なのだ。なんにも書いてない。これではノートとかわりがない。なんという本なのだろう。この『船乗りクプクプ』という本は！

事情をうちあければ、この本の著者、つまりキタ・モリオ氏がそれしか原稿をかけなかったのである。それ以上かく気がなくなってしまったのだ。

キタ・モリオ氏はとびきりのナマケモノであった。朝はなかなか起きない。寝床が好きなのである。あまりおそ起きをするので、起きてからもボウッとしている。日がくれると、電灯をつけるのはもったいないといって、すぐさま寝てしまう。これでは原稿などかけるはずがない。

もうひとつ困ったことに、キタ・モリオ氏にこの本をかくことを命じた編集者が、オッカナイ人なのであった。ひげがはえていて、力も強そうで、おまけに短気者ときているのだ。

「いいですか」と、彼はいった。「あなたはこの本を今月じゅうにかくと約束した。あなたは頭がわるいから念のためにいっておきますが、今月というとあと三日ですよ。三日というと、あ

なたは頭がバカだから教えてあげますが、二十四時間の三倍、つまり七十四時間ですよ。七十四時間というと、あなたは頭がヘンだから計算してあげますが、これを分でいうと、ええと四六が二十四、六七が四十二、えい、そんなことはどうでもいい、とにかくあと三日たったらわたしはここにやってきて原稿をいただきますからね」

かわいそうなキタ・モリオ氏は努力をした。それはうけあってもいい。彼は朝早くから起きた。しかし目がくらんでなにも書けなかった。彼は夜になっても眠らなかった。マブタがたるんでくると、マッチ棒でつっかい棒をした。

そのうちとても眠くなってマブタはますます重くなり、マッチ棒がパチンと折れると、彼は新しいマッチ棒でつっかい棒をこしらえた。彼は百十三本のマッチ棒を使用したが、ただ目をひらいているだけで、一字だってかけはしなかった。

いよいよあと一日と期日が迫ったとき、キタ・モリオ氏は家を売りはらって、別な場所に引っ越してしまった。あのおそろしい編集者がこわかったからだ。期日になって編集者がやってきてみると、家はモヌケのからだった。

しかし編集者は交番へ行き、区役所へゆき、キタ・モリオ氏の新しい住居をしらべあげた。彼はカンカンになっていた。キタ・モリオ氏の新しい家はたいへん遠かったので、編集者はまず電話をかけようとした。しかし当の相手の家には電話なんぞついていなかった。編集者は電報をうとうとした。ところが当の相手の家には番地さえついていなかった。

編集者は烈火のごとくおこった。彼はタクシーをやとい、メーターがどんどんあがるのもかまわず、けしからん小説家をつかまえようとやってきた。

ところが、彼がやってきてみると、その家はまたしてもからっぽだった。キタ・モリオ氏は編集者のやってくることを第六感で感じとり、カバンにシャツとパンツと歯ブラシ一本と、そのほか目についたガラクタをつめると、どこへともしれず姿を消してしまったのである。ただ、家の中に、一枚の紙が残っていて、それには『船乗りクプクプ』の『あとがき』だけが書いてあった。

こうして、『船乗りクプクプ』は大部分白紙の本となってしまったわけなのだ。

さて、そういう事情を知らないタローは、なんにもかいてない本をあきれてめくっていったが、一番おしまいに『あとがき』というのがのっているのを発見した。それにはこう書かれてあった。

『船乗りクプクプ』はこれでおしまいである。なぜなら、わたしがこれ以上かかないからだ。したがってこの本は、本文が二ページ、「まえがき」と「あとがき」をいれて、合計四ページしかない。それでは本にならぬので、二百五十ページの白紙をいれることにした。読者はこれをノート代わりに使ってよい。フクちゃんクリちゃんや鉄腕アトムの絵をかいてもよかろうし、わたしの代わりに、船乗りクプクプの物語を書いてくれれば、一番つごうがよい。

この本はノートとしての価値しかないから、定価ははなはだ安い。したがって印税もタダ同然である。わたしは目下逃走中であるが、このぶんではうえ死にしないともかぎらない。さらば読者よ、ふたたびまみえることは期しがたい。さよなら、バイバイよ。

これを読みおわって、タローは今度こそ本当にあきれてしまった。

「このキタ・モリオって人は、まったくひどいやつだなあ」

タローはフンガイして本をとじた。

と、そのときふしぎなことが起こった。

はじめ、タローはメマイのようなものを感じた。頭のうしろがグルグルとまわり、からだがグッともちあげられるような気がした。それから気がとおくなり、ただ、自分が空中をおそろしい速さでとんでゆくな、とかすかに感じた。

どのくらいの時間がたったかはわからない。

皮膚がじりじりとあつい。耳に波の音がきこえた。タローは目をひらき、思わず声をあげそうになった。

ここは部屋の中ではない。焼けるようにあつい砂の上に彼は倒れていた。頭の上にはまっさおにボスター・カラーをぬりたくったような空がひろがり、太陽がギラギラと輝いていた。また波の音がした。タローはからだをおこして、すぐ前に波がくだけて白くあわだつのを見た。

ここは海岸なのだ。どこか見知らぬ海岸なのだ。白い砂浜。どこまでもはてしなくひろがる青い海。

「こりゃまたどうしたわけなんだ?」とタローは思った。

「それにしても暑いなあ。こりゃどうも熱帯地方らしいぞ」

タローは立ちあがって、からだについている砂をはらおうとした。すると、どうも身なりがへんなのだ。彼はさっきまでたしかセーターを着て宿題をやっていたはずだった。

ところが、いまは、なんだかうすぎたない白い服をきている。服というよりボロきれをからだにぐるぐる巻いているといったほうがいい。頭に手をやると、これもターバンみたいな布がまいてある。足は——くつ下さえなかった。まったくのハダシなのだ。足の裏があつい砂をふんでやけるようだった。

「ははあ、ぼくは夢を見てるんだな」と、タローは思った。

「きっと、あんなヘンな本をよんだから、夢をみてるんだ」

夢というものはほんとうに奇妙なものだ。いったいどうして夢なんか見るのか、諸君も大きくなったら研究してみるといい。小さい子どもの夢はわりと単純だ。パイナップルを食べたいと思うとパイナップルの夢をみたりする。ところが、いざそれを食べようとすると、急にパイナップルが大きくなって、おまけに口まであけて、逆に人間が食べられてしまったりする。ほんとうに夢というものは奇妙なものだ。

「夢ならどうせすぐさめるだろう」と、タローは思ったが、またこうも思った。

「すぐさめなくったっていいや。ここが熱帯地方なら、どこかにバナナぐらいありそうだぞ。せめて夢のなかでも、好きなだけバナナを食べてみたいなあ」

しかし、バナナなんて見つからなかった。一面の砂浜と、海と、岩ばっかりである。近くには人家さえないらしい。

一匹のカニが足元にはいよってきた。タローがつかまえようとして手をのばすと、カニはすば

やく走って穴の中に逃げこんでしまった。カニは横に走るものである。それなのにこのカニは縦に走った。

「こいつめ」と、タローは思った。「ヘンチクリンなカニめ。どうしてもつかまえてやるぞ」

そして指先を穴の中にさしいれると、カニはハサミでイヤというほどタローの指先をはさんだ。

「アッチッチ」

タローはあわてて指をひっこめて痛そうにしゃぶってみたが、ふとこういうことに思いあたった。

「おかしいなあ。夢なら、こんな痛い目にあったなら、たいてい目がさめるものだがなあ」

すると、頭の上で、ふといドラ声がひびきわたった。

「夢ではないぞ」

タローはビックリして顔をあげた。目の前に、がっしりした大男が立っている。赤銅色に日やけして、まんまるい目をして、頭はハチにさされたようにデコボコしている。なんだか異様な大男だ。

「おじさんは、だれです?」と、タローはおそるおそるたずねた。

「船乗りヌボー」と、大男はドラ声でこたえた。「さあ行こう、クプクプ」

「え、なんですって?」

「もう船がでる時刻なんだ、クプクプ」

「クプクプって」と、タローは口ごもった。

「ぼくはタローですよ。クプクプなんて知りませんよ」

「おまえはクプクプじゃ」と、大男はわれがねのような大声でいった。「そうきまっているんだ」

「だって……」と、タローはおろおろと口ごもった。「ここはいったいどこですか、インドですか、アフリカですか?」

「インドってなんだね?」と、大男はききかえした。

「あれ、インドを知らないの。とにかく日本じゃないんだね」

「ニッポンてなんだね?」

タローは急に不安になってきた。それに大男の服装も、まるでずっと昔の船乗りみたいなかっこうなのだ。

「いまはいつ? ぼく、ずいぶん長く眠ったのかな。それとも、あんがいむかしにさかのぼって……。おじさん、今は紀元何年ですか?」

「紀元ってなんだね?」

タローはますます不安になってきた。

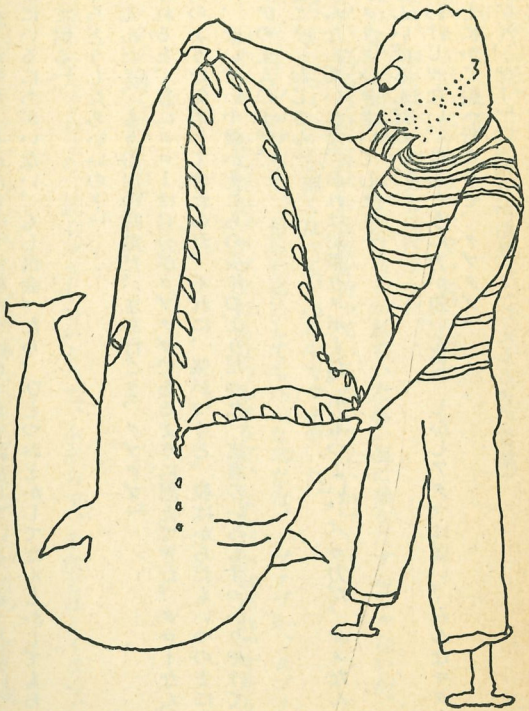
「おじさん、船乗りシンドバッドって人、知ってますか?」

「知らん、知らん」と、大男は首をふった。

「じゃあ、海賊ドレイクは?」

「だまれ!」と、大男はどなった。「時代なんかきいたって役にたたん。ここはメチャメチャ

の土地でメチャメチャの時代なんだ」
「やっぱり夢なんだなあ」と、タローはつぶやいた。「この大男、早く消えちまわたいかなあ」
「夢じゃないったら！」
と、大男はとても大きな声でどなった。
「いいかね、おまえはけっして夢をみているんじゃあない」
「そんなら、ここはどこなの？」
「ここは物語の世界だ」と、大男はいった。「ここはキタ・モリオとかいうやつが考えた物語の世界なんだ」
それから大男は、急に元気がなくなって、声をひくめた。
「じつはおれも弱っているんだ。キタ・モリオとかいうやつは、地理も歴史もちっとも知らない男らしい。だからこの世界はメチャメチャだ。おまけにおれの頭はこんなにデコボコにされるし、名まえだって、ヌボーなんておれはイヤだ」
そういって、男はベソをかいた。乱暴のようでいて、あんがい気の弱い男なのかもしれない。しかし、タローはそれどころではなかった。彼はほんとうに心配になってきた。
「じゃあ、ぼくはほんとうにクプクプなの？」
「そうだよ、坊や。正真正銘のクプクプだ。ほかのだれでもない」
「いったいどうしたら元の世界へかえれるかしら」
「それはおれもわからない。とにかく、キタ・モリオってやつは、物語をかきもしないでどこ



かへいっちまったのだ。それだもので何事につけますます混乱している。きっとあいつもこの世界のどこかにいるにちがいない。もし出会ったら、ひとつおどかしてなんとかしてもらわなくちゃおれだって困る」

「これからどうしたらいいの？」

「船にのるんだよ。もう船出の時刻だ。さあ行こう、クプクプ」

そう呼ばれると、急にタローは自分がクプクプであるように思えてきた。タローなんてどこかほかの他人のような気がしてきたのだ。それに、気がつくと、彼はからだもいつのまにか小さくなっていて、せいぜい十歳かそこらの少年のようだった。皮膚のいろもすっかりやけている。まるでアラビアの土人の子だ。

「船はどこ？　おじさん」

「おじさんなんていうな。おれは船乗りヌボーだ。力もつよい。バカ力だ。サメなんか口をつかんでメリメリとひきさいてしまう」

「ずいぶんいばるんだね」

「いばるわけじゃない。ほんとうに力が強いんだ。しかしアタマは弱い。みんなキタ・モリオのせいだ。とにかく船へ行こうぜ、クプクプ」

「アイ、アイ、サー」（船乗りが船長にこたえるときの言葉）

「しゃれたこというな。しゃれたこといっても、おれにはわからんぞ。なにしろアタマが弱いんだからなあ」

そしてふたりはつれだって、波の打ちよせる海岸づたいに歩いていった。

むこうに岩山がそびえていて、そのかげに一隻の帆船が見えた。ちいさな船だ。おまけに帆もボロボロときている。

「ボロっちい船だなあ」

と、以前タローだった少年はつぶやいた。

しかし彼は、胸をはって自分をはげました。

「がんばれよ、クプクプ。おまえはあこがれていた広い海に乗りだすんじゃないか。しっかりしろクプクプ、見知らぬ世界がおまえを待っているのじゃないか」

それから、またちょっと心細くなって、心の中でつぶやいた。

「それにしてもクプクプって、自分の名にしてもへんな名だな。クプクプか、クプクプクプクプク……おやおや、なんだかプクプクにもなっちゃうぞ。なんだかおぼれやすそうな名まえだなあ」

クプクプ海へ乗り出す

船長は白髪の老人であった。顔じゅうしわがよって、小がらで、手などはミイラのごとくやせていた。

長年海の生活をしてきた人らしく、からだじゅうあちこちに塩がこびりついている。

大男ヌボーは、クプクプを船長の前につれていった。
「こいつがクプクプです」
船長はジロリと少年を見た。
「ふうん。けっこう大きいな」
「いや、チビですよ。ほんのチビで」と、大男ヌボーは訂正した。
「だが、太っているようだな」
「いいや、やせてますよ」
「うん、まあいい」と、船長はいった。「こらチビ、プクプクとかいったな」
「いいえ、クプクプですよ、ぼく」
と、クプクプは訂正した。
「なんだって？　どいつもこいつもろくな名まえをしておらん。こりゃ、呼びつけるのも気がおもいわい。それじゃチビ、クプクプ、おまえはボーイじゃ。ボーイというのはなんでもやるのだぞ。わしのパイプだってそうじするんだぞ。わかったか？」
「アイ、アイ、サー」
「なんじゃ、それは」と、船長は目をむいた。「この船ではそんなことばをつかうことはならん。たとえばこういうのだ。はい、とか、かしこまりました、とか、あいよ、とか……。いやいや、あいよ、などといってはならん」
クプクプはクスリと笑った。すると船長がまたギロリと目をむいたので、あわててこういった。

「あいよ、とはいいません」
「そうじゃ。そして、そのあとに敬称をつける。はい、大統領。いや、そうじゃない。かしこまりました、大将……。いや、これもまずいな。ええと、ええと、こらヌボー、わしはいったいなんだったっけな？」
「あんたは船長にきまってますよ」
と、大男ヌボーはこたえた。
「そうじゃ、船長じゃった。いいかチビ、ちゃんと覚えておくんだぞ」
「はい、船長」
「そうだ、そうだ、そのとおり！」
船長はすっかり喜んで手をパチパチとたたいた。
なんだかあまり頼りにならない船長さんだなあ、とクプクプは思った。
「それじゃチビ、もうあっちに行っていろ」
と、老船長は命令した。
「わしはこれから船をうごかさにゃならん。これはなかなかむずかしいんじゃ。昔はやさしかったのだが、今はなかなかむずかしい。おまえがいてはじゃまになる。ずうーっとあっちへ行ってろ。一カイリかなたへ！」
「そんなに行ったら、海に落っこっちゃうなあ、ぼく」と、クプクプはつぶやいた。
「それならば命令を訂正する。そんなに遠くなく、しかも遠くへ行け！」

クプクプはあきれてそこをはなれた。

そんなに大きくない船である。甲板は平たく、帆柱が二本、それもただの棒が突っ立っているにすぎない。古めかしい、ボロボロの船なのだ。あちらでは数人の水夫がいそがしそうに働いている。そっちへ行ってもじゃまになりそうだ。

すると、かたわらにヌボーがきてささやいた。

「クプクプ、そこらにいればいいよ」

「だって、あの船長さん、おっかないもん」

「だいじょうぶ」と、大男ヌボーはニヤリとした。

「あの船長はいったことをすぐ忘れてしまう。モウロクしてるんだ」

「老いぼれてんの？」

「そうだ。そのうえひどい乱視だ。メガネをかけないとろくにものが見えない。さっきも、おまえのことを大きいだの太ってるだのといっただろ」

「それじゃあ、早くメガネをかけてくれないかなあ。船が衝突しちゃうよ」

「ところが船長はなかなか強情なんだ。目の見えるふりをしている。なあに、海にでちまえばだいじょうぶだ。海は広いんだからな」

そういっているうちにも、船長はいらいらと歩きまわり、ひげをこすり、すこしも落ち着かなかった。彼は台の上にのっている海図をのぞきこみ、もう一度のぞきこみ、さらにもういっぺんのぞきこんだ。

だしぬけに船長はさけんだ。

「おーい、野郎ども！　いや、これじゃ海賊船みたいだな。おーい、皆の者！　これもへんだな。いったいどういったものだろう」

「なんだっていいですよ」と、見かねてヌボーが口をだした。

「おーい、みんなこい！」

すると二、三人の男がかけてきた。

「出港ですか？　船長？」

「いや、まて。船は陸についているのだったな」

「そうですよ、すぐそこが浜でさあ」

「それならば出港じゃ。いまさら入港もできん」

そして老船長は、いきなりびっくりするほど大きな声で叫んだ。

「出船（でぶね）じゃあ！」

みんなはたちまち活動を開始した。あっちへ走り、こっちへ走り、ロープをひっぱったり、掛け声をかけたりした。しかし船はちっとも動きはしなかった。

「なんじゃ、ちっともうごかんぞ」と、船長がいった。

「どうも船底が砂地につかえているようです」

「そんなら、すこし沖までカイでこぎだせ！」

「カイはみんな折れてます」

「ええい、なんというやつらだ！　シャモジでもスプーンでも持ってきてこぎだせい！」
たいへんな騒ぎであった。ようやく船はすこしずつ動きだして、ゆらゆらとただよいだした。
「沖へでてきたぞ」
と、いらいらしながら老船長はどなった。
「早く帆をおろせい」
「帆はみんなおりてます」
「まちがいじゃ。早く帆をあげい！」
スルスルと帆があがった。しかし、そう書いてはうそになる。あっちでつっかえたりこっちでギコギコいったりしながら、ようやっと、あがったのである。ズダ袋をはりあわせたような、ツギハギだらけの帆であった。
しかし帆は風をうけて、船は波をきって走りだしていた。
海はなめらかだった。さざ波がもつれているだけで、ウネリはなかった。さきほど船の後方にひろがっていた白浜は、もうずっとはるかになっている。その島はだんだんと遠くなり、小さくなり、ついには水平線のむこうにかすんで見えなくなってしまった。

まわりはすべて海水ばかり。エメラルドをとかしこんだようなグリーン色の海で、それもしだいにアイ色になってきた。
海、海、海。見わたすかぎりの海。

波は美しく、おだやかにうねっている。
潮風がふきつけてきて、帆がギイギイときしんだ。
まっさおの空の下の、まっさおの海を、船は波をかきわけ、白いあわだちをのこしてすすんでいった。すばらしい心もち！
クプクプの胸はおどった。さっきまで途方にくれたりアッケにとられたりガッカリしていたのだが、いまはそんなことも忘れてしまった。彼は船べりに走っていき、身をのりださせて海面をのぞきこんだ。
「ああ、なんてきれいな海だろう！」
アイ色の海の上を、船首のきる白波がすべっていって消える。
と、その中から、パッと何かがとびだした。もう一つ、また一つ。
「あ、トビウオだ」
トビウオは何匹も何匹もとびたった。船におどろいた彼らは、胸ビレをひろげて海面を滑走し、かるがるとからだを空中に浮かせる。まるでツバメのようだ。
見ていると、ほんの小さなトビウオが、とびあがろうとしてけんめいに泳いでゆく。
「しっかり、トビウオの赤ちゃん」と、クプクプは思わずさけんだ。
トビウオの子は、うまくとびあがって、スイスイと波の上をとんでゆく。
「うまいぞ！」
するとその声がきこえたのか、トビウオの子はこっちに頭をむけて得意そうに胸ビレをパタパ

タさせた。あんまり得意になって飛び方をしくじってしまったのだろう。クルクルとまわってボシャンと海へ落ちてしまった。

クプクプはクスリと笑って、海面をのぞきこんだ。するとそこに妙なものが浮いている。平たい、うすい貝ガラみたいなものだ。それがいくつもいくつも、波のまにまに流れているのだ。

「あれ、あれはなんだろう?」

クプクプは思いだした。いつか理科の時間に習ったことがある。それはタコブネといって、タコと貝の中間みたいなおもしろいやつなのだ。メスのタコが腕から分泌物をだしてこの貝ガラをつくるのだ。そしてその中に卵をうむのだ。

そのとおり、ただよっているタコブネの中には、卵を抱いているおかあさんダコもいた。やさしく、ぐにゃぐにゃした手で卵をなでていた。

ところがもっとへんなのもいた。ひとつのタコは頭の下に腕をくんで昼寝をしていた。八本も手があるから四本の手をまくらにしていた。もう一匹のタコは貝ガラの舟の上で、せんたくをしていた。パンツみたいなものを二本の手でジャブジャブやり、べつの二本の手でそれをしぼり、またべつの二本の手でそれを干していた。もっとおかしなのもいた。そいつは、貝ガラの舟の上に机をだして、頭にハチマキをまいて、宿題をやっていた。

「ああ神さま、タコまでが宿題をやっている!」

クプクプはため息をついた。彼はそのタコを半分感心だと思い、半分気の毒だと感じた。

「そうだ、ぼくもこんなに海ばっかりながめていちゃ、きっと船長さんにおこられるぞ」

といって、いったいどんなことをやればいいのだろう。彼はまだなんにも船の生活を知らないのだ。

「そうだ。パイプだっけ。パイプをそうじしろと船長さんがいってたっけ」

しかし、パイプがどこにあるのかわからなかったし、ききにゆくのもめんどうくさかった。

クプクプはすぐにパイプのことを忘れてしまって、目をはるかな水平線に移した。ひろい海。目をさえぎるものはなんにもない! 空と海とこの船があるばかりなのだ。

今度はイルカの群れがやってきた。イルカは船と競争をしたがる。並んで泳ぎながら彼らはときどき空中へおどりあがった。弧をえがいてスパッととびあがる。こんなちいさな帆船では、どうしてもイルカのほうがずっと早かった。イルカは船をどんどん追いぬいてゆく。

「こら、船!」と、クプクプはさけんだ。「もっと早く走れよ。負けちゃうじゃないか」

そのとき、

「こら、小僧!」

と、うしろでいやにいばりくさった声がした。

クプクプはびっくりしてふりかえった。

するとそこに、ふたりの水夫が立っている。ひとりはデブで、そのかわり背が低い。なんだか上からタクワン石でものせて、おしちぢめたような男だ。もうひとりは背は高いが、そのかわりヒョロヒョロとやせている。なんだか上から無理にひっぱって、ひきのばしたような男だ。ふたりとも、見ていておかしくなるような男たちだった。

しかし、そのデブとヒョロは、ふたりで声をそろえてクプクプをどなりつけた。
「こら小僧！」
クプクプはどもりどもりいった。
「お、おじさんたちは、なんなの？」
「なんなのとはなんじゃ？」
と、デブの男はうなった。
「おれの名はナンジャだ」
「そして、おいらの名はモンジャだ」
と、ヒョロ長がいった。
「へえ、へんな名」
「へんな名ではない」と、デブのナンジャがいった。「おれの名はそこらじゅうにひびきわたっている。七つの海をまたにかけた船乗りナンジャとはおれのことだ」
なんだか聞いたことのあるせりふだなあ、とクプクプは思った。
「おれの名だってそのとおり」と、ヒョロのモンジャが胸をそらした。「十三の海をまたにかけた船乗りモンジャさまだぞ」
十三も海があるのかなあ、とクプクプは思った。
「おれは海だけじゃあない」と、ナンジャがいばっていった。
「川だってみんな知っている。百三十三の大河をさかのぼった海の男ナンジャさまだ」

「海でも川でも沼でも水タマリでも、およそ水という水をわたり歩いた、海と川と沼と水タマリの男モンジャさまだ」
と、モンジャはますますそりかえって、あやうくひっくりかえりそうになった。
「そうだ、そのナンジャさまとモンジャさまがきくが、小僧、おまえはいったい何者だ？」
と、ふたりは声をそろえていった。
「ぼく、クプクプだよ」
「なんだって？」
「クプクプ」
「プクプクだと？」
「クプクプだったら！」
みんな間違えるんだからなあと、クプクプは腹をたてて答えた。
「そうか、クプクプか。そのクプクプというのはいったいなんだ？」
「ぼくの名だよ。そしてぼくはこの船のボーイだよ」
「ボーイ！」
と、ナンジャとモンジャは声をそろえてさけんだ。
「ボーイか。そうか、おまえはボーイなのか。それはいい。それはすてきだ。おまえはいい子だ」
「なぜいい子なの？」

「なぜって、ボーイというのはなんでもやる。またやらねばならん。いいか、ジャガイモの皮むきから、その皮を海にすてるのから、そこらじゅうをそうじするのから、船長のごきげんをとるのから、みんなやらねばならん」

「そうだ、そのとおりだ」と、横からヒョロのモンジャも口をはさんだ。「そういうことは今までみんなおれたちがやっていたんだからなあ」

「おまえはだまってろ！」と、デブのナンジャは相手の口をおさえた。

「いいか、小僧。そういうことをみんなやるんだぞ。それから、船長のパイプもだ！」

「そうだ、パイプもだ！」

と、ヒョロのモンジャも声をあわせた。

またしてもパイプがでてきた。いったいそれはどんなパイプなんだろう？

「さあクプクプ、そんなところでなまけていると飯をくわさんぞ。すぐこれからジャガイモの皮むきだ！」

ふたりはクプクプを船室へつれていった。甲板にある穴ボコみたいな口からはいると、下はあんがいひろい。みんなが寝るへやがあった。その隣に炊事場みたいな場所があった。その隣は倉庫みたいなへやで、いろんなものがゴシャゴシャと積んである。

ナンジャとモンジャは、ズダ袋をひとつひきよせた。

「さあ、これがジャガイモだ。三十個ばかし皮をむいておけ」

と、ナンジャとモンジャがいった。

「いや、四十ばかしのほうがいいよ」と、モンジャがいった。

「そうだな、六十五くらいがいいな」と、ナンジャがいいなおした。

「そのくらいでいいよ」と、クプクプは泣声をあげた。

諸君はジャガイモの皮をむいたことがあるだろうか。それはわけのないことだ。ただしへたにむくのなら、だ。これをうまくむくのは技術を要する。つまり、すばやく、薄く、皮をむくのはたいへんなことだ。

クプクプは一生けんめい皮をむいた。なかなかむずかしい。おまけにナンジャとモンジャが前に立って、のろい、とか、もっと薄く、とか、難クセをつけるので、よけいうまくできない。

そのくせ先輩のふたりは、ちょっとナイフをこちらに貸してみろ、見本を示してやるから、とはけっしていわなかった。本当はふたりとも、クプクプよりももっとジャガイモの皮むきがへただったのだ。

指に二、三か所も傷をつくって、ようやくのことで皮をむきおえると、もうふたりはべつのことを命じた。

「今度はいよいよパイプそうじだ。これは甲板へ行ってやれ」

「なぜここでしちゃいけないの？」

と、すっかり疲れきりながらクプクプはたずねた。

「なぜって、船長のパイプはものすごくつまっているからだ。彼はしょっちゅうパイプをふかす。そのくせちっともそうじをしない。これからおまえにそうじさせるやつは、もう何十年一ぺ

んもそうじしたことがない。こんなところでやったらそこらじゅうマックロになってしまう」

なるほど、そのパイプはものすごくつまっていた。そのうえホラ貝よりも大きいのだった。

クプクプは大きなパイプをかかえて甲板にでて、針金で一生けんめいにつついてみたが、なにしろかたくつまっているので、針金がすぐまがってしまう。

「弱ったなあ。こんなに固いヤニなんて見たこともないなあ」

クプクプはバケツに海水をくんでパイプをひたしてみた。すこしふやかそうというわけだ。それからトンカチとノミをもってきて、パイプにつまった固いヤニをたたきだした。

一時間もたったころ、バリ、バリ、バリ！　というものすごい音がした。

ついに十何年かたまっていたヤニの表面がくずれ、その中から乾燥してたまっていたヤニの粒とススとホコリがもうもうと立ちのぼった。ホラ貝のようなパイプはいまやひとつの煙突であった。黒煙をもうもうと吐きだし、その煙は帆柱だの甲板だのそこに働いていた水夫たちに襲いかかった。

あっちでもゴホン、こっちでもゴホンとせきをした。

「なんじゃ、船火事か？」

と、老船長がとびだしてきた。しかし、船長は自分のパイプがついにそうじされたことを知ると、ひしとクプクプをだきしめた。

「よくやった、チビ君。これでおいしくキザミタバコが吸える。これはわしの一番いいパイプだったのじゃ」

しかしクプクプはほめられてもあまりうれしくなかった。彼はすっかりクタクタになっていた。顔も手足もマックロだった。船の生活もこれじゃあ楽じゃない。ナンジャもモンジャもいじわるのようだ。それに、ぼくはいったいこれからどこへ行くのだろう？

船ばたをたたく波の音をききながら、クプクプはほとんど涙がこぼれそうになった。

この船はどこへ行く？

こうして何日もの日がすぎていった。

クプクプにとってつらいことの多い日日だった。

毎日、空は青く、海はもっと青い。微風が船上をすぎ、ときどきカモメが帆柱の上にまいおりる。しかし、クプクプは今ではそんなものをながめているひまがあまりなかった。デブのナンジャとヒョロのモンジャはクプクプをこきつかった。なんでもかでもクプクプにやらせるのである。

ときどき、クプクプはバケツにはいった残飯を海にすてながら、ホッとため息をついた。

「ねえ、カモメ君」

と、クプクプは帆柱にとまったカモメにむかって問いかける。

「きみはどこからきたの？　そして、どこへ行くの？」

カモメはなんにも答えはしなかった。

「きみはいいねえ、羽があってどこへも行けるんだもの」

クプクプはなおもカモメに話しかけた。
「ぼくはどこへ行くんだろう？　いったいいつ自分の家へ帰れるのかしら」
するとカモメは、「アホウ、アホウ」とないてとび去ってしまった。
クプクプは涙がこぼれた。べつにカモメを憎らしいとも思わなかった。なぜって、カモメはほかのなき声をだせないのだから。
ところがある日、ナンジャとモンジャが甲板を歩いていたとき、またカモメが「アホウ、アホウ」とないた。
「けしからん」と、ナンジャがうなった。「あのカモメのやつ、アホウといいやがる」
「ありゃカモメじゃないさ。アホウ鳥だよ」
と、モンジャがいった。
「アホウ鳥でもけしからん。こら、チビ、どこへ行った？　おーい、クプクプ。あのアホウ鳥をやっつけろ！」
「ぼくが？　どうして？」
「けしからん鳥だからだ。あの帆柱の上にとまっているだろう？　あいつをやっつけろ。弓をうて、ピストルをうて、鉄砲をうて、大砲をうて！」
「そんなもの、ないもん」
「ない？　それならば、帆柱をのぼっていって、つかまえろ」
「ぼくが？　そんなことできやしないよ」

「やれといったら、やるんだ！　やらないと夕食はヌキだぞ」
しかたなしにクプクプは帆柱にのぼりはじめた。しかしなれていないので、一メートルのぼっては五十センチすべりおち、また五十センチのぼっては一メートルすべりおちた。これではいつまでたっても同じである。
「だらしのないやつだ！　そこをどけ！」
と、とうとうごうを煮やしたナンジャがどなった。
「七つの海と百三十三の川の男ナンジャさまが模範をしめしてやる」
そういって彼は帆柱に抱きつこうとしたが、そこで手をとどめてモンジャをふりむいた。
「おい、モンジャ。おまえ、やってくれないか？」
「自分でやったらいいじゃないか」
「帆柱にのぼるなんてことはわけはない。しかし。おれは重すぎる。太っているからな。もし帆柱が折れでもしたら船がうごかなくなる。それではみんなに申しわけがない」
「おれはきょうはすこし頭がいたい。船よいかもしれない」
と、ヒョロのモンジャはしりごみした。
「だって、おまえは、海と川と沼と水タマリの男だろう？」
「まあ、そういうわけだな」
「そんなら船よいなんかするはずがない。おまえは手もながいから、うまくあの鳥めをつかまえられるはずだ」

ヒョロのモンジャはいいくるめられて、帆柱をよじのぼりはじめた。クプクプよりはじょうずだった。彼はてっぺん近くまでのぼって、カモメにむかって手をのばした。するとカモメはひょいととびたって、すこし横の帆のはじにとまった。モンジャは苦労をして、からだをずらして、もう一度手をのばすと、カモメはまたひょいと反対側の帆の上に移った。

「おーい、何をしている？」

「ダメだあ。こいつには羽がある」

「そんなことははじめからわかっている。そんな片手なんかのばさないで、両手をいっぺんに使え！」

と、デブのナンジャが下からどなった。

そこでヒョロのモンジャは両手をのばした。アッというまもなかった。彼のからだは空中で一回転して、帆柱の根元で上を見あげていたナンジャの上に落っこってきた。

ガラガラガラ、ドシン！

これが逆で、デブのナンジャが落っこってきたのなら、もっとものすごい音がしただろう。モンジャは手足をバタバタやり、下敷になったナンジャはカエルがふみつぶされたような声をだした。

クプクプは、もうがまんできなかった。片手で口をおさえて、片手でおなかをおさえて笑ってしまった。

実際とんでもないことをしたものだ！

フウフウいって起きあがったふたりは、すごい顔をしてクプクプをにらみつけた。

「笑ったな、小僧」と、ナンジャがうなった。

「笑ったな、小僧」と、モンジャもうなった。

「おれたちが」

「チビに笑われて」

「黙っておとなしく」

「ひっこんでいると思うか！」

と、ふたりはおっかない顔をしてかわるがわるどなった。

「いいか、クプクプ。おまえはあのアホウ鳥をつかまえるんだ。つかまえるまで飯をやらんぞ！　いいな！」

そのままふたりはあらあらしく立ち去ってしまった。

いまはクプクプも笑うどころでなかった。泣きたいくらいだった。どうして羽のあるカモメを彼がつかまえることができるだろう。

クプクプは途方にくれて甲板に立ちすくんでいた。

気がつくと、だれかの手が肩にのっていた。

ふりむくと大男ヌボーが、ニコニコ笑いながらクプクプのうしろに立っている。

ヌボーのことを、クプクプは心のやさしい人だと信じていた。それなのにヌボーは、クプクプ

がナンジャたちにいじめられていても、ちっとも助けてはくれなかった。見て見ぬふりをしているのだ。だからクプクプは、ちかごろではヌボーをうらんでいた。大男ヌボーは力が強い。ちょっといってくれたら、ナンジャもモンジャも今のように自分をこき使うのをやめるだろうに。

「クプクプ、どうしたね？」と、大男ヌボーはいった。

「だって、だって……」

と、クプクプは胸がつまって、ことばがでなかった。

「わかっている」

と、ヌボーはいって、クプクプの肩をたたいた。

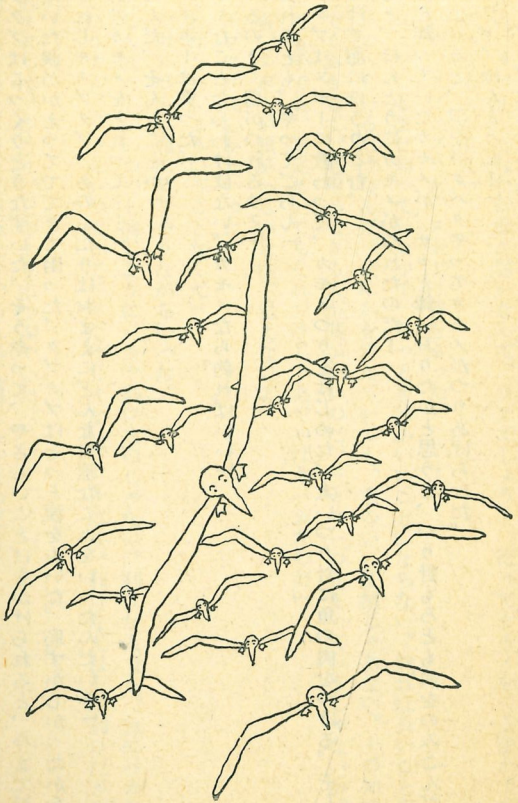
「おまえは、あのふたりのことをうらんでいるだろう？　しかし、うらむんじゃない。あのふたりはほかにいばる相手がいないのだ。おまえがくる前は、あのふたりがいじめられていたんだ。普通の人間は、えてしてああなるんだよ。がまんをおし、クプクプ。あのふたりだってわるい男じゃない。じきにおまえをいじめたりしなくなるさ」

クプクプはうなずいた。彼にヌボーのいうことがすぐ理解できたからではない。そうやって、久しぶりにやさしいことばをかけられたのがうれしかったのだ。

「おまえは、このおれのこともうらんでいたのだろう？」

とヌボーはつづけた。

「おれはおまえをわざと助けなかった。いやなことや苦しいことがまんできなければ一人まえの船乗りになれないからな。いいかね、クプクプ、海は美しくやさしいときもあるが、とても



おそろしく冷たくなるときもある。おまえはだんだんと強くならなくちゃいけないんだよ」

クプクプはこっくりとうなずいた。そうやって、やさしいことばをかけられると、今までがまんしていた涙がかえってでてきて困った。クプクプはそっと涙をふいた。恥ずかしかったからだ。

「それじゃクプクプ、あのふたりはおまえにどんな無理なことをいったんだい？」

「あのカモメをとれって……」

「なんだ、そんなことか」

と、ヌボーは笑った。

「そんなことならわけはない。カモメなら釣ればいい」

「つるの？　鳥がつれるの？」

「つれるとも。やってごらん」

クプクプはヌボーに教わって、カモメつりをはじめた。太いつり針に魚の肉をつける。そして糸をつけて海にほうりこむ。

すると、ほんとうにカモメがつれたのだ！

上空を舞っていたカモメが、サッと舞いおりたかと思うと、つり針もろとも餌をのみこんだ。たぐりよせると、羽をバタバタやってカモメがつりあげられた。

「ウワッ、ほんとうだ！」

と、クプクプはさけんだ。

「ねえ、ヌボー。これはカモメなの、アホウ鳥なの？」

「そんなこと、おれが知るわけないじゃないか。なにしろおれは前にもいったとおり、アタマが弱いんだから。だが、カモメにはいくつも種類がある。アホウ鳥だってそのひとつだ」

「ねえ、ヌボー。あなたが頭が弱いなんて、ウソでしょう？　だってカモメをつる法だってちゃんと知ってるんだもん」

「いいや、クプクプ」と、ヌボーは首をふった。

「カモメをつる法を知っていたって、ちっとも頭がいいことにならない。おれは長いこと海にいたから知っているだけなんだ。なにかを覚えていても、頭のいい証拠じゃあない。その知識から自分でくふうして、応用ができる人が頭がいいのだ。バカの一つ覚えっていうじゃないか。たとえ百でも千でも、覚えていてもそれだけじゃあやっぱりバカなのだ」

「でも、ヌボーが頭がわるいとは、思えないよ」

と、クプクプは心からいった。

「それはなあ、こういうことなんだ」

と、大男ヌボーは海に目をやりながらいった。

「同じ人間でも、いつでも同じようにバカや利口なのじゃない。利口な人でも、急にバカなことをしたりする。バカはいつだってバカだけじゃない。ときには、利口な人以上に利口だったりする」

大男ヌボーは、ひとりごとのようにつぶやいた。

「利口になったりバカになったり、それが人間というものだよ」

海はずっと静かであった。しかし、いくらかウネリの高い日もあった。

そういうとき、クプクプははじめて船よいを経験した。

彼はテーブルの上を片づけていた。夕食はとうにすんで、ほとんどの者がゴロゴロ寝いっていた。しかし、クプクプはテーブルを片づけなければならない。船はゆっくりと右に傾き、左に傾いていた。

テーブルの上のコップが、いきなりスルスルとすべりだして、あやうく落っこちそうになった。クプクプがあわてておさえようとすると、コップはテーブルの端でピタリととまり、今度は反対の方へすべりだした。右へ行ったり左へ行ったり、クプクプの目はそれを追って右へ行ったり左へ行ったりした。

急に気持ちがわるくなってきた。胸からのどにツバがこみあげてくる。クプクプはしばらくがまんしていたが、たまらなくなって、甲板へ走りでていって、船べりから外の海へ吐いた。はくものがみんなくなってからも、まだいくらでもはきたかったが、もう何にもでてこなかった。

クプクプはフラフラしながら船室へもどり、死んだように横になった。ほんとうに死んでしまったほうがマシだと思った。そのくらい苦しかったのだ。

しかし、そんな苦しさもはじめのうちだけだった。日がたつにつれ、かなり船がゆれるときでも、クプクプはもう平気になっていた。

それよりもクプクプが困ったのは船長のあつかい方である。老船長はひどくきげんが変わりやすかった。カンシャクもちで、おまけにモウロクしていた。

船長はひとりだけ別の船長室に住んでいた。

もっともほんのちっぽけな部屋だったが、それでもちゃんとベッドがあった。

毎朝、クプクプは船長のところにコーヒーをもってゆく。船長は小がらのからだをエビのように丸めて、すっぽり毛布をかぶっている。どんなに熱帯の暑い気候だろうが、毛布をかぶることをやめないのだ。どちらが頭だか見当がつかない。

「船長さん、コーヒーですよ」

すると、足と思っていたところが返事をしたりする。

「なんじゃ、まずそうなコーヒーじゃな」と、かならず彼はどなった。

一口すすると、

「おや、これはうまいぞ。こらクプクプ。こんなおいしいコーヒーを入れてはならん。コーヒーを飲みすぎると、わしは胃がわるくなるんじゃ」

なんでも文句をいった。起きたては不きげんなのである。

「パイプ！」

と、コーヒーをのみおわると老船長はいった。

「けさはどのパイプにしようかな。そうだ、十一番じゃ。十一番のパイプをもってこい」

彼は三十本のパイプをもっている。それが戸だなの中にズラリとならべてある。その日の気分によって、いろんなパイプを使用するのである。

とても不きげんなときには、船長はこうどなった。

「八番！　八番のでっかいやつ！」

それは、いつぞやクプクプが苦労をしてそうじをしたホラ貝よりも大きなパイプだった。これにいっぱいキザミタバコをつめて吸いだすと、部屋じゅうもうもうと煙がたちこめて、息をするのも苦しかった。

といって、いつも不きげんだとはかぎらない。南海の天気が変わりやすいように、おこっていたと思うと笑いだし、ニコニコしていたと思うとカミナリが落ちる。

きげんがいいときは、クプクプが、

「はい、船長」

というと、老船長はニコニコしてパチパチと手をたたいた。

「かしこまりました、船長！」

というと、もっとパチパチと手をたたいた。

そういうときをねらって、ある日クプクプは質問をした。

「ねえ、船長さん。この船はいったいどこへ行くの？」

「それじゃ。わしもそのことで気をやんでいる。それに答えるのはたいへんむずかしいことなのじゃ」

「どうしてそんなにむずかしいの？」

「まず第一に、この辺の海は潮流がある。どこへ流れてゆくかもわからん。第二に、もうそろそろ貿易風の季節だ。こいつが吹きだしたら、どこへ流れてゆくか、ますますわからん。第三に、この船が現在どこにいるかもすこぶるあやふやなのじゃ。どうだ、むずかしさがわかったろう？」

「それはわかったけど」と、クプクプは不安になってきた。「それじゃ、ぼく困るなあ」

「こりゃ、船長にむかってはもっと敬語を使うんじゃ」

「はい、船長」

「そうじゃ、そうじゃ」と、老船長はパチパチと手をたたいた。

「だけど船長さん」

と、クプクプはすっかり心配になってきていった。

「海図を調べて船の位置をたしかめたほうがよくありませんか」

「そうじゃ、それはよいところに気がついた」

船長はテーブルの上に、海図をひろげ、じっと見つめて考えこんだ。それからまたじっと見つめて、フウムとうなった。それから三たびじっと見つめて、フウムといった。

「なにかわかりましたか？」

「さっぱりわからん」

「どうしてわからないんです？」

「どうしてって、この海図はまるっきりインチキじゃ。どこに島があるかもわからん。大陸のあるべきところが海になっておる」

クプクプは、ヌボーのことばを思いだした。老船長は目がわるいのだ。きっと海図も見えないのにちがいない。

「船長さん、メガネをかけたほうがいいんじゃないですか？」

「メガネじゃと？」

と、たちまち老船長は不きげんになってきた。

「そんなものいらん」

「だけど、海図が見えないんじゃないですか？」

「むろん見えぬ。しかし、わしくらいの船乗りになると、なんにも見えなくっとも、船は走るのじゃ。着くべきところにちゃんと着くのじゃ。もしそれが着かなかったら、陸が沈んでしまったか、船が沈んでしまったかの、どっちかじゃ」

「無責任だなあ」

「無責任じゃない。こらクプクプ、わしはおまえが生まれるずうっと前の、そのずうっと前の、そのまたずうっと前から船乗りをしておる。わしがまちがえるなんてことは……」

そのときである。どこかで、なにかさけぶ声がした。甲板の上らしい。ふたりは耳をすました。

「おうーい、島だぞうー」

たしかにそう聞こえた。

クプクプは部屋をとびだした。一気に甲板へかけあがった。

「おうーい、島だぞう！」

みんな甲板にでてきた。船べりに並んで、小手をかざして水平線を見やっている。ナンジャもモンジャもニコニコしている。よほどうれしいらしい。クプクプだって胸がワクワクした。海はすばらしいが、それも毎日毎日海ばっかしではあきてくる。陸が見たい。土を足でふみたい。ゆれたりしない、しっかりした大地の上を走ってみたい。

その島がしだいに近づいてくる。

「こりゃどうじゃ」

と、船長の声がした。

船長はさすがにメガネをかけていた。鼻メガネだ。そのうえに遠メガネをあてがって島をながめている。

「なんだか、見たこともない島だぞ」

と、船長はつぶやいた。

「こりゃどうもヘンチクリンじゃぞ。このあたりにあんな島はなかったんじゃがなあ」

「無責任だなあ」とクプクプは思った。しかし、どんな島であっても、早く大地をふみたかった。

「港もあるぞ」と、船長がつぶやいた。

それから彼は、小がらなからだにしてはびっくりするような大きな声でさけんだ。

「よし！　野郎ども、じゃない。者ども、じゃない。……おうーい、みんなあ、出港！　じゃない、入港じゃあ！」

はたして、どんな島なのだろうか？

ナマケモノの島

港というのは、たいてい活気があるものだ。

昔も今も港がにぎやかなことに変わりがない。未来でもそうだろう。文明国でも未開の土地でも、港はそこの玄関口だからだ。裸の土人が住む島でも、見なれぬ船が現われたりすれば、海岸にはワイワイガヤガヤ人が群れ、さっそくカヌーがこぎよせてくることだろう。

ところが、このときクプクプの乗っている船が近づいても、その港はがらんとして、だれもとびでてくる者がない。港といっても、わずか石でサンバシらしいものがこしらえてあるだけで、そこには五、六本の丸太が浮いていた。小舟ひとつ見あたらないのだ。

「おかしいぞ」

と、老船長はつぶやいた。

「人っ子ひとり見えんわい」

「おかしいですね」

と、デブのナンジャも相づちをうった。

「ニワトリ一羽見えませんね」

「ブタ一匹見えないですねえ」

と、ヒョロのモンジャもいった。

「ブタやニワトリはどうでもいい」

と、船長は不きげんにあごひげをしごいた。

「人間がでてこないとはけしからん。いやしくもわしの船が入港するというのに、出迎えにやってこないのが気にくわん。ひとつ汽笛をならしてみるか」

「キテキ？　そんなものこの船にはありませんぜ」

「そうじゃった。それならばホラ貝をならしてみるか」

「あいにくとホラ貝もありません」

「なんじゃと！　そんなにこの船にはなんにもないのか」

「ありませんとも。あるのは船長のパイプばっかりでさあ。あの八番のパイプを吹いてみたらどうで？　ホラ貝よりもでかい音がしますぜ」

「なんじゃと！」

と、老船長はまっかになった。

「わしのたいせつなパイプをホラ貝といっしょくたにされてたまるものか！」

すると、そのとき大男のヌボーがすすみでていった。

「船長、わしがひとつどなってみますか？」

「そうじゃ、おまえを忘れておった」と、老船長はおこるのをやめ、パチパチと手をたたいた。

「まずソーッとどなってくれ。おまえが力いっぱいどなると船がバラバラになっちまうから

な」

そこで大男ヌボーはまず息を吸いこんだ。すると彼のおなかはだんだんふくれだし、タイコのようになり、それから大ダイコのようになり、ついに丘のようにふくれあがった。

「もういい。もういい」と、ハラハラして船長はいった。

大男ヌボーは小さく口をひらくと、手で丘のようにふくれた腹をおしながら、少しずつ息を吐きだしていった。はじめは風の吹くようであった。それから遠雷のとどろきに似てきた。

ウオーン、ウオーン、ウオーン！

その音は海の上にさざ波をおこし、岸べにぶつかるとたちまち反響していっそう高くひびきわたった。

ワオーン、ワオーン、ワオーン！

すると、むこうの岩のかげから、バサバサと羽をひろげて、一羽のニワトリがとびだすのが見えた。

「ニワトリだ。ニワトリがいるぞ！」と、デブのナンジャが叫び声をあげた。

「ブタだ。ブタもでてきたぞ！」と、ヒョロのモンジャもおどりあがった。

ほんとうにかなり大きなブタが、アワをくったように砂浜を走りまわって、またどこかへ消えた。

「人間はどうした？　人間はでてこんのか？」

と、老船長がうめいた。

「いっこうにでてきませんなあ。しかしブタやニワトリがいるからにはだいじょうぶです。人間のいる証拠でさあ」

「そんなことは証拠にならん」

と、船長はまた不きげんになった。

「野生のブタやニワトリだっていくらもおる。それに、三十年ばかり前、わしが寄った島ではブタが王さまじゃった。ブタの王さまが、カラスの家来をひきつれて住んでおった」

「しかし、ちゃんと船着場ができているんですからねえ。ブタは船着場をつくりゃしませんよ」

「おろか者め！」と、船長はもっと不きげんになった。「わしが五十年ほど前、寄った島じゃあヒキガエルどもがちゃんと船着場をこしらえておったもんじゃ」

「へえ、ヒキガエルがねえ？」

「そうじゃとも。そればっかしか、ヒキガエルの王さまはちゃんとパイプでタバコをふかしておった。わしの四番のパイプはそのときヒキガエルにもらったものだ」

「へえ、パイプをふかすヒキガエル？」

と、デブのナンジャもさすがにおどろいたようだった。

「おれだって七つの海を知ってるが、そんな島は聞いたこともない。モンジャ、おまえ知ってるか？」

「いいや」

と、ヒョロのモンジャも首をふった。
「おれの知っている海と川と沼と水たまりにはそんな島はなかったなあ」
「むろんそうじゃろう」
と、老船長は急にきげんがよくなってきた。
「なにしろわしは、おまえたちが生まれる前の、そのずーっと前の、そのまたずーっと前からの船乗りじゃからなあ」
「へええ、船長はそんなに年寄りなんですか」
「年寄りじゃとも」
「つまり老いぼれというわけで？」
「老いぼれじゃとも、……なんだと？　このわしが老いぼれだと？　このわしのどこが老いぼれだ？　わしは耳だってよく聞こえる。聞こえないときがあっても、それは聞きたくないときじゃ。目だってよく見える！　見えないときがあっても、それは見たくないときじゃ！　わしは一度に十本のパイプでタバコをふかすことができる！　そのわしのどこが……」
「船長、船長」
と、かたわらから大男ヌボーが声をかけた。
「そんなにどなっていないで早く島を探検してみたらどうですか。船にも水がたりなくなっていますし、野菜だってあとわずかです」
「そうじゃった」

と、老船長は首をふった。
「そうじゃ。野郎ども、じゃない、者どもじゃない……おうい、みんなあ、タライを、いや、ボートをおろせーい」

ボートに乗りこんだのは、まず大男ヌボーであった。なにしろはじめての島であるから、どんな猛獣がいるかもわからない。そのときヌボーの怪力が必要なのだ。
しかしヌボーが乗りこむと、小さなボートはそれだけでほとんど満員という有様であった。それで、ヒョロのモンジャが次に乗りこんだ。彼はふしぎと食物を見つけだす才能を買われたわけだ。もうひとりおまけに、クプクプも乗りこむことができた。クプクプは体重がいくらもない。子ども雑誌でいえばまあフロクというわけだった。
さて、三人が岸にボートをこぎよせてみると、あたりはひっそりして、さっきのブタやニワトリのかげも見えない。
「あのニワトリとブタはどこへ行っちまったかな。まずあいつをつかまえて今夜のおかずにしなくちゃあ」
と、モンジャがつぶやいた。
「ニワトリはいいが、ブタはいかん」
と、ヌボーがいった。
「おまえは回教徒であることを忘れたか」

「回教徒だって？　おれはそんなもんじゃあない。いつだったかはそうだったが、今はブタだって食べていいんだ」

「なぜだ？　いつからそうなったんだ？」

「いつってことはないが、とにかくおれはおいしそうなブタを見ると回教徒じゃなくなるんだ」

「この不信心ものめ！」

ヌボーとモンジャがいい争っているうちに、クプクプは陸地にとびあがった。

ずっしりしたその感触！　それは船やボートのようにゆらゆらゆれることはない。クプクプは小イヌのようにそこらを走りたかった。

「ここでケンカをしていてもはじまらない」

と、後方でヌボーの声がした。

「とにかくむこうへ行ってみよう。船長はまず人間をさがしだせといっていたから」

「人間だって？　人間なんぞつまらない。人間を食べるのは、おれだってイヤだ。それよりブタを……」

「だまれ、モンジャ！　そんなことをいってると、人食い土人がでてきてもおれはおまえを助けないぞ」

ヒョロのモンジャはすぐにおとなしくなった。

三人は島の奥へむかって歩いていった。ところどころにヤシの木がはえている。しかし概して

荒れはてた島のようだった。

丘をのぼっておりると、船はもう見えなくなった。それでも人っ子ひとり姿をあらわさない。やはり無人島なのだろうか。

「あっ、あれを見ろ」

と、ふいにモンジャが声をあげた。

「あれは家らしいぞ」

なるほど、石づくりの家らしいものがいくつも並んでいる。むかしはちゃんとした家だったのかもしれないが、今は大部分がくずれかかって、動くもののかげもなかった。

「廃墟かもしれないね」とクプクプはいった。

「ハイキョ？　なんだね、それは？」とモンジャがきいた。

「つまり、昔の建物の跡ってことさ。今は人が住んでいないんだ」

「チェッ、生意気な。そんなむずかしいことをいいやがって。しかし、ハイキョじゃあ、食物だってないってことかな」

と、ヒョロのモンジャは急に悲しそうな顔になった。

三人が近づいてみても、やはり人影はない。石の家もほこりだらけでくずれかかっている。

「やはり、そのハイキョってやつだ」

と、モンジャはにがりきっていった。

「おもしろくもねえ」

そのときである。彼の立っている足元の砂がムクムクとうごいた。そして、そのあたりからこんな声がきこえた。

「ちょっと、どいてくれないかな。口に砂がはいるから」

「ヒエッ！」と、ヒョロのモンジャはとびあがって叫びたてた。

「す、砂が口をきいた！」

ヌボーが駈けつけてきた。

「だれだ！　いま口をきいたのはだれだ？」

「おいらだよ」

と、砂がいったかと思うと、そのあたりからひょっこり土人の首がでてきた。やせた、色のくろい土人である。

「ヒエッ！」と、またモンジャが叫び声をあげた。

「な、なま首だあ」

「あわてるな。この土人は砂にもぐっているんだ。ところで土人さん、どうしてそんなことしてるんだね？」

「おいら、水をのもうと思ってね」と、土人はいった。

「水だって？　地下水でも掘りあてるのかね？」

「いんや、そのうちスコールがくるはずなんだよ。スコールが降ってきたら、口をあいてそれをのむんだよ」

「雨水をかい？　じゃあこの島には清水はないんだな」

「いんや、むこうへ行きゃあ、泉がわいてるがね。わざわざ歩いていくのはメンドーじゃないか」

「あきれたナマケモノだな。そんなことといって、いつスコールがくるかわからないじゃないか」

と、ヌボーは太陽のギラギラ輝いている空を見あげた。

「いんや、さっきカミナリが鳴ったよ。どえらいスコールがくるぜ」

「カミナリだって？」

と、ヌボーはしぶい顔をした。きっとさきほど自分がどなった声をまちがえたのにちがいあるまい。

「それにしたって、わざわざ砂にもぐらなくてもいいじゃないか」

「うん」と、その土人はこたえた。「だけどおいら、パンツがないんだよ。もぐってないと、こんなふうにあおむけになると、見っともないだろ？」

「そりゃそうだなあ。しかし、そんなナマケモノで恥ずかしくないかい？」

「この島じゃあ、みんなそうだよ」

「みんなどこにいるんだね？」

「どっかにいるけど、どこにいるか知らない。メンドーだから。ああ、もうしゃべるのがメンドーになった」

土人は口をつぐみ、目もつぶってしまった。ヌボーがいくら問いかけても、相手はもう口をひらきはしなかった。

「これじゃ、しようがないな」

と、さすがにヌボーもサジを投げた。

「もっとべつの土人をさがすとしよう」

くずれかかった家を一軒一軒のぞいていったが、どうもみんなルスらしかった。そのうち、家の裏手にヤシの木が立っていて、その根元に、三人ほど裸の土人がねそべっていた。

「やあ、みんな、こんにちは」と、ヌボーがいった。

「こん」と、土人のひとりがこたえた。

「ちわ」と、もうひとりがさもメンドーくさげにつけたした。

「なにしてるんだね？」

「ヤシ、の、実」とひとりがいった。

それきりだれも口をきかなかった。

「ねえ、ヌボー」とクプクプは意見をのべてみた。「きっと、この人たち、ヤシの実が落っこちるのを待ってるんじゃない？」

「どうもそうらしい」と、ヌボーも弱ったような顔をした。

「モノグサばっかり住んでるんだなあ」

「おい、おまえたち」

と、ヒョロのモンジャがどなりたてた。

「この島には、ブタとニワトリはたんといるかね？」

土人のひとりがのろのろと首をふった。

「あんまりいないのか？　え、ブタは何匹ほどだ？」

土人はのろのろと指を一本たてた。

「え、一匹だって！」

と、モンジャは情けなさそうな声をだした。

「それじゃニワトリは何羽だ？」

土人はやはりのろのろと指を一本たてた。

「たった一羽か！」

と、モンジャは泣きだしそうな声をだした。

「それじゃ、さっきおれたちが見たのが全部なんだ。ああ、ああ、ああ、おれは腹がすいてきた！」

「ねえ」と、クプクプはねそべっている土人のひとりにいった。

「この島には、あんまりナマケモノじゃない人はいないの？　せめて、口をきくのがメンドーじゃない人が？」

相手はまた指を一本たててみせた。

「やっぱりひとりか。でも、とにかくその人をさがしたほうがよさそうだよ、ヌボー」

ヌボーもうなずいた。

ちょうどそのとき、むこうの丘からひとりの土人がおりてくるのが見えた。肩になにかツボのようなものをぶらさげている。腰にもちゃんとヤシの葉でつくったミノのようなものを巻いている。

「アッ、あの人はちゃんと歩いているよ」

「ほんとだ。あいつはそれほどナマケモノじゃなさそうだぞ」

それでも、その土人は歩くのがあんまり早くはなかった。いかにもゆっくりと歩いてくる。三人は待ちかねて、とうとう相手を迎えに走りだしていった。

「こんにちわ」

と、ヌボーは土人の前まで走ってゆくと、いった。

「そのツボはなんだね？」

「おいら、水くんできたんだよ」と、土人はこたえた。「泉まで行って、きれいな水をくんできたんだよ」

「この人はナマケモノじゃない！」と、思わずクプクプは叫んだ。

すると、相手の顔がみるみる悲しそうにゆがんできた。そして、こうつぶやいた。

「あんたたちは、この島の人じゃあないんだろ？　だったら、おいらのこと、そんなにバカにしないでおくれよ」

「バカにする？　いつ、きみをバカにした？」

と、ヌボーはおどろいてたずねた。

「だって、おいらのことを、ナマケモノじゃない、って、いったじゃないか」

「だって、そのほうがいいじゃないの」

と、クプクプもおどろいていった。

「よくないんだよ。この島じゃあ、ナマケモノでないとケイベツされるんだよ」

「変わった島だなあ！」

と、思わずクプクプはつぶやいた。

「こういうわけなんだよ」と、その土人は説明をした。「むかしは、この島の人間はとても勤勉だった。キンベン島って名まえがついたくらいにね。だから、家だって船着場だってとてもりっぱなものをこしらえた。ところが、そのうちにいろいろぐあいのわるいことが起こってきたんだよ」

「どんなこと？」

「勤勉なのはいいんだよ。でも、あまり勤勉すぎると、心がギスギスしてくることもある。どうしてもアクセクしてくる。すると、いろんなケンカや争いが起こってきた。それだもので、この島の王さまは、みんなナマケモノになれっておふれをだした。ナマケモノでない人間は、みんなよその島に追放しちまった。いまじゃナマケモノじゃないのはおいらひとりだよ」

「いいじゃないか、ナマケモノより」

「でも、みんなはおいらのことをケイベツしている。もっともだれも文句をいわないけどね。

文句をいうのがメンドーくさいから」

「そりゃ、ひどいなあ」

「でも、この島は平和だよ。おいらも、もっとナマケモノになりたいんだが。人の性分はなかなか変わらないんでねえ」

と、その土人は悲しげに首をふった。

「べつの島に行ったらどう？」

「でも、おいらこの島が好きなんだよ。おいらだって、ほかの島の人間にくらべちゃ、ずいぶんナマケモノだ。ここじゃ、勝ったり負けたり気にやむことはないし……」

そのとき、ふとクプクプはその土人の肩からぶらさげているツボの口に目をつけた。なにか紙を丸めたようなものでせんをしてある。それがこんな土人の島にはないような紙だった。

「ちょっと、それ、見せてね」

クプクプは許しを得て、その丸めた紙をつぼの口からはずしてみた。そして、ほぐしてみると、それはマス目になった原稿用紙で、なにか書きつけてあるようだった。しかも日本語ではないか。

さて船乗りクプクプは、

文字はそれきりだった。クプクプは首をかしげた。と、電光のように、かすかな記憶が少年の

頭によみがえってきた。

「そうだ、あのへんな小説家……あの、キタ・モリオ……とかいう……」

と、彼はどこか遠くを見るような目をしてつぶやいた。

あきびんの手紙

「え、キタ・モリオだって？」

かたわらから、ふいに大男ヌボーが大声でいって、身をのりだしてきた。

「それはほんとうか？　あいつはどこにいるんだ？」

キタ・モリオという名まえをきいた瞬間、クプクプにはすべてが思いだされてきた。自分はほんとうはタローであり、宿題をなまけて、あのおかしな本を読んだりしたため、こんなどことも見当のつかぬ島にやってきていることがはっきりと思いだされてきたのだ。

そうだ、あの小説家のゆくえを、なんとしてもつきとめなければならない。

「ねえ、この原稿用紙、いったいどこにあったの？」

と、クプクプでありタローである少年はせきこんで問いかけた。

「この紙のことかい？」

と、相手の土人はとてものんびりした声でいった。

「こんなもの、おいらの家にいきゃあ、たくさんあるよ。欲しければあげるよ」

「だって、どこからあんたはこれ持ってきたの？」
「持ってきたんじゃないよ。おいらの家にいたおかしな人がもっていた。みんなクシャクシャにしておいてった」
「そのおかしな人って？」
「この島の人間じゃない。どっからか流れついてきた、色の白い人間だ」
「白いっていうより、むしろ黄色いんじゃない？」
「そうだね。でも日に焼けてて、黄色というより渋茶色だった。それはおいらたちよりずっと白く黄色かったが、おいらみたいに裸じゃない。ちゃんとヨーフクというものを着てた。それから、トランクとかいう箱を持ってて、そんなかに、こんな紙をいっぱいと、マンネンヒツとかいう奇妙なものをもってたよ」
「やっぱり小説家だ！」と、クプクプは叫んだ。
「たしかにキタ・モリオのやつにちがいない！」と、大男ヌボーも叫んだ。
「なんだい、そのおかしな名まえのやつは？」
と、けげんそうな顔をして、ヒョロのモンジャが口をはさんだ。
「それを説明するのはなかなかむずかしい」
と、ヌボーがいった。
「しかしな、モンジャ、おまえはこんなブタとニワトリが一匹ずつしかいない島に着くのは好きじゃあるまい？」

「もちろんだとも」
「おまえはいま、おかしな名まえといったが、ナンジャにしろモンジャにしろ、それからヌボーにしろ、もっとおかしな名まえじゃないか？」
「それもそうだな」
「いいかねモンジャ、そのキタ・モリオっていう男を見つけだせば、ひょっとすると、おれたちはもっといい名まえをつけてもらえたり、ブタやニワトリが山ほどと、ブドウ酒が川になって流れている島に行けるかもしれないのだぞ」
「ブドウ酒の川だって？」
と、ヒョロのモンジャはうめき声をだした。
「そりゃあいい。ぜひそうしてくれ」
「だったらおまえはおとなしく黙っていろ。いま、そのたいせつな男の居場所をつきとめるからな」
そういって、ヌボーは、特別にやさしい声になって、あまりナマケモノでない土人に問いかけた。
「さあきみ、そのマンネンヒツをもっている男のところへ案内してくれ」
「そりゃあダメだ。その人はもうどこかへ行っちゃったもの」
「行っちまったって？」
と、さすがのヌボーも情けない声をだした。

土人の話によるとこうだった。

そのキタ・モリオ氏らしい男は、ある日、どこからともなくイカダに乗ってこの島に流れついてきたそうである。彼はすっかりへばっていて、島が近づくと大声で助けを求めた。しかし、海岸にいた土人たちはみんなナマケモノであったので、だれひとり助けにいこうとする者がなかった。キタ・モリオ氏にちがいない男はいかにも情けない声で泣きわめいたので、ようやく、ひとりしかいないあんまりナマケモノでない土人が聞きつけて、イカダを浜までひっぱってきた。そしてヨーフクを着た異国の漂流者を自分の家へつれていき、親切に世話をしてやった。

キタ・モリオ氏は、この島が気にいったらしかった。

彼は土人たちよりも、もっとごろごろと一日じゅう寝ていた。なにしろ、あまりナマケモノでない土人がついているので、彼はうごかずに水やヤシの実をもらうことができたし、寝ることにかけては、彼はどんなナマケモノの土人にも負けなかった。そのため、土人たちはキタ・モリオ氏を王さまにスイセンしようとまでしたのだ。

「それだったら、彼はいつまでもこの島にいたってよいはずなのになあ」

と、ヌボーが口をはさんだ。

「それが、そうも行かなかったんだよ」

と、あまりナマケモノでない土人はこたえた。

「あの人はやっぱりこの島の人間じゃないんだから、そうそう王さまになれるほどえらいナマケモノじゃなかったんだよ」

半月ほどごろごろしていると、キタ・モリオ氏はなまけるのにあきがきたようだった。

彼はむっくり起きあがると、島に一匹しかいないブタをつかまえようとくわだてたのだ。そして、いっしょうけんめい追っかけたりころんだり、ころんだり追っかけたりしたが、なにぶん彼は走るのがひじょうにへただったので、ブタはいつもユウユウと逃げ、むこうのほうでブウブウと鼻をならした。そこでキタ・モリオ氏は今度はニワトリを追いかけたが、これも似たような結果に終わった。

「そいつがノロマだったのはまずよかった」

と、ヒョロのモンジャがつぶやいた。

キタ・モリオ氏は、ブタとニワトリをあきらめると、今度は土人たちがねそべっているところへやってきて、オサルのカゴヤだホイサッサという踊りをおどった。しかし、ナマケモノの土人たちはだれひとりまねようとする者もなかった。そこでキタ・モリオ氏は今度はドドンパという踊りをおどったが、やはり反応はなかった。

そのうえ土人たちはこの異国の男をうるさいキチガイと考え、王さまにする案をやめてしまった。

「しかし、それだけだったらあの人はやっぱりこの島にいたろうな。ところがある日、一本のあきびんが島に流れてきたんだよ。そのときからあの人はほんとうに頭がおかしくなっちまったんだ」

と、あまりナマケモノでない土人は話をつづけた。

あきびんは青い海を流れてきた。あまりナマケモノでない土人がそれを見つけ、おかしな異国人のところへ持っていった。あきびんには土人にはわからない文字でかいた手紙がはいっていたが、それを見るとキタ・モリオ氏は顔いろを変えた。

「なんという執念ぶかさだ！」

と、彼はうなったが、それこそキタ・モリオ氏に『船乗りクプクプ』の本をかくことを命じた編集者の手紙だったのだ。

彼はあまりナマケモノでない土人に手紙を読んできかせた。

なんともインチキきわまりないペテン師である小説家へ。

小社は貴下のおかげで莫大な損害をこうむったことを報告する義務を有します。貴下は『船乗りクプクプ』こそ十万部のベスト・セラーであるとホラをふいておられました。それを書きもせず貴下は逃走しましたが、貴下の意志にしたがい、小社は思いきって、四ページしかない原稿を二百四十四ページの白紙をいれ単行本として発売しました。だまされついでに五万部をいっぺんに印刷しました。ところが、四万九千九百九十五部の返本の山となりました。

「そこまでよんだとき、あの人は喜んで叫んだよ」

と、あまりナマケモノでない土人はいった。

「それでも五冊は売れたじゃないか！　たった四ページしか活字のない本でも五冊も売れたんだ！　やっぱしおれの本はたいしたものだ、ってね。ところが、その手紙にはそのあとこう書いてあったんだ」

しかし、五部が売れたと思われるのは早計です。小社もはじめそう思ったのですが、たった一部の収入しかありませんでした。つまりあとの四部は万引きにあったとしか考えられません。小社の損害がいかに尽大であるかは、いかに頭のにぶい貴下にも理解できることでありましょう。できるかぎり早く原稿をかかれんことを希望、いや命令いたします。それによって損失を取り返せるとは小社も考えておりませんが、こうなったら当方も意地となり、地球上のいかなる土地に逃走せられようとも、貴下の白痴のごとき眠りを妨害するでありましょう。

この手紙を読み終わった瞬間から、キタ・モリオ氏はガゼン落ち着きがなくなった。彼はそわそわと不安げになり、もうオサルのカゴヤだホイサッサも踊らず、たくさんのヤシの実をくりぬいて、手紙をその中へ入れ、海へ流した。その手紙はこういうものであった。

商売のへたくそな出版社御中。

『船乗りクプクプ』は活字のある四ページをきりすて、定価を二倍にし、高級ノートとして売りだされたし。貴社の損失はたちどころに解消するでありましょう。ゆめ疑うなかれ。さらば、バイバイよ。

けれども、ヤシの実につめた手紙をながしたあとも、キタ・モリオ氏はやはり不安そうであった。彼は無責任な男にはちがいないが、同時に気の弱い男でもあったのだろう。そこでキタ・モリオ氏はなんとかして原稿を書こうと苦心だけはしたらしい。

「あの人はそれからというもの、イカダにしばりつけてきたトランクとかいう箱からこの紙をやたらとりだしちゃ、マンネンヒツというもので、せっせとおかしなことを書きだしたんだよ」

と、あんまりナマケモノでない土人は話をつづけた。

「あの人はぶつぶつひとりごとをいっていた。いつも、さて船乗りクプクプは……っていってたな。そしてそれを紙にかきつけて、頭をかきむしって、アクビをして、すぐに紙をクシャクシャに丸めて捨てちゃったよ。そいから新しい紙をひろげて、また、さて船乗りクプクプは……とかで終わっちまった。そうやって丸めて捨てた紙が、おいらのとこにゃたんとあるんだよ」

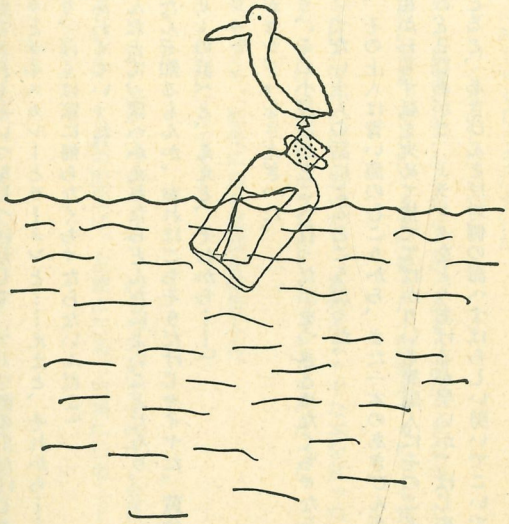
「ちょっと待ってくれ」

と、そのときヒョロのモンジャが口をだした。

「なあヌボー、もしそのおかしなやつが、さて船乗りクプクプは、そして海と川と沼と水たまりの男ナンジャさまは、ブドウ酒が川となっている島に到着した、と書いたら、ほんとうにそうなるのかい？」

「おれはそうなると思う」

と、考え考え大男ヌボーはこたえた。



「ようし、そんならおれもそいつを見つけだして、ブドウ酒の川だけじゃなく、七面鳥の丸焼きと小羊のシチュウとライスカレーとラーメンと……ええと、それから……」

「そんなことより、ぼくは家に帰らなくちゃならないんだよ」

と、クプクプはあわてていった。

たとえ宿題に悩んだとて、家へかえれたらどんなによいことだろう。

「おまえのことなんぞ知るもんか。おれはごちそうだけじゃイヤだ。黄金のノベ棒と、ダイヤモンドの谷と、ルビーの浜べと、ええと、それから……」

「やめろ、モンジャ」

と、大男ヌボーがモンジャをさえぎった。

「そんなことより、その小説家がどこへ行ったかをつきとめなくちゃならん」

あまりナマケモノでない土人の話によるとこうだった。

ほんの何日か前、その土人は青い海のむこうから、また一本のあきびんが、プカプカ漂ってくるのを発見した。相かわらず紙を丸めて捨ててばかりいる異国人にそのことを告げると、彼はたちまち一メートルほどとびあがり、トランクをとりあげるが早いか、はじめ乗ってきたイカダに駆けつけ、カイをとると、あきびんと反対側の海へすばらしい勢いでこいでいったということである。

「すると、つまり南のほうだな?」

「いんや、このへんの海は潮流があるから、南と西とまん中のほうへ行っただろ」

と、あまりナマケモノでない土人はこたえた。

「そうか、ようし」

と、大男ヌボーはおもおもしくうなずいた。

クプクプも黙ってこっくりをした。

しかし、はたして小説家が見つかるかどうか、あまり期待できなかった。なにしろ海は広いのだし、島だって無数にある。それにイカダに乗った小説家がフカにでも食べられてしまえばそれきりではないか。

それからクプクプは、土人の話を思いだし、あのインチキな本を買ったのは自分ひとりだけだったのかと考えると、よけい小説家がうらめしくなってくるのだった。

三人は船にもどってきて、船長に島の模様を報告した。

「たった一匹ずつしかないんですよ」

と、モンジャがいった。

「おまけにたいそう足の早いやつだそうで。わしの考えますには、全員で上陸して大包囲陣をつくるのがいいと思います。人員の配置は、左翼に三名、右翼に三名……」

「土人をつかまえるのか」

「いや、ブタのことで」

「だれがブタの話をしろといった? 人間はどうした、人間は。早くだれかわしの船を出むか

えにこないことには、わしは気分がすぐれん」
「それがダメですので」
と、大男ヌボーが説明をした。
「土人が五、六十人はいるんですが、みんなとてつもないナマケモノぞろいで」
「いくらナマケモノだといって、船を見にくることぐらいできるじゃろう」
と、船長は不きげんになった。
「とてもとても。なにしろやつらときたら、目をあけるのもオックウというほどなんで」
「それじゃなにかね」
と、船長は苦虫をかみつぶしたような顔になった。
「ただのひとりも、わしの船を出むかえにこんというわけかね？」
「思いだしました。たったひとり、あまりナマケモノでない土人がいました。それを連れてきましょうか」
「いらん、いらん」
と、船長はものすごく不きげんになって首をふった。
「たったひとりじゃ、どうもならん。ああ、ヒキガエルの島でも、五百匹のヒキガエルどもがわしの船を出むかえたものじゃった。こんな島は不都合じゃ。わしは気分がすぐれん。もう出港をする！」
そこであわてたのはヒョロのモンジャであった。

「船長、ブタはどうなるんで？　それからニワトリは？」
「そんなもの、どうでもいい。わしは気分がすぐれん。すぐ出港じゃ」
「といったって船長」
と、ほかの船員も反対した。
「船にはもうあんまり食糧がないんですぜ。水だって不足してます。せめて水やヤシの実をつみこまないことには……」
「うるさい！」
と、老船長はびっくりするほど大きな声でわめいた。
「船長の命令はゼッタイじゃ。船長はすべての判断をくだす。これに違反するものは、海員法第三百五十八条に……いや第百五十九条だったかな……まてよ、それとも第八条くらい……」
「カイインホウなんての、わしら聞いたことがありませんぜ」
「だまれ、だまれ。とにかく船長の命令には従わねばならん。そこでわしは命令するのじゃ」
老船長は顔じゅうまっかになると、ボロボロの帆がやぶけてしまいそうな声で叫んだ。
「ものども、出船じゃああ！」
老船長はすっかりコーフンして、さらに追っかけて命令した。
「グズグズするな。イカリなんぞ断ち切れえ！　帆をいっぱいにあげえ！　カイとシャモジでこぎだせえ！」
みんなあっちこっち駆けまわってイカリをぶちきり、帆をあげ、カイでこぎだした。船はだん

だんと浩をはなれ、それから折からの風をいっぱいに帆にはらんで走りだした。
みるみる島が遠ざかってゆく。
クプクプはさすがに心配になってきた。そっとヌボーに尋ねてみた。
「ねえ、ヌボー。出帆しちゃっていいの？　ほんとうに、船には食糧もすくないんだよ。船長さん、乱暴だなあ」
「老人のガンコさだからな」
と、ヌボーはいった。
「ああコーフンしだしたら、だれがなんといってもききやしないのさ。しかしクプクプ、このほうがおれたちには都合がいいのだぜ」
「どうして？」
「だって、一刻も早く小説家に追いつかにゃならないだろう」
そうだった。クプクプはイカダで西南の方角へ流れていったというキタ・モリオ氏のことを思いだした。なんといっても相手はイカダである。うまくゆけば、案外かんたんに追いつけるかもしれないではないか。
「おーい、ボーイ。どこへ行ったあ」と、船長の声がした。
「はい、船長」と、クプクプは大いそぎで駆けつけた。
「パイプじゃ。八番のでっかいやつ！」
「かしこまりました、船長」

クプクプもいっしょうけんめいである。ホラ貝よりも大きなパイプを持ってくると、船長はモウモウと煙突のように黒煙をたてながらタバコを吸いはじめた。
きげんがいくらかなおったようなので、クプクプはきいてみた。
「船長さん、今度はどちらへ行くんです？」
「そうじゃった。まだ方角をきめておらんかった」
「それじゃ、西南の方角がよくありませんか？」
「なぜじゃ」
「なぜって、なんとなくそんな気がするもん」
「こりゃ、ボーイ」
と、船長はまた不きげんになってきた。
「船長にはもっと敬語をつかえ。それに、なにが西南じゃ？　そんな方角はわしは気にくわん。そうじゃ、北東へ行くことにしよう」
「だって船長さん」
と、クプクプはおろおろと泣き声をたてた。北東ではまるきり反対の方角ではないか。
「だまれ、だまれ。ボーイのくせに船長にむかってツベコベいうとはけしからん」
船長はすっと立ちあがると、いきなり大声で命令をくだした。
「おうーい、針路を北東へとれえ！」
たちまち帆のむきが変えられ、船はへさきを北東へむけると波をけたてて走りだした。

いくらクプクプがヤキモキしても、船は北東へ、ナマケモノの小説家ののったイカダとは反対の方角へと、ずんずん走った。

といって、お天気やの船長が、なにかの拍子に気分を変えてくれないかぎり、どうしようもないことなのだ。

クプクプはため息をついた。

「ねえ、ヌボー。こうやって両方がどんどん離れちまったら、とてももう小説家を見つけることはできないね」

ヌボーはクプクプをはげました。

「あきらめるのはまだ早いさ。なにしろこの世界はへんちくりんなんだから、どんな理屈にあわないことだって起こるかもしれない。なあに、そのうち船長も気がかわるだろうよ。北東にはずっと遠くにしか島がないはずだから」

「だって、もしそれからイカダを追いかけたとしたって、あの小説家はまだ生きてるかしら。イカダが沈んじまえばそれきりだよ。そうなれば、僕はもう、永久に家へ帰れないのかしら」

「だいじょうぶだよ、クプクプ」

と、大男ヌボーはいった。

「あの小説家はきっとピンピンしているよ。いい人とかやさしい人とか、人に惜しまれるような人間はかえって死んだりするものさ。ところが、キタ・モリオなんてやつは、もし死んだとしても、みんながパチパチと手をたたく男にちがいない。そういう人間にかぎって、なかなか悪運

が強いものなんだ」

そういってヌボーが、クプクプをなぐさめている間にも、船は右にかしいだり左にかしいだりしながら、青い海原をかきわけた。

波が白くあわだち、しぶきが甲板にまでかかってくる。マストがギイギイとなる。ぐるりと見まわしても、見えるものは青い海ばかり、水平線には島も船のかげも見えない。

やがて、西の空が赤くなった。雲がまっかに燃えたつ。すばらしい夕焼けだ。それから雲は紫いろとなり、空も海もたそがれてきて、こんどは空一面に大きな星がひかる夜がくる。海はくろくうねっている。しかし、船の走るまわりは、チカチカと青白いホタル火のような光のおびができる。夜光虫が光っているのだ。

マストがギイギイとなり、空には、べた一面の星が、海には、たとえようもなく美しく夜光虫がひかった。しかし、クプクプはかえって悲しくさえなってくるのだった。

彼は夕食のあとかたづけをし、ナンジャやモンジャがとうに眠っている船室へもどった。デブのナンジャはウワバミのようなイビキをかいている。ヒョロのモンジャは鼻からチョウチンをだして眠っている。そのチョウチンはだんだんと大きくなり、大きくなりきるとパチンと割れた。するとまた、モンジャの鼻の穴から小さなチョウチンがあらわれ、だんだんとふくらんでゆく。

クプクプはすみっこの床に横になった。ズダ袋をまくらにして、眠ろうと努めた。ザブンザブンと船べりにあたる波の音がする。その音もとてもさびしくきこえた。しかしからだがつかれているので、ザブンザブンという波の音を耳にしながら、やがてクプクプはかすかな寝息をたてて

いた。

すごいあらしがくる

朝、クプクプはいつものように船長室にコーヒーをもっていった。どちらが頭かわからない毛布がモゾモゾとうごいて、けさは船長は横っちょのほうからひょっこり顔をだした。

船長は起きあがってコーヒーをすすり、

「こらボーイ、なんちゅうまずいコーヒーじゃ」

「だって船長さん」

と、クプクプはいいわけをした。

「水がとてもわるいんです」

「わるい水を使ってはならん」

「だって、もう水槽の底のほうに、にごった水がちょっぴりしきゃないんです」

「それはけしからん」

「けしからんって、船長さんは水もつみこまないで出港しちまうんだもん」

「こらボーイ、船長にむかってはもっと敬語を使うんじゃ。しかし、水がなくなっては弱るな」

「弱りますよ。だから早く島につかなくちゃ」

「それはそうだな」

「それじゃ船長さん」と、クプクプは内心シメタと思った。

「この方角には島が遠くにしかないんでしょう？　それなら、船の針路をかえて、もっと近い島へ行きましょうよ」

「なんじゃと」

老船長はたちまち不きげんになってきた。

「わしはもう、だれもわしの船を出迎えにもこんような島はマッピラじゃ。遠くっても、わしの知っとる島へゆく。いいかクプクプ、その島へ行くとな、たくさんの土人が、男も女も年よりも子どもも、それから牛やら馬やらサルやらヒキガエルやらバッタまで、みーんなわしの船を出迎えに浜べに出てくるんじゃ、いいか、バッタまでじゃぞ。たいしたもんじゃろう。わしはだんぜんその島へゆく」

「そこまでどのくらいかかりますか？」

「どのくらいかかるかわからん。わからなくても、わしはだんぜんその島にきめた」

「そのあいだに、水やたべものがなくなっちまったら？」

「なくなったって、だんぜんその島へゆく。わしはパイプとキザミタバコがあれば、三十日間は生きられる。これがほんとうの船乗りというものじゃ」

「だって、船長さん」

と、ついクプクプは文句をいった。

「そんなのないや。船長てものはもっと船員をかわいがらなきゃ。あんまりガンコすぎますよ。ねえ、もっと近い島へ行きましょうよ」

「うるさい！」

と、とうとう船長はまっかになった。

「ボーイがなれなれしく、船長に命令するとはなにごとじゃ。わしだって、ほんとは針路を変えるつもりでいたんじゃ。わしはおまえが生まれる前の、その前の、そのまたずうーっと前から船にのっておる。おまえが考えるくらいのことは、ちゃんと考えているんだぞ。しかし、わしはもうおこった。こうなったら、わしはもうだんぜん針路をかえん！」

船長はいきなり甲板へとびだしてゆくと、大声でさけんだ。

「カジをしばりつけろお！　ちっとでも針路をかえてはならあん！　暗礁があってもなんでも、だんぜんまっすぐう！」

その日の夜、クプクプが甲板から海へジャガイモの皮をすてているとき、ナンジャとモンジャがやってきていった。

「クプクプ、せいがでるな」

なんだかいつもとちがったやさしい口調である。

しかしクプクプはガッカリしていたから、生返事をした。

「なあ、クプクプ」

と、ナンジャはもっとやさしい声でいった。

「ちょっと相談があるんだが」

「なんなの？」

「おれたちは、どうも病気らしいんだ」

「え、病気？」

「そうだ。ふたりとも腹のぐあいがわるい」

「とてもわるいの？」

「そうだ。とてもわるい。死んでしまうかもしれない」

「そりゃたいへん、船長さんにいってくるよ」

「まて、まて」

と、ナンジャはあわててクプクプをおしとどめた。

「こんなことくらいで、船長に心配かけては申しわけがない」

「だって、とてもわるいんでしょう？」

「そのとおりだ。しかし、これはきっと水のせいだと思う。つまり、この船の水はもうくさっていて、中毒したんだ」

「そう？　ぼくはなんともないけど」

「いや、おれたちはとくべつ胃腸がよわい。つまり虚弱体質というか、人よりもかよわいんだ」

「かよわいって？」

と、クプクプはなんだかへんな気がした。

「そこでだ」と、ナンジャは声をひそめた。「中毒だから、消毒すればいいわけだ。消毒薬がほしい」

「そんなもの、この船にはないもん」

「いや、薬はなくても、ヤシ酒がある。それで消毒薬の代わりになる」

「なあんだ」と、クプクプはつい笑いだした。

「ふたりとも、お酒がのみたいんでしょう？」

「しっ！」と、ナンジャは口に指をあてた。

「しっ！」と、モンジャも同じかっこうをした。

「なあ、クプクプ。助けると思って、おれたちにヤシ酒をもってきてくれ。航海中は酒をのんではならんといって、船長がカギをかけてしまった。しかし、酒として飲むわけじゃない。薬として使うんだ。たのむ、クプクプ、おれたちはこのままだと死んでしまいそうだ。なあ、そうだろう、モンジャ？」

「ああ、いまにも死にそうだ。もうすぐ、死ぬ。もうそろそろ、死にかけてきた」

と、ヒョロのモンジャはなさけない顔をした。

クプクプは困った人たちだと思ったが、すこし気の毒にもなってきた。すこしくらいヤシ酒をのませても、モウロクした船長は気がつかないにちがいない。

そこでクプクプは、そっと船長室にしのびこみ机の引き出しにかくしてあるカギをとりだした。彼はいつも部屋のそうじをするから、なにがどこにあるかちゃんと知っているのである。

それから、ヤシ酒がしまってある戸棚をあけ、ヤシ酒のツボをとりだして、ナンジャたちのところへ持っていった。

「えらいぞ、チビ。おまえはこのごろとても役にたつようになったよ」

「そうだ、そうだ。もう一人まえの船乗りといっていい」

と、ふたりは口ぐちにクプクプをほめた。

それからふたりはヤシ酒をのみはじめた。クプクプはハラハラした。なぜって、ふたりともたいへんな勢いでガブガブのみだしたからだ。

「ねえ、そのくらいで、もう消毒はすんだでしょう？」

「いやいや、重症の中毒だからな。このくらいではまだダメだ。なあ、モンジャ、そうだろう？」

「そうだ、いま、腹んなかで、バイキンとヤシ酒が戦っているところだ。あっ、バイキンのほうが優勢だぞ。あぶない！　もういっぱいヤシ酒の援軍を送ろう」

クプクプは心配になってきた。ヤシ酒のツボがすっかりカラになってしまっては、船長がどんなにおこりだすかわからない。しかし、どんどん腹の中へヤシ酒の援軍をおくったふたりは、もうクプクプのことなんか眼中になかった。

「うるさいぞ、チビ。そんなところでジロジロ見るな」

「あっちへ行ってしまえ。おれたちはなにしろ、生きるか死ぬかの戦いをしているのだからな」

しかたなくクプクプがひきさがると、ふたりはいい気になってヤシ酒をのみはじめた。とうとうツボがカラになってしまった。

「うーい、この消毒薬はうまかった。もうすこし消毒したいな」

「船長室へいって、もっとさがしてみよう」

ふたりは酔った勢いで、船長室にやってきた。さいわい船長はいなかったので、あちこちのぞいてみたがヤシ酒のツボは見つからない。

「チビをつれてくるんだったな」

ふと見ると、テーブルの上に海図がひろげたままのっていた。ふたりはふらふらしながら、それをのぞきこんだ。

「なんだこりゃ、海図か。ふん、いまこの船はここらあたりか。ありゃありゃ、前のほうには島なんてないじゃないか」

「ほんとだ。これでは半月は走らなくちゃ、島に行きあたらないな」

「半月？　冗談じゃない。おれはあと三日もしんぼうできないぞ！　せめてここらに島があったらなあ」

そういいながら、ナンジャはペンをとって、海図の上に、島の形をかきこんだ。

そのとき、船長らしい足音がきこえたので、ふたりはあわてて、ベットの下にもぐりこんだ。

はいってきた老船長は、そんなことには気がつかずにパイプをふかしていたが、ひょいと海図の上に目をやった。

「おや、これはおかしいぞ？」

そういって目をこすったが、メガネがないのではっきりとは見えない。

「ここに島があるようだぞ。いやに近くにあるな。しかし、たしかに島だ」

老船長はあわてて甲板にとびだしていった。

「おーい、見張りのもの、前方、すこし左のほうに島が見えるじゃろ」

「なんにも見えません」

「いや、たしかにあるはずじゃ。よく見ろ」

その夜は星も少なかったから、見張りも楽ではない。しかし、よくよくながめても、水平線には島のかげらしいものはなかった。

「ないって？　おかしいぞ。あの海図を信用すれば、もう見えてもいいころじゃ。しかしこの前みたいに、へんてこな島などがひょっこり出てくるようじゃ、どうも近ごろの海図は信用できんな」

船長は腕をくんで考えこんだが、たちまちハタとひざをたたいた。

「そうじゃ、夜だもんで、うっかりして通りすぎてしまったのかもしれないぞ。きっとそうじゃ」

そして船長は次のように命令をくだした。

「おーい、野郎ども、でも、者ども、でも、なんでもいい。みんな、はやく針路を変えろう！元きたほうへ戻れえ！」

船がだしぬけに針路をかえ、西南の方角へ走りだしたとき、クプクプはわけはわからなかったが、さすがにうれしかった。おまけに追い風となってきたので、船のスピードもなかなか早い。これこそ、ナンジャたちの〝けがの功名〟というものだろう。

〝けがの功名〟ということばが、なんのことかわからない人たちは、メンドくさがらずに、字引きをひいてみるといい。

「ケガ――傷ついたこと。傷。負傷」

なんだかかえってむずかしくなってしまった。次にはコウミョウとひいてみる。高名や光名や巧妙ではなく、功名のところをさがしてみる。

「功名――功をたて名をあげること。てがら」

これで両方の意味がわかった。つなげてみて、それでもハッキリしないときは、もう一度、前のことばをひいてみると、おしまいにちゃんとのっていることが多い。

「けがの功名――過失が思いがけなくも功名となったこと」

これでハッキリした。過失というのがむずかしければ、カシッと字引きをひけばいい。

こんなふうに、わからないときは、自分でどんどん字引きをひく習慣をつけなければいけない。わたしたちが、なにげなく使っていることばでも、いざ尋ねられてみると、あんがいわかっていないことが多い。そういうことをハッキリさせておくことは、ハッキリしないままほっておくよりずっといい。

といって、本にかいてあることを、そのまま暗記するだけではいけない。覚えることよりも、自分で考えだすことのほうが、ほんとうはずっとたいせつなことなのだ。しかし、考えるためには、まず最少限度のことがらを覚えなければならない。最少限度ということばがわからない人は、さっそく字引きをひいてみること。

さて、とにかく、けがの功名という意味はわかった。

船はナンジャたちのケガのコウミョウによって、うまく針路をかえ、クプクプはすっかり喜んだわけだが、だいたいけがの功名というのは、まぐれあたり、偶然の力である。そういうことばかりはつづくものではない。

次には、わるい運命がやってきた。

運命ということばがわからない人は字引きをひくこと。これ一回で、もうあとは一いちうるさくくりかえさない。

船が追風にのって二日ばかり実にスムーズに調子よく、快適に走ったあと、急に風がはげしくなってきた。

帆はその強い風をはらんでいっぱいにふくらんでいる。船は波しぶきをおしわけて、とぶような速度で走る。

「すごいなあ。これなら、ほんとにキタ・モリオのイカダに追いつきそうだぞ。すてき、すてき」

と、クブクブがよろこんでいると、かたわらで船長がだしぬけにどなった。

「おーい、帆を、帆をおろせい！　大いそぎじゃあ！」

「どうして？　船長さん、せっかくスピードがでているのに」

「ばかもん！　後ろを見てみろ」

ふりむいてみると、後ろの水平線はいつのまにかすっかり暗くなってしまっている。そのあたりから、まっくろな雲がどんどんとこちらにのびてくる。黒雲はたちまち空の半分をおおい、なおも先へ先へとひろがりだした。まるで黒い魔物が腕をのばして、水色の空をふきけしているかのようだ。

「いそぐんだ！　甲板の器具をしばりつけろ！」

と、船長はあちこち走りまわりながら、矢つぎ早に命令をくだした。いつもとは別人のようなきびしい顔つきである。

急にあたりが暗くなった。海も暗くなった。その暗い海のあちこちで、波がしらが白くキバをむきだし、船はぐらぐらとゆれた。

と、大粒の雨がだしぬけに襲ってきた。はじめパラパラと音がしたと思うと、すぐに大バケツに大タライを百個、いや一万個ほどひっくりかえしたような豪雨となった。

「アラシか？」

クブクブは、びっくりして立ちすくんだ。しかし、なにも考えるひまもなく、そばの船べりにしがみつかなければならなかった。前方の海が山のようにふくれあがって、ドッと海水が甲板にうちかかってきたからだ。

いまは、船は、木の葉のようにゆれている。横にかしいだまま、荒れくるった波の中へ狂ったように突っこんでゆく。また波がドッとおしよせ、クブクブはあやうく押し流されそうになった。

「帆を、帆がまだ残っている！」

波と風のとどろくなかで、きれぎれに船長のさけぶ声がきこえた。しかし、だれも波にさらわれぬようにしがみついているのがせいいっぱいで、おろしかけた帆をあやつる者はいない。

あいにくと大男ヌボーは船底でねている。昨夜、見はりに立ったので、疲れきって眠っているはずだ。ヌボーはねてしまうと、カミナリが落ちてもスッポンがくいついても目をさまさないのだ。

「帆をおろさんと、船が沈むぞ！」

しかし、だれも思いきって帆柱へとびつくものはない。クブクブの横にはナンジャ、モンジャがまっさおな顔でしがみついている。また、大波がかぶさってきて、大きくもないボロ船は木の葉のようにゆれた。

船があぶない！

はげしい雨と風、わきたつ大波、船体はミシミシときしむ。しかし、だれも帆をおろしにゆく者はいない。

「ようし！」と、ぬれネズミになりながら、クブクブはくちびるをかんだ。

どうしてそんな勇気がでてきたのか、自分でもわからない。

「ようし！」

もう一度さけぶと、クプクプは斜めになった甲板を帆柱のほうへはいはじめた。

そこへ、また大波がどっとかぶさってきた。水は滝のようにおちかかり、すっかりクプクプの姿をつつみこんでしまった。まっ白にあわだち、うずをまき、おそろしい力で甲板にあるすべてのものを運びさろうとする。

しかし、海水がひいてみると、クプクプの小さな姿はまだ甲板の上にのこっていた。そればかりか、彼はまた、きしんでふるえている帆柱にむかって、はいすすんでいった。

「あぶない！」と、だれかがさけんだ。

「あぶない、おまえにはムリじゃ！」

老船長もそうさけぶと、いきなりクプクプを助けに走りだそうとした。しかし彼はもう老人で、腰がふらついた。船がぐらぐらとかたむくと、船長はばったりたおれた。そこにまたもやかぶさってきた波にひきずられ、そのしなびたからだはずるずると甲板の上をながされた。

「ああ、船長」と、みんなは目をつぶった。

船長のからだはまさに船のそとへほうりだされようとした。だれもどうすることはできない。自分自身を助けるのにせいいっぱいだったからだ。

クプクプがんばる

と、そのときだしぬけに太い腕がニュッとのびた。そして、老船長のえりくびをつかみ、ずるずると安全なところまでひきもどした。

気を失いかけていた船長は、やっと目をひらいた。大きなたくましい男が自分をのぞきこんでいる。

「おお、ヌボー」

ようやく目をさまして甲板にでてきた大男ヌボーが、すんでのところで船長を助けたのだ。

そうしている間にも、船は木の葉のようにゆれつづける。ドッと海水が怒りくるっておしよせてくる。クプクプはやっと帆柱の根元にしがみついていた。帆づなをほどこうとするが、かたくゆわえてあるうえに、海水でぬれてしまっていてどうしてもとけない。ますます雨風が吹きつけると、クプクプの小さなからだは、今にも吹きとばされそうになる。

クプクプは、腰にさしてある小さなナイフを思いだした。船のりはみんなジャック・ナイフをもっている。だからクプクプもポケットにはいっていたナイフを船のりらしく腰にさしていたのだ。

クプクプはナイフを手にとると、パチンと刃をひらこうとした。ところが、どうしても刃がひらかない。あわてて目を近づけてしらべると、ナイフの柄に、次のような文字がほられているのに気がついた。

『とびだしナイフはいけません　警視庁』

チェッ！　とクプクプは思った。

なおも雨風が吹きつけてきて、息をするのも苦しい。そのなかで、クプクプは歯をつかって、やっとナイフの刃をひきだすことに成功した。うっかりマストにつかまっている手をはなせば、波にさらわれてしまうからだ。

それからクプクプは帆をしばってある綱に刃をあてて、切りはなそうとした。ゴシゴシゴシ、いくらやっても綱はきれない。

おかしいなあと思ってナイフをしらべてみると、柄のもう片側に、次のような文字がほられてあった。

『切っても切れない安全ナイフ　児童保護委員会すいせん』

チェッ！　とクプクプは思った。こんなナイフじゃしょうがないなあ。

ナイフというものは、やはり切れたほうがいい。しかし、そもそもこんなことになったのは、みんなの中に、とびだしナイフを自慢したり、ほかの人をおどかしたりする人がたまにいるからだ。であるから、たとえとびだしナイフを持っていても、エンピツをけずるとか、ヤキイモを切るときだけに使ってほしい。そうでないと、私は警視庁や児童保護委員会からおこられて、こんな子どもにためにならない読み物はもうやめてしまえ、やめないと牢屋にいれるぞ、とおどかされるかもしれない。

クプクプは、「切っても切れない安全ナイフ」が、児童保護委員会のスイセンどおりにちっとも切れないため、困ってしまった。困るどころではない、帆づなを切らなければ船があぶないのだ。

またもや一陣の突風がおそってきた。船はぐらりとかたむき、そのままひっくりかえると思わ

れたが、なにが幸いになるかわからない。ズダ袋をはりあわせたような帆は、そのときベリベリとやぶけてしまった。つまり底がぬけたのだ。船はあやうく立ちなおったが、今度は大波がやってきた。今までにないほどの巨大な波で、それが船の前方にのしあがったときには、まるで高い山がそびえたったように見えた。海水の山は、のびあがるだけのびあがると、いきなり船の上にハンマーをたたきつけるような勢いでおちかかってきた。

ザ、ザァーッと、海水が頭上からかぶさってくる。

クプクプは夢中で帆柱にしがみついていたが、そのほそい手が、何者もたえられぬほどの力によって、ぐいともぎとられた。

「アッ！」

クプクプのかるいからだは、海水のうずまくなかに投げだされた。そのままずるずると押しながされてゆく。

クプクプはいったいどうなるのか？

クプクプはどうなったかというと、彼は大波のひきずるまま、どこへともしれずおしながされてしまった。きっと海中にひきこまれて、おぼれてしまったにちがいない。私たちがクプクプと出会うことはもうあるまい。

こうなっては、この物語も、もうおしまいである。しかたのないことだ。

それでは諸君、ザンネンではあるが、さよなら、バイバイよ。

ということにしてしまっては、私は楽でいいのだが、これではあまり無責任であるし、クプクプもかわいそうである。それに、どんな物語の主人公にしても、今度こそはいよいよオダブツだぞ、と思っていると、まだまだおしまいにはならない。私も、まねをしてみよう。

クプクプは海底ふかく沈んでいった。うすぐらい青ぐろい水の色である。もっと沈んでいくとだんだんあたりが暗くなっていった。まるで夜のように暗い。そのなかで、チカチカとホタルの火のようなものが光っている。深海魚が発光しているらしい。

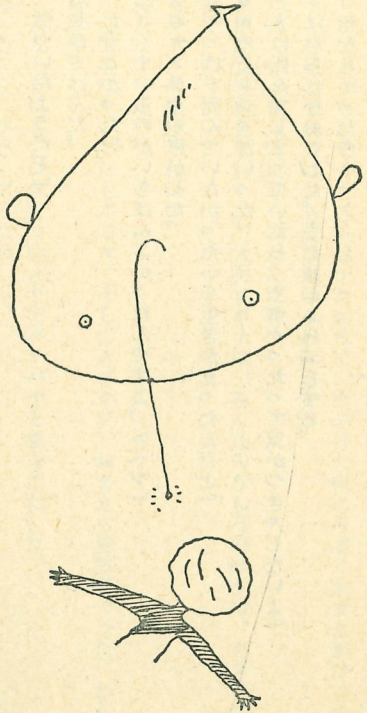
チョウチンアンコウが一匹、すっと近づいてきて、ヒゲの先でチョンチョンとクプクプの顔をつついた。それから、タコが一匹あらわれた。ぶきみにからだをくねらして、これも足の先で、クプクプのおへそのあたりをチョイチョイとつついた。

クプクプはアンコウなべを食べたことがある。とてもおいしかった。それから、オデンのタコも好きであった。しかし、いまはアンコウもタコも、なべものやオデンになっているのではなく、どうやらクプクプが生きているのか死んでいるのかたしかめているらしい。

陸のうえとは反対だ。今度は彼らがクプクプをごちそうと考えているようなのだ。手足をうごかして追いはらおうにも、手足はうごかない。

ああ、とうとうぼくはアンコウとタコに食べられてしまうのだな、クプクプは観念した。

アンコウは今度はのどのところをつつきだした。タコはわきの下をくすぐりだした。半分くすぐったく、半分くるしく、クプクプはたまらなくなって、さけびたてようとした。



そして、パッチリと目をひらいた。

海底なんぞではなかった。彼は甲板のうえにねかされていて、見なれた顔が自分をのぞきこんでいた。

「おお、気づいたようだぞ」

と、老船長がさけんだ。

「よかった、よかった」

「やっぱりくすぐるのがいちばんよかったんですよ、エヘン」

と、デブのナンジャの声がした。

「いや、やっぱり死んでいなかったから生きかえったんだよ」

と、ヒョロのモンジャがいった。

「ほんとうに死んでしまっていたら、くすぐったって気がつきゃしないよ」

クプクプはからだをおこした。まだ頭がふらふらする。

「ぼく、死ななかったの？」

「そんなふうに声をだすところをみると、死ななかったんだな」

と、ヒョロのモンジャがいった。

「いや、まて」

と、デブのナンジャが口をだした。

「あんがい死んでいて、こいつはユウレイかもしれないぞ」

「なにをつまらないことをいっておる」

と、船長がいった。

「クプクプ、おまえは助かったんじゃ。おまえは海の中へほうりだされて、だれもが、もうダメだと思った。ところがそのとき帆柱がたおれて、やぶけた帆にうまくおまえがひっかかった。そこをヌボーが怪力でひっぱりあげたというわけじゃ」

「じゃ、ぼく、ヌボーに助けられたんだね」

クプクプはあたりを見まわした。大男ヌボーは、みんなのうしろのほうで、クプクプにほほえんでみせた。

「わしもヌボーに助けられた」

と、老船長はいった。

「ヌボーの働きはたいしたものじゃ。そしてクプクプ、おまえも勇敢じゃった。わしはおまえを見なおしたぞ」

船長はこんなときにも、いきなりひとりでパチパチと手をたたいた。

それから、急になにか思いだしたらしく、

「それにひきかえ、ほかのやつらは何事じゃ。チビのクプクプが帆をおろそうと努力したというのに、なんたるだらしなさじゃ。ナンジャにモンジャ、おまえら、いったい何年船に乗っとる？」

「いいえね、あのときは運がわるかったもんで」
と、ナンジャはモゴモゴといった。
「運がわるかったと？」
「そうなんで、ちょうどあの時、あっしのパンツのひもがほどけかけていたんで。そうでなかったら、たちまちこの七つの海の男ナンジャが帆の一つや二つ……」
「あっしだってそうでさあ」
と、モンジャも弁解した。
「あっしは、すぐ帆をおろしに駆けつけるつもりだったんですがね。しかし帆がやぶけることはわかりきったことですよ。やぶけちゃえば帆をおろしたってムダというものですからねえ。こうなることを見こして、あっしはいつか船長に帆をつくろっておけと命じられたときも、ちゃんと手をぬいておいたんでさあ」
「おろか者めが！」
と、船長はカンカンになった。
「恥ずかしくないのか。アラーの神とタツノオトシゴとヒウョタンツギにかけて恥ずかしいと思わぬのか！」
「船長、船長」
と、うしろからヌボーが注意した。
「そんなにどなるのはあとにして、船のことをなんとかしなくては、このままでは……」

そのとおりであった。あらしはまだすぎてしまったわけではなかった。いくらか波はおさまってきて、もう船はひっくりかえるおそれはなくなったものの、まだ鉛色の雲はたれこめ、風はうなり、帆を失った船はどこへともしれず、流されているのだった。
「そうじゃ」
と、船長はうなずいた。
「みなの者、イカリをながして船足をのろめろ！」
「イカリはもうなくなっています」
「なんじゃと？」
「だって船長が、このまえの島をでるときカンシャクを起こして、イカリをぶちきれって、命令されました。イカリはとうにぶちきっちまいました、はあ」
「おろか者！　そういう乱暴な命令のときは、そうカンタンに命令どおりするもんじゃない、わかったか？」
「かしこまりました、船長」
「わかったら、イカリはまあいいとして、ヤシ油を海にながしてみるか。油を流すと海は静まるものじゃ。早くやれ！」
「かしこまりました。船長」
「なんだ、だれもちっとも何もやらないじゃないか？」
「ですけれど、ヤシ油をながせ、っていうのは乱暴な命令です。あれがないとテンプラとかア

ゲマンとかコロッケとかいうものができなくなります。そういう乱暴な命令は、命令どおりしてはならんと、いま船長はおっしゃったばかりじゃありませんか」

「なんだと？　このぶれい者！」

そのうちにも、船は波と風のもてあそぶままに、方角もわからずどんどん流されていった。

こうして何日がたったことだろう。

海はまだ静まらない。おまけに強い海流にまきこまれたらしく、あちこちボロボロになった船はすごい勢いで流されてゆく。帆もイカリもないからどうするわけにもいかない。カイでこぐにも、潮のながれがはげしいので、カイなんて役に立たないのだ。

いったいどこへ流れてゆくのか、こうなったら天運にまかせるより手段がない。

それより困ったのは、いよいよ食糧が不足してきたことである。飲み水は、ときどき雨がふってくるので、それをカンにあつめてなんとか間にあわせることができた。しかし食物のほうはそうはいかない。小麦粉の袋はほとんどなくなってしまった。ジャガイモはとっくになくなっている。ヤシ油までなめてしまった。魚もつれないし、海鳥もとんでこない。

船長は、わずかばかり残った食物を、毎日少しずつ配給することを命じた。一日にほんのちっぽけなパンのかけらが一個、水が二口ほどである。

みんな急に元気がなくなってきた。ヒョロヒョロして、甲板を歩くにも足がふらつく。野菜を食べていないので、ビタミンの不足から、壊血病といって手足がむくんでくる。

「ああ、ああ、だからあのとき、ブタとニワトリをつかまえておくのだった」

と、デブのナンジャはぐちをこぼした。

「ほんとうだ」

と、ヒョロのモンジャもよけいヒョロヒョロになって、なさけない声をだした。

「そういえば、ナンジャ。おまえの顔がブタに見えてくる。おまえのおしりのあたりを焼いたら、おいしいステーキになるだろうな」

「ばかをいえ、モンジャ、そういうおまえもニワトリそっくりだ。ニワトリのモモ肉はすてきだろうなあ。つまり、ここらあたりの肉だ」

「ばか、気持ちがわるい。そんなにおれをなでるな。あまりそばへくるな。あっちへ行け」

「おまえこそあっちへ行け」

しかし、いちばん気の毒なのは大男ヌボーであった。食物はみんな等分にわけられる。からだが普通の人の三倍も四倍もあるヌボーが、それっぽっちの食物ではどうにもならないことはわかりきっている。といって、ヌボーによけいにパンをやることはできなかった。

ヌボーは、それでもグチひとついわず、しかしもう大きなからだから力がぬけて、立って歩くことも苦しそうだった。彼は甲板の上をころがって、せめて雨がふってきたとき、せいいっぱい水をのむよりしかたがなかった。

クプクプはヌボーが気の毒でならなかった。彼は自分もおなかがへって、オヘソと背中がくっつきそうであるにもかかわらず、そっとヌボーのところへ行って、自分のパンのかけらを与えよ

うとした。

しかし、ヌボーはだるそうに首をふった。

「いいや、クプクプ。それはおまえが食べなくちゃいけないよ」

「だって、だって」

と、クプクプは胸をつまらせながらいった。

「ヌボーはぼくを助けてくれたんじゃないか。今度はぼくが恩がえしをしなくちゃ」

「ありがとう、クプクプ」

と、ヌボーはむりに笑ってみせた。

「だがなあ、わしのからだはこんなに大きい。やせるには時間がかかる。それにひきかえ、チビのおまえがそれ以上小さくなったら、なくなっちゃうじゃないか。わしはだいじょうぶだから、さあクプクプ、それはおまえがお食べ」

クプクプはすこし涙をこぼしながらパンを食べた。

もう、ちかごろではヌボーだけではなく、だれでも甲板でゴロゴロしているようになった。老船長もまるで元気がない。コーヒーもきざみタバコもすっかりなくなってしまっている。たくさん積んであったカンを、波でながされてしまったからだ。

このままでは、みんなうえ死にをしてしまうのだろうか。

しかし、ある日の午後、ひょろひょろと立ちあがっただれかが、しゃがれ声でさけんだ。

「し、島だぞう！」

けれどもだれもすぐにはとびあがりはしなかった。それまで何回も、雲を見あやまったり、目の錯覚だったり、島を見つけたつもりでヌカ喜びをしてきたからだ。しかし、今度こそ本物であった。だんだん近づいてきても、シンキロウのように消えはせず、いまは黒黒とした海岸の岩に波のくだけているさままではっきり見える。

「島だ、島だ！」

さすがにみんなおどりあがった。

しかし、腰をささえてもらいながら、のびあがって遠目がねをあてた船長は、逆に顔いろを変えた。

「あぶない！　潮流がまっすぐあの島にむかっているぞ。このままではがけにぶつかる。みんな元気をだして、片側のカイをこぐんだ！」

死んだように横たわっていたヌボーまで、必死にカイにとびついた。しかし、そのくらいのことでは船の針路はいくらも変わりはしない。そのままグイグイときりたった崖にむかって、流されてゆく。

クプクプも必死だった。エイエイエイ、力のぬけた腕にせいいっぱい力をこめてこいだ。みんなも夢中だった。その努力がみのったのか、船のへさきがわずかそれた。

が、次の瞬間。

ガラガラ、ズシーン。

すさまじいひびきとともに、船は岸べにのしあげ、みんなアッというまもなく、甲板にたたき

つけられた。

ぶきみなタイコの音

「ふうー」

と、クプクプはようやくからだをおこした。

みんなも、はげしくたたきつけられた衝撃からわれにかえって、顔をしかめながら起きあがろうとしているところだった。

船はへさきがメチャメチャになっているものの、どうやらまだ船の形をして浜べにのしあげている。浜といっても、岩だらけの荒れはてた場所だ。すぐ横手を見れば、きりたったがけに波がぶつかって渦をまいている。まともにあのがけにぶつかったなら、こんな船はコッパミジンになったことだろう。

とにかく、いのちだけは助かったのだ。

「おうーい、みんなあ、だいじょうぶか」

「おいらは腰を打ったけど、だいじょうぶです」

「あっしはオデコをすりむいただけで」

「おれはニキビをひとつつぶしちゃった。しかし、いのちに別状はない」

口口に呼びかわす声がきこえる。みんな助かったらしい。

「クプクプ、だいじょうぶか？」

「ぼく、平気だよ」

クプクプは元気よくいって、立ちあがろうとしたが、左足がズキンとして、思わず顔をしかめた。どうやらすこしくじいたらしい。

みんなも、あっちをこすり、こっちをたたきしながら集まってきて、今後のことを相談した。船はずいぶんこわれてしまったが、時間さえかければ修理できそうだ。さいわいこの島は相当に大きいらしい。海岸のあたりは岩だらけだが、背後にはジャングルも茂っていて、その森林の海はどのくらいひろがっているか見当もつかない。

「船の修理より先に、まず食物を見つけなくちゃ」

と、ナンジャがいった。

「そうだ、おれたちはこんなに弱っていては何もできない。まずおなかをいっぱいにしなくちゃ。万事はそれからだ」

「それじゃ、さっそく食物調査隊をだそう」

と、ヒョロのモンジャもいった。

「おれがまず隊長になる」

「まてまて、あのジャングルにはなにがいるかわからない。おれたちはろくな武器もない。うっかりゆくとあぶないぞ。ヌボーをいっしょにつれてゆこう」

みんな、いっせいに大男ヌボーを見た。ところがヌボーは、ごろんと小山のように横になって

いて、彼にしてはごく小さなささやくような声でいった。

「おれは残念だが歩けそうにない。完全に、テッテイ的に、どこからどこまで、スッテンテンに、底の底まで、腹がへってしまった。さっき、最後の力をふりしぼってカイをこいだので、さすがのおれももう立てそうにもない。すまないが、だれか食物をとってきてくれ。ちょっとでも食物をたべれば、また力がでてくると思う」

ヌボーが行かないとなると、さっきまで意気ごんでいたナンジャもモンジャもしりごみをした。そう思ってみると、島はシーンと静まりかえっている。普通ジャングルからは鳥の声や小さな獣の声などがひびいてきてもいいはずだ。それがシーンとして、もの音ひとつしないと、かえって不気味である。

「モンジャ、おまえ、いま調査隊の隊長になるといっただろ。おまえは食物を見つけるのが実にうまい。天才的だ。たしかに隊長の価値がある」

「いやいや、食物を見つけるのはうまいけど、おれみたいなやせっぽちが、隊長なんて申しわけがない。隊長はもっとカンロクのあるナンジャにゆずろう」

「ケンソンするな、おまえは天才的だ」

「いや、おまえこそカンロクがある」

ふたりがいい争っていると、それまですみのほうに黙っていた船長が口をだした。船長は年寄りなので、大男ヌボーとともに、一番からだが弱ってしまっている。それに長い漂流の末この島に打ちあげられるまで、人一倍神経を使ったので、すっかり気ぬけしたようにだまっていたのだった。

船長はいつもに似あわず、ボソボソした声でいった。

「ナンジャにモンジャ。おまえら、すまぬが行ってきてくれないか。あんまり遠くに行くんじゃない。すこしでも食物を見つけたら、すぐ帰ってきて、それをヌボーにやるのじゃ。ヌボーが元気になってから、本格的に島の探検をはじめるのじゃ」

「へえい」

船長の命令ではしかたがない。ふたりはおっかなびっくり出発することになった。

デブのナンジャとヒョロのモンジャの姿は、岩のごろごろした海岸をこえ、やがてむこうのジャングルの中へ消えていった。それを見送っていたクプクプは、かたわらで、老船長が大きなため息をつくのを聞いた。

見ると、老船長はすっかり疲れきったかのように、ぼんやりと陸のほうをながめている。クプクプはなんだか気の毒になってきた。

「船長さん」

と、彼は思わず声をかけた。

「船長さんは、とてもガッカリしてるみたいですね」

「そうじゃ」

と、船長はいつもの十分の一くらいの力のぬけた声でいった。

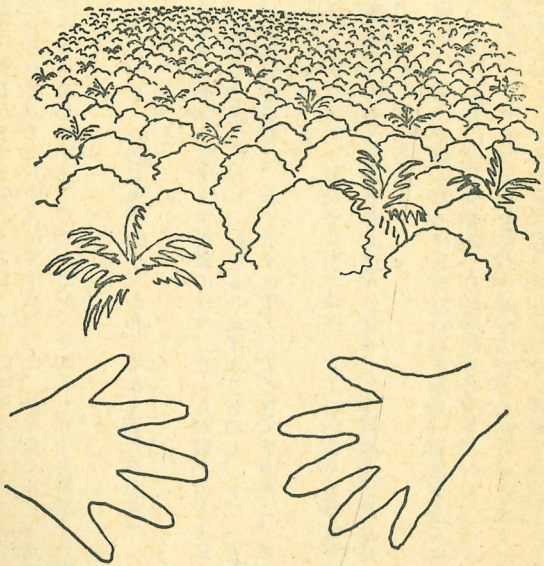
「わしはすっかりガッカリしてしもうた」

「船がこわれちゃったからですか？」
「いいや、そんなことでわしがこんなに力をおとすものか」
「じゃ、どうしてなの？」
「みろ、ボーイ」
と、船長は力のない手をあげて、浜べを指さした。
「船がこわれてもなんでも、とにかくこのわしの船が着いたというのに、またしても人っ子ひとり出迎えにこないじゃないか」
いいながら、船長はしだいに不きげんになってきたようだったが、しかし声をあげようにも、おなかに力がはいらないようであった。
「ああ、ああ、何十年船に乗っていて、こんなブジョクははじめてじゃ。バッタ一匹出迎えにこん」
老船長はがっくりと首をたれて、泣きそうな声でつぶやいた。
「ああ、フナムシ一匹でてこない。わしは世の中がいやになった」

一方、こちらはナンジャとモンジャである。
ふたりがジャングルにわけいってゆくと、あたりは相かわらずシーンとしている。南方の島のジャングルというものは、デタラメに歩けるものではない。海岸があって、浜からタコノキだのリュウゼツランだのが繁茂しているわけだが、うっかり踏み入ると、進むことも戻ることもできなくなってしまう。

奥へゆくにつれ、だんだんと樹木が大きくなってくる。バナナ、パパイヤ、ビンロウジュ、パンノキなどがあればいいのだが、そういうものは少しも見当たらない。ヤシの木さえもはえていない。
それでも、いろんな樹木が枝をのばし葉をひろげているなかに、人の通れるほどの道らしいものがあった。
「おい、おかしいぞ」
と、ナンジャがいった。
「これはなんだか道のようだ。自然にできたものじゃない」
「ケモノが通った跡だろう」
「ケモノ？　どんなケモノかな」
「野ブタかもしれない」
「ブタならいいが、もしライオンとかヒョウだったら？」
「おどかすなよ。そういう考え方はよくない。ライオンと考えるよりブタと考えたほうが楽しいじゃないか」
「楽しいかもしれないが、うっかり前進するのもあぶないぞ。それにどんなケモノがいるのか知らないが、サルの声ひとつ聞こえてこないのはおかしい」
「それには二とおりの考え方ができる。ひとつはサルが一匹もいないからなのだ」

「もう一つは？」
「もう一つはなにか強い動物のようなものが、ここらをうろついているからだ。すると弱い動物は息をひそめてしまう」
「なるほど、おまえはあんがいアタマがいい。だが、その強い動物というのはなんだろう？」
「おまえ、ちょっと行って調べてこいよ」
「おまえこそ行ってこいよ」
「それなら、どっちが先へ行くか、ジャンケンをしよう」
「よし！」
ナンジャとモンジャはジャンケンをすることになった。しかし、うっかり負けてはたいへんである。
「一度できめるのは不公平だ。一度では、本当の強さはわからないからな。十たびでやろう。十回先に勝ったほうが勝ちだ」
「それなら、いっそ百たびにしたら？」
「うん。百たびでやろう。それならまず公平だろう」
それからふたりはすごい勢いでジャンケンをはじめた。ジャンケンポンよ、ホイホイホイよ、アイコでパーよ、グーチョキパーよ、パーチョキグーよ、ホイホイパーよ。
「ちょっと待ってくれ。手が疲れてきた。これで、五十九対五十六だな？」
「ばかをいえ！　五十九対五十八だったよ」



「インチキをするな、たしか五十九対五十六だった。二つもごまかすなんてガメツイぞ」
「ぜったいインチキじゃない！　五十九対五十八だった。おまえこそインチキだ！」
「なにを！　それじゃ、五十九対五十六だったか、それとも五十九対五十八だったか、ジャンケンできめるか？」
「のぞむところだ。しかし、一回じゃ不公平だから、これも百たびだぞ」
「よし、こい！」
こうしてふたりのジャンケンはますます複雑になり、なかなか終わりそうになかった。ふたりは顔をまっかにし、汗をたらし、腕をふりあげふりおろし、コブシをつくったりハサミをつくったりパッとひらいたりした。ホイホイホイよ、アイコでチョキよ、パーチョキグーよ、おつぎはグーよ、ヘナヘナパーよ。

船に残ったみんなは、いつまでたってもふたりが帰ってこないので、だんだんと心配になってきた。
あの食いしん棒のふたりが、食物を見つけられないのだから、よほどなんにもない島なのだろうか？　それとも、なにかわるいことでも起こったのだろうか？
いくら考えてもギロンをしても、わかるものではないし、ふたりの姿はまだ現われぬ。むこうのジャングルは相かわらずシーンとしている。
「しかたがない。ふたりをさがしにやろう」

と、老船長は決心をした。
大男ヌボーはうごけない。クブクブも足をくじいている。船長も老人ですっかり弱っている。そこで、この三人をのぞき、残りの全員が出かけることになった。
船には、これまで名まえがでてきた乗組員のほかに、七人の男がいた。こういう連中は一いち名まえをかかなくてもよいのである。映画でもなんでも、「その他大ぜい」として、ジッパヒトカラゲにあつかわれてしまっている。
こうして、その他大ぜいのジッパヒトカラゲの、七人の男たちが出発することになったが、みんなおっかなびっくりだったので、元気をつけるため、まず次のような歌をうたった。

おれたちゃ名もない七人の男
名まえもなければ剣（つるぎ）もない
力もなければアタマも弱い
だけど逃げ足ははやいぞ
エイホウホウ！

おれたちゃ名もない七人の男
ライオン出てくりゃすぐ逃げる
ネズミが出てもすぐ逃げる

電光石火逃げるが勝ちさ
エイホウホウ！

歌をうたってから、ジッパヒトカラゲの七人の男たちは、ひとかたまりとなって船から出ていった。ちっとも勇ましいところがない。

あとを見送っていたクプクプは、みんなの姿がジャングルの中に消えてしまうと、さすがに心ぼそくなってきた。

「あの人たち、だいじょうぶかなあ」

「逃げ足だけは早そうだから、なにか報告をもってくるじゃろう」

と、船長もぼそぼそといった。

横たわったままのヌボーも、ぺしゃんこになった腹をさすりながらつぶやいた。

「ああ、せめてこのおなかが半分でもふくれてくれたら、みんなに心配かけないですむのだが」

ジッパヒトカラゲの七人男たちは、ジャングルの中を進んでいった。

奥にすすむにつれ、うっそうと樹木が茂り、つる草がからみ、だんだん薄暗くなってくる。まわりを見まわしても、見えるのは幹と枝と葉っぱばかり、いったいどちらへむかっているのか方角もはっきりしない。

「こりゃひどいところだ。これじゃうっかりすると迷子になってしまう」

「ナンジャとモンジャも迷子になったのじゃなかろうか」

「しかし、それなら笛をふくとか、なにか合図があるだろう。こんな静かなジャングルだから、遠くっても笛の音はきこえるはずだ」

「だしぬけにヒョウかなにかがとびかかってきたら？」

「そういうことも考えられる。しかし、ひとり食べられているうちに、もうひとりが逃げてきそうなものだ」

「ヒョウが二頭だったら？」

「なるほど、そういうこともありうる。たとえば、七頭のヒョウが一度にかかってきたら、おれたちジッパヒトカラゲの七人だって、逃げることはむずかしい」

「では七頭のヒョウがこないうちに逃げてしまおうか？」

「それはいい考えだ。今のうちに逃げてしまえば、七頭のヒョウだってどうするわけにもゆくまい。なんたる名案だ」

そこでジッパヒトカラゲの七人の男は、憶病にもくるりと向きをかえると、得意の逃げ足にものをいわせて、いっせいに逃げだそうとした。

ところが、ひとりも逃げることができなかったのだ。先頭の男が走りだそうと身がまえたとき、どういうわけか、その姿は手品のようにかき消えてしまった。

二番目の男が、さすがにあいつは早いなあと感心しながら、一歩ふみだそうとすると、やぶの中から、くろい手がニュッとのびて彼をひっつかみ、たちまちジャングルの中へひきずりこんで

しまった。おやおや？　と思うひまもない、残った連中もうしろからニュッとのびたくろい手のため、アッという間もあらばこそ、その姿はくらい樹木の茂る中へかき消えた。

こうしてジッパヒトカラゲの七人の男は、その名まえのとおり、ジッパヒトカラゲにかき消えてしまったのである。

いったいどうしたことであろう？

こちらは船に残った三人である。

ナンジャもモンジャも帰ってこず、おまけにさがしにやった七人の男まで、歌をうたって出ていったきり、影も形も見せなくなってしまった。遠くのジャングルは静まりかえったまま、叫び声もあがらなければ笛の音もしない。さすがに三人とも気が気でない。

「ほんとに、みんな、どうしちゃったのだろう？」

と、クプクプも心細そうに、船長から借りた遠めがねでのぞいているが、だれももどってくる気配がない。

「ふうー、ふうー」

と、おなかのすききった大男ヌボーは、苦しそうな息をつくばかり。

「なんというやつらだ。おまけにバッタ一匹でてこない」

と、老船長もぼやくばかり。

そのうち、だんだんと日がくれかかってきた。

と、そのときである。かすかな、だが気味のわるいタイコの音が、ジャングルのかなたからひびいてきた。

ポン、ポン、ポン。ポンポコポン。

「あ、あれ、なんだろう？」

クプクプはのびあがって、そちらに遠めがねをむけた。しかし、あおぐろく広がるジャングルがつづくばかりで、動くものとてない。今度は反対の方角から、同じようなタイコの音がひびいてきた。

ポンポンポン。スッポコポン。

「たいへんだぞ」

と、それまでぐったりと横になっていたヌボーが、からだをおこした。

「あれは土人のタイコだ。しかも攻めダイコの音だ。おれたちはねらわれている」

すると、今の今までしょげきっていた老船長が、いきなりパチパチと手をたたいた。

「そうだ。わしの思っていたとおりじゃった。この島は無人島じゃない」

「だけど船長」

と、ヌボーがいった。

「無人島よりもっとわるいですぜ。ありゃあたしかに蛮人です。人食い土人かもしれません」

「いいや、心配するな。あれは土人のタイコじゃ。しかし、わしの船が着いたのをカンゲイしとるんじゃ」

「それはカンゲイしてるかもしれませんが、それは船長の考えてるのと意味がちがうと思いますが」

「なんじゃと？　どうちがうんじゃ？」

「つまりですね。彼らが人食い土人だとしたら、べつにこの船をカンゲイしてるんじゃなくて、わしらの肉を食べることをカンゲイしてるんです」

「それがなんじゃ！」

と、いきなり船長は胸をはって大きな声をだした。

「わしはいやしくもおまえらが生まれるずーっと前からの船乗りじゃ。わしの船が着いたというのに、バッタ一匹でてこないというより、人食い土人でもなんでも迎えにきたほうが、わしはずーっと気持ちがいい。わしはバッタ一匹でてこないなんていうブジョクにはたえられん。プライドがあるからじゃ。人食い土人、大いにけっこう。わしはきげんがよくなってきたぞ」

「そんなこといったって船長、ふだんなら人食い土人の百人や二百人、吹っとばしてやりますが、このヌボーも今じゃぜんぜん力がでないのですぜ」

ふたりがいい争っているうちに、ぶきみなタイコの音はしだいに近づいてきた。

なにか冷たいものが、クプクプの背すじをスーッとなでた。見よ、暮れかかってくろずんできたジャングルから、くろい人かげがバラバラとあらわれてきたではないか。彼らは手に手にヤリをもっていた。たちまち船をとりかこむように近づいてくる。

クプクプは自分のからだがかすかにふるえているのに気がついた。

木の上に黒い影

くろい人かげはイナゴのようにバラバラと船をとりまいた。クプクプは息をつめた。

ドッキ、ドッキ、ドッキ。

なにかへんな音がする。気がついてみると、それは自分の心臓の音だった。いっしょうけんめい落ち着こうとしても、その音はますます高まるばかりである。

「いやあ、諸君！」

と、そのとき、とても大きな声がした。船長である。老船長は舟べりにすっくと立って、演説をするように胸をそらした。

「わしはうれしいぞ。かくもたくさんの皆さんがわしの船を迎えてくださるとは、わしは光栄に存ずる」

しかし、相手はぶきみにおしだまったままである。キラキラとヤリの先を光らせて、浜にのりあげている船をすっかりとりまいてしまった。クプクプがそっとのぞいてみると、みんなおそろしい顔つきをしている。鼻の穴に骨をさしているものもある。顔じゅうにイレズミをしているものもある。とてもおとなしい友好的な土人とは思えない。

「きみらがそのように黙っているのは」

と、船長はさすがにすこしビクビクした声でつづけた。

「きっとわしのことばがわからないのじゃろう」
すると、土人の中からたくましい背の高い男がすすみでて、おしつぶしたような声でいった。
「ところがちゃんとわかるんだ」
「わかるって？」
と、船長はさすがにおどろいたようだった。
「それならばきみたちは文明人とつきあいがあるのじゃろう。きみたちはなかなか頭のいい土人らしいな」
「そのとおり。おれたちはとても頭がいい」
と、背の高い土人がいった。
「それなら、わしの船の連中がどっかへ消えちまったが、どこへ行ったか知っているか？」
「ちゃあんと知ってる。おれたちの部落にいる。おれたちはみんなに食物をやった」
「そうか、そうか」
と、船長はホッとしたらしく、急にニコニコしていった。
「きみらはなかなか親切な土人らしいな」
「おれたちは親切だとも」
と、相手の土人はいった。
「それはよかった。きみらに迎えられるのはうれしいが、もしきみらが人食い土人だったらどうしようかと、実はわしも心配しておった」

「心配することはない」
と、相手の土人はいった。
「もしおれたちが人食い土人だったら、こんなにグズグズしていない。すぐおまえらを食べちまうから」
「なるほど、なるほど」
と、船長はニコニコしてうなずいた。
「しかし、それは頭のわるい人食い土人の話だ」
と、相手はつづけた。
「たとえばあんたのようなやせた老人をすぐ食べたって、あんまりおいしくなかろう」
「それはそうじゃ」
と、船長はニコニコしてうなずいた。
「そこで頭のいい人食い土人は、まず獲物を太らせる。太らせておいしくなったときにはじめて食べる。そのほうが利口だろ？」
「そのほうが利口だなあ」
と、船長はうなずいた。
「そうとわかったら、おれたちといっしょに部落にきてくれよ。食物をあげるから」
「よかろう」
と、船長はニコニコしていったが、急に不安そうにタジタジとうしろにさがった。

「まさか、おまえたち」
「そのとおり」
と、相手の土人はイレズミのあるくろい顔をニヤリとさせた。
「おれたちゃ、頭のいい人食い土人なんだよ」
「しかし、しかし」
と、老船長はどもりながらオロオロといった。
「おまえらは親切な土人といったじゃろうが」
「そうなんだよ。おれたちはとっても親切だよ。野蛮な人食い土人みたいに、デタラメに人間を食べたりしないよ。そんなことしちゃ失礼だからね。ちゃんと上等な料理にして、ソースとマヨネーズと味の素をかけてから食べてあげるよ。そうすると、すばらしくすてきな味になるんだ。おれたちゃとっても親切だろ？」
そういうが早いか、土人たちはバラバラと船によじのぼりはじめた。逃げようとした船長はすぐにおさえつけられてしまった。
「ここに大きなのがいるぞ！　こいつはおいしそうだ！」
そうロロにさけびながら、数人の土人がヌボーにおそいかかる。しかし、どんなにへたばってひっくりかえっていても、大男ヌボーはそのままつかまってしまうような男ではなかった。ねたまま丸太ん棒のような腕をふりまわすと、三人の土人がふっとんだ。石ドウロウのような足でけとばすと、五人の土人がしりもちをついた。さっきの背の高い土人がしきりと仲間をゲキ

レイする。
「それッ、みんなガンバレ！　最上等のステーキと、カツレツと、メンチボールのためにガンバレ！」
土人たちはそのかけ声に勢いを得て、イナゴのようにとびかかる。なにしろ人数が多い。ヌボーはへたばりきって力もぬけている。とうとう手足をおさえられ、ぐるぐる巻きにしばられてしまった。
しかし、ヌボーがあばれたのはむだにはならなかった。土人たちがヌボーをおさえつけるのに気をとられているすきに、クプクプはひらりと身をひるがえし、舟べりから砂浜にとびおりた。夢中で岩と岩との間を走った。
「ちっこいのが逃げるぞォ！」
うしろから追いかけてくる足音がする。クプクプは必死に逃げたが、片足をくじいていて、思うように走れない。
もうダメかなと思ったとき、目の前にジャングルが見えてきた。トゲトゲした葉、枝、幹、そんなものにかまっていられない。シャニムニ暗い密林の奥へとびこんだ。つる草に足をとられてドッとたおれた。もう走れない。クプクプはちいさなからだをせいいっぱい平たくし、大きなシダの葉のかげにじっと息をころした。
やがて、土人たちがガヤガヤとしゃべりながら、かたわらを通りすぎていった。

「チビめ、すばしこいやつだ。惜しいことをした」
「まあいい。デカブツをつかまえたからな。チビの二十倍は食べでがある」
「しかし、ああいうチビもおいしいものだ。うすく肉をきって、油でサッとあげて、カラシをつけて食べるとなんともいえない」
「そうだ。パセリをそえると、なお味がひきたつだろう」
「どこかに、かくれているはずだ。早くさがしだせ！」
だんだんと声はとおくなり、枝や草をふみわける音もかすかになり、それからなんの音もしなくなった。
しかしクプクプは、まだ動きだす気になれなかった。おそらく土人たちは、あちこちのやぶの中にかくれて、クプクプが歩きだすのをジッと待っているのではないか。そうしてクプクプが長いあいだ息をころしていると、やがてシーンとしていたジャングルの中で、音というにもあたらないもの音がきこえだした。
はじめは、ふみつけられたりかきわけたりした草や枝が、しずかに起きあがる気配だった。針のように神経をビンカンにしていなければ、そんなかすかな音までわかるはずがない。それから、アブがブーンと羽をふるわせている音もきこえた。落ち葉の上をかさこそはっているカブトムシの歩く音もした。
そういうごくかすかなもの音をきいていると、クプクプはなんともたまらないほど寂しくなってきた。まわりには、大きなシダの葉がひろがっている。見なれない熱帯の樹木がそびえている。

これは夢なのだろうか。自分はやっぱりタローであり、自分の勉強べやの机にむかって、できない宿題をやりかけたまま、夢をみているのではなかろうか。
しかし、手をつねってみても、頭をたたいてみても、どうしても夢ではなさそうだった。そっと手をのばしてちぎってみると、シダの葉は青い汁をだし、特有の青くさいかおりをだした。
もし夢であったなら、こんなになにからなにまで完全であろうはずがない。もっと、どこかアイマイでモヤモヤしているものだ。といって、現実としてはいろんなことが変てこりんすぎる。そのとき、クプクプの耳に、いつかのヌボーのことばがよみがえってきた。
「この世界は、なにからなにまで変てこだ。みんなキタ・モリオとかいうやつのせいなんだ」
いくら変てこであってもこの世界は夢ではなく、この世界のなかでは、自分はクプクプでしかないのだろう。もし人食い土人につかまったなら、ほんとうに油であげられ、カラシをつけて食べられてしまうにちがいない。
「ああ、ああ。こんなことになるのだったら、どんなにイヤでもがんばって宿題をやるんだったなあ」
クプクプはますます寂しくなってきた。やかまし屋の船長も、いじわる屋のナンジャやモンジャも、大男のヌボーも、みんなどこかへ行ってしまった。いや、連れさられてしまったのだ。クプクプはだんだんと暗くなってゆくジャングルの中で、いまや完全にひとりぼっちなのだ。
じきに夜になってしまった。南の島では夕方はごく短い。日が暮れてきたな、と思ううちに夜となり、あたりが暗やみにとざされてしまうと、それまで静かだったジャングルの中が、急にさ

わがしくなってきた。

あやしい鳥の鳴き声がする。サルがキイキイとさけんでいる声もする。

人食い土人はもうあきらめて部落にかえってしまったようだが、ひとりぼっちでまっ暗なジャングルの中にとりのこされた心ぼそさは、ペンや筆やエンピツではとても書きあらわせない。人食い土人でもいいから、そばにいてほしいと思うほどである。

クプクプは、そろそろとまっ暗な森の中を歩きだした。どんな猛獣がひそんでいるかもわからない。

「そうだ、木にのぼろう。木の上ならいくらか安全だろう」

クプクプは手さぐりで、とても太い大木の幹をさぐりあてた。幹にはツル草がからまっている。これならよじ登れそうだ。

以前、ナンジャやモンジャに、やいやいいわれて、帆柱にのぼった経験が役にたった。するするというわけにはいかなかったが、ウンショコラショと息をきらして、クプクプは大木をよじのぼりはじめた。枝が二つにわかれているところまできて、クプクプはホッと息をついた。ここで眠ろうか。それとも、もうすこし上までのぼったほうがよいかな。そう思いながらなにげなく上方を見あげたクプクプは、からだじゅうの血が、いっぺんにドライアイスで冷やされたような気がした。

そこに、なにかくろいかげがいるのだ。

ヒョウか？　トラ？　いやいやサルのように手で幹をつかんでいる。それならばゴリラか、オランウータンか？

どうするわけにもいかなかった。クプクプは思わず彼のもっているただ一つの武器、切っても切れない安全ナイフをにぎりしめた。しかし、おそろしさのあまり、からだがガクガクとふるえだした。

すると、上のほうからも、カチカチカチというような音がきこえてきた。オランウータンが歯ぎしりしているらしい。いや待てよ。あんがいこのオランウータンだってこちらのことをこわがってふるえているのかもしれない。猛獣と出会ったときはおそれてはならない、となにかの探検記に書いてあったではないか。

そこでクプクプは、できるだけものすごい声でうなってみた。

「ウーッ、ウーッ！」

するとくろいかげは、はたしておじけづいたらしく、じりじりと上のほうへ逃げだそうとする。シメタと思ってクプクプは、せいいっぱいの声でわめいた。

「ウォーッ、ワォーッ、ギャオウッ!!」

すると、思いがけなくもそのくろいかげは、人間の声で、なさけない悲鳴をあげたではないか。

「ヒヤア、タスケテクレエ！」

クプクプだってギクリとした。相手はオランウータンではなく人間なのだ。すると人食い土人のひとりがまだ木の上に残っていたのだろうか。それにしても気の弱そうな人食い土人らしい。

こういうときは、見かけだけでも強そうにするにかぎる。そこでクプクプは、切っても切れない安全ナイフをふりかざしてさけんだ。

「ズタズタにしてやるぞ！　コマギレにしてやるぞ！」

すると、くろいかげは、おどろいたようにこう叫んだ。

「なんだ？　おまえは人間か？」

「あたりまえだい。このナイフは危険きわまるとびだしナイフだぞ、この人食い土人め！」

「待ってくれ、待ってくれ」

と、相手は片手をふりまわして、なさけない声をだした。

「ぼくは人食い土人なんかじゃない！」

そのことばはウソではなさそうだった。

「それなら、いったいだれなんだ？　なぜこんなところにいるんだ？」

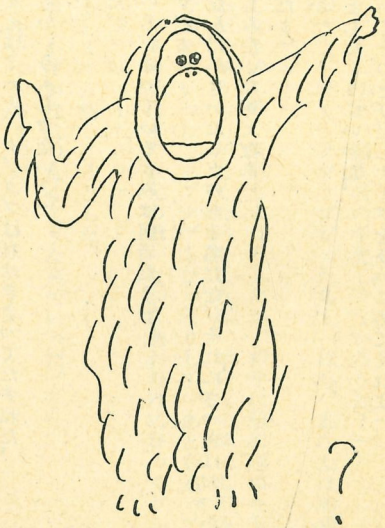
と、クプクプはなおもせいいっぱいの威厳のある声をだした。

「たすけてくれ」

と、なさけない声が返事をした。

「ぼくはわるい男じゃない。武器なんぞもってはいない。ナイフさえもってはいない。もっているのは万年筆一本だけだ。こんなところにいるのも、ただイカダがながれついたからなんだ。わる気があってじゃないんだ。そのとびだしナイフをひっこめてくれえ！」

「マンネンヒツ？　イカダ？」



と、クプクプは胸のなかでつぶやいた。それから、ハッと思いあたって、身をのりだした。
「ひょっとしたら、あなた、小説をかいたりする人？」
「そうだ、そうだ。危険な男じゃない」
「名まえは、名まえは？」と、クプクプは息せききってたずねた。
「キタ・モリオとかいう人じゃない？」
「そうだ、そうだ」
と、相手はいった。
「しかし、ぼくの名を知っているきみは何者だ？」
「ぼく、クプクプだよ」
「クプクプ？　なんだかきいたことのある名だな。それにさっきはおっかない声をだしていたが、なんだか子どもみたいな声だなあ」
「ぼく、子どもだよ」
「そうか、そうか」
と、相手はホッとしたようにいった。
「しかし、とにかくそのとびだしナイフをひっこめてくれよ」
クプクプは思わず笑ってしまった。思いがけなくも、こんな場所でキタ・モリオ氏を見つけだした喜びよりも、彼があんまり弱虫なのでおかしくなってしまったのだ。
「このナイフは切っても切れないんだよ。児童保護委員会のスイセンつきだよ」

「きみは、暴力をふるうような危険な子どもじゃないんだな？」
「もちろんだよ。それに、ぼく、ずっとあなたをさがしていたんだよ」
「ぼくをさがしていた？」
と、キタ・モリオ氏はギクリとしたようだった。
「まさか、まさか、きみはあの編集者の手先じゃなかろうね？」
「ちがうよ、ちがうよ、ぼく、クプクプだったら！　ほら、あなたは船乗りクプクプっていう本を……」
クプクプはいっしょうけんめい証明しようとしたが、相手は急に返事をしなくなってしまった。それればかりか、からだじゅうの力がなくなったように、半分木の幹にしがみついたまま、急にズルズルと下へすべりおちていった。クプクプもびっくりして、あとを追って木の幹をすべりおりた。すると、キタ・モリオ氏は木の根元の草のなかにあおむけにひっくりかえっている。
「どうしたの？　え、どうしたの？」
と、クプクプはあわてて介抱しようとした。
キタ・モリオ氏は、かすかな蚊のなくような声でいった。
「ぼくはいま気を失いつつあるのだ」
「どうして？　毒蛇にでもかまれたの？」
「いいや」
と、相手はブョのなくほどの声でいった。

「人間は安心すると、かえって気を失うんだ。ぼくは医者でもあるから、ちゃあんとわかるのだ。エヘン」

「お医者さんなら、もっとなんとか自分で手当ができないの。しっかりしてよ」

「ところがダメなんだ。ぼくはそれほど名医じゃない。どういう症状か診断はつくが、それから先はどう手当してよいかわからない。とにかくおれは気を失うよ。気がつくまでソッとしておいてくれ。ああ、ついに気を失った」

そうつぶやくと、彼はガックリと首をたれてしまった。もうゆりうごかしてもたたいても返事がなかった。

まっくらなジャングルの中で、クプクプはどうしていいかわからなくなった。さっきまでは気がはっていたのだが、急に疲れがドッとおしよせてくる。せっかく見つけだした小説家は気を失って身うごきもしない。なんだか、とてもだらしのない男のようだ。

これではせっかく見つけだしても、あまりたよりにならないのではないか。

そのうちにもジャングルの夜はふけてゆき、あちこちでギャアギャアとあやしい鳥やケモノの叫び声がきこえた。

長い長い夜であった。これほど夜があけるのが待ちどおしいことはなかった。

ようやっと、無数の樹木の幹や枝葉の間から、朝の光がながれこんできたとき、クプクプはすっかりグッタリとなっていた。彼はほとんど眠らなかったのだ。

すると、かたわらにころがっていた小説家のからだがモゾモゾとうごいた。

「あ、気がついたの。だいじょうぶ?」

ところが、相手はケロリとしてこういった。

「ああ、よく眠った。きみはゆうべの子どもだな。どうした、元気がなさそうじゃないか」

あれ、自分のほうがよっぽどだらしないくせに、とクプクプは思った。

「だって、あなたは気を失っちゃったんだよ、きのうの夜」

「そうらしいな」

「だからぼくは心配で一晩ねむれなかった」

「それは心配するほうがわるい」

と、小説家は平気でいった。

「ああいうときは気を失うのが医学的にも一番いいのだ。ぼくはなにしろ医師免許ももってるので、そういうことをちゃんと知っているのだ」

「チェッ」

と、さすがにクプクプはすこし腹をたてていった。

「だらしがないんだなあ」

「だらしなくはない。いいかね、ぼくは気を失った。だから一晩ぐっすりねて、今は元気になっている。きみは気を失わないから、そんなあかい目をしている。どうだ、おれのほうが利口だろう?」

そういってキタ・モリオ氏は得意そうに胸をそらした。

なんだかバカみたいな人だなあ、とクプクプは思った。しかしクプクプにとってはたいせつな男である。ヌボーの話によれば、この人がうまく『船乗りクプクプ』のつづきを書いてくれれば、彼もタローとなって自分の勉強べやにもどれるかもしれないのだ。きげんを損じてはならない。

クプクプはそっときいた。

「あなたは、船乗りクプクプって本をかいたでしょう?」

キタ・モリオ氏はびっくりしたようだった。

「どうしてそんなことを知っているんだ?」

「だってぼく、あの本をもってたもん」

「あの本をもっているのは地球上に五人しかいないはずだ」

「ぼくはそのひとりですよ、しかもちゃんとお金をだして買ったんだよ」

するとキタ・モリオ氏はまたギクリとしたらしかったが、いくらかふしぎそうにこういった。

「それはたいそうえらいことだ。しかし、あの本を買うとき、いったいどんなところがきみの気に入ったかね」

ちがいますよ、本当は内容をみないでまちがえて買っちゃったんですよ、とクプクプはいおうとした。しかし、そんなにハッキリいってしまっては、キタ・モリオ氏がきげんをわるくすると思ったから、こういった。

「著者の名まえがいいですね」

「そうか、そうか」

と、キタ・モリオ氏はニコニコした。

「文章もわるくないですね」

と、クプクプはいった。本当はぼくたちのツヅリカタとあまり変わりないんだがなあ、と思いながら。

「そうか、そうか」

と、キタ・モリオ氏はニコニコした。

「ただ……」と、クプクプは口ごもった。

「ただ、なんです?」

「ただ、いくらなんでも、あまり短かすぎますよ。本文がたった二ページじゃあ」

「たしかにそうだ。もっともなことだ」

と、キタ・モリオ氏は急に元気がなくなって、ションボリとつぶやいた。

「しかし、あれにはいろいろと事情があってね。まあ、あきらめてくれ」

「それじゃあんまり勝手だなあ」

と、とうとうクプクプは、しんぼうしきれなくなってさけんだ。

「まあ待ってくれ。実はぼくもあれではひどすぎると思っている。それじゃこうしよう。あの本の代金をきみに返そう。それならいいだろう、ね、きみ?」

「お金なんかいりませんよ、ぼく」

と、クプクプはさけんだ。

「それより、どうしたって、あのつづきを書いてほしいんですよ」

「ほほう」

と、キタ・モリオ氏はまたニコニコしだした。

「あれはそんなにおもしろかったかい？」

ちっともおもしろくありませんよ、とクプクプはさけぼうとした。しかし、ここがしんぼうのしどころだと思って、こういった。

「あのクプクプっていう主人公を、東京の自宅の勉強べやにかえしてほしいんです。ぜひそう書いてください」

「なんだって？　東京の勉強べや？　東京なんぞクプクプと関係ないぞ。それじゃスジがメチャクチャになってしまう」

と、キタ・モリオ氏はしぶい顔をした。

「あのクプクプは、いったいどうなるのか、おれにもわからんなあ。なぜって、まだ船にものっていないんだからなあ。たしか、クプクプっていう少年が、波打ちぎわで海をながめていると ころまで書いたっけ」

「いいえ、もうちゃんと船にのってますよ」

「のらん、のらん。あのあとは、さて船乗りクプクプは……って、ここまでかいたんだ。そのあとはいったいどうしたものだろう。波打ちぎわで海をながめていて、おなかがへって、ながれてきたジャガイモの皮でも食べることにするか」

「そんなつまらないこと書かなくたって、ちゃんと船出をしてますよ。船にはカンシャクもちの船長や、デブのナンジャやヒョロのモンジャや、大男で気だてのやさしいヌボーが乗ってるんです」

「そんなへんな連中はおれは知らんぞ。だが、そうしてもわるくないなあ」

「だって、そういうふうにもうなってるんですよ。それからナマケモノの島にたどりつくんです」

「ナマケモノの島！」

と、キタ・モリオ氏は急に大きな声をだした。

「その島はおれも知っているぞ。そうだった。もうすこしでぼくは王さまになれるところだった」

「それからあなたは編集者の手紙におどろいて逃げだして、クプクプの船はそのあとを追いかけるんです。アラシがきて、とうとうこの島にながれついたってわけですよ」

「なるほど、きみは才能がある。きみに原稿用紙と万年筆をあずけるから、ひとつその物語をかいてくれないか」

「だめですよ。かんじんのクプクプが東京の自分の家にかえりつくところを、すぐ書いてくれなくちゃ」

「そんなところになんで東京なんぞでてくるんだ？　なぜきみはそんなにクプクプのことに熱

心なんだ？」

「だって、だって」

と、クプクプはさすがにたまりかねて大きな声でさけんだ。

「ぼくが、そのクプクプなんですよ！」

クプクプはあまりたよりになりそうもない小説家に、いっしょうけんめい、これまでのことを説明した。このヘンチクリンな世界は、キタ・モリオ氏の責任にちがいないこと、キタ・モリオ氏がきちんと物語をかいてくれたなら、こんなおかしなことにならなかったであろうこと、だから、せめて自分をもとのタローに戻してくれと頼みこんだ。

「そりゃふしぎな話だなあ」

と、すっかりクプクプの話をききおわったとき、キタ・モリオ氏はあっけにとられたように首をふった。

「感心してちゃ困るなあ。とにかくあなたの責任ですから、なんとかしてください」

「といったって、ぼくがなにか書いたとしたって、うまいぐあいにそのとおりになるかしらん」

と、キタ・モリオ氏は自信なさそうに首をふった。

「第一、そりゃおかしいぞ。この世界がすべてぼくの書くままになるのなら、ぼくはなぜこんなに苦労して逃げまわっている必要があるんだ？　あの編集者がスイカを食べすぎてオナカがハレッした、とかいてそのとおりになるのだったら、こんなうまい話はないのだがなあ。ところがどうだ、きみ、これを見たまえ」

といって、キタ・モリオ氏はふところから一通の手紙をとりだした。

クプクプがのぞいてみると、それにはこうかいてあった。

世界にたぐいまれる大ペテン師であり、憎んでもオツリのどっさりくる小説家へ。

小社は貴下のすすめにしたがい『船乗りクプクプ』をノートとして売りだし、なおさら尽大な損失をこうむったことを報告する義務と権利を有します。ノートとした『船乗りクプクプ』は一冊も売れませんでした。四万九千九百九十五部がいっぺんに返品され、その重みのために、小社の倉庫は床がぬけました。小社は貴下に『船乗りクプクプ』のつづきを書くことをもはや望みません。貴下と縁を切らないかぎり、小社が破滅することは目に見えているからです。

「ここまではいいのだ」

と、キタ・モリオ氏はため息をついた。

「まあ、つぎをよんでみてくれ」

小社は貴下と縁を切ることを決定しましたが、ただ縁が切れると思われるのは虫がよすぎるというものです。小生、つまり貴下といささか縁のある編集者は、この事件のため、上役から

大目玉をくいました。小生はどんなことがあっても貴下をさがしだす決心をしました。貴下のカボチャのごとき頭をトンカチでたたき、貴下の貧弱なからだをノコギリでギコギコやり、塩とコショウをふりかけて、海の魚に食べさせてやりたいと冗談でなく思う者であります。

「塩とコショウをふりかけるだと」

と、キタ・モリオ氏はふるえる声でいった。

「まるで人食い人種みたいないい草じゃないか！」

クプクプはハッと思いだした。たいへんだった。今はこんなことでグズグズしてはいられないときなのだ。

「あなたはこの島にいつ着いたの？」

と、クプクプは息をきらしてたずねた。

「いつだって？　それはきのうさ。ジャングルが深いから、木の上で夜をあかそうと思ったら、きみがでてきたんじゃないか。けしからん、おどかしおって。ぼくは、てっきりオランウータンだと思った」

「それじゃなにも知らないんだね。この島には人食い土人がいるんだよ。そして船長もヌボーもみんなつかまっちゃったんだ。早く助けなければ食べられちゃう」

「人食い土人だと？」

キタ・モリオ氏はおどろいて顔色をかえると思いきや、逆に上をむいてアハハハと笑った。

「アハハハ。いや、もっとゴーケツらしく笑わなきゃ。カンラ、カンラ。いや、どうもうまくいかないぞ。これならどうだ？　カーンラ、カラカラカラ。どうだ、強そうだろ」

「そんなバカ笑いしている場合じゃありませんよ」

「あわてるな、あわてるな」

と、キタ・モリオ氏はさっきと別人のようにえらそうに鼻の下をこすった。

「ぼくは、いや、わがはいは、正直いって小説をかくことはへただ。編集者もどうも苦手だ。ところが土人には強い。いいかね、ナマケモノの島でだって、すんでのところで王さまになるところだった」

「だって、あんなおとなしい土人じゃないんだよ。人食い土人だよ」

「平気、平気」

と、キタ・モリオ氏は胸をドンとたたいてみせた。

「ぼくは土人のことは子どものころから研究してきた。彼らはなんといっても野蛮人だ。頭がよわい。それにくらべるとなんといってもこちらは文明人だ。頭を使わにゃいかん、頭を。なあに、わがはいが作戦を考えりゃあ、人食い土人の百人や二百人わけはない」

「だいじょうぶかなあ」

と、クプクプは半信半疑でいった。

「あの人食い土人は、頭がよさそうだったよ。ステーキだのカツレツだのを知っているし、パセリやカラシをそえることも知っているよ。どうもなかなか文明的な人食い土人らしいよ」

「なあに、たかが野蛮人だ。そうだ、ひとつ人食い土人どもを征服して、その王さまになってしまおう。そうなれば、あの乱暴な編集者だって、いくらなんでも近づけないだろう」

キタ・モリオ氏は急に元気がでてきたようだった。彼はひとりでうなずくと、昨夜気を失った男とはとても思えないえらそうな調子で、クプクプに命令した。

「さて、チビ、ついてこい」

何事もおこらない

ふたりはジャングルの中をすすんでいった。小説家があまり自信がありそうなので、クプクプもなんだか信じてよいような気持ちになってきた。とにかくいまは、船の乗組員を助けることだ。そのあとで、キタ・モリオ氏にクプクプがタローにもどることができるかどうか、もう一度たのんでみてもおそくなかろう。

しばらくジャングルをかきわけてゆくと、だしぬけに小説家が足をとめた。

「シーッ」

と、彼は指を口にあてた。

「なにかきこえるぞ」

クプクプは耳をすました。なるほど、おいしげった葉にかくれて見えないが、むこうのほうで、なにか息をついているような音がする。それから、ケモノのうなるような声もする。

「クプクプ」

と、キタ・モリオ氏がちいさな声でささやいた。

「なにがいるか見てきてくれ」

「そりゃずるいよ」

と、クプクプは抗議をした。

「あなたは人食い土人なんか平気なんでしょう。あなたが見てくればいいのに」

「おれは指揮官だぞ」

と、キタ・モリオ氏はいばっていった。

「戦争に勝つには、指揮官は後方でいろんな策をねらねばならん。まず部下の者がテイサツをひきうけねばならん」

「ずるいなあ」

しかたなしにクプクプは、足音をたてぬようにそっと近づいていった。うめき声と、ハアハア息をつく音がしだいに大きくなる。そして、草むらの間から、クプクプがおそるおそるのぞいてみると、次のような光景が目にうつった。

そこにいたのは、ナンジャとモンジャのふたりであった。

そしてふたりは、なんとまだジャンケンをやっていた！

「ハアハア、そら、ジャンケンポンよ。あいこでチーよ、勝った勝った、これで九十五対九十二だな」

「ハアフウハア。バ、バカをいえ、九十五対九十三だ、ハアハア」
「そ、そんなことあるものか。おれはちゃんと数えていたぞ」
「おれだってちゃんと数えている。ゼッタイに間違いない、ハアハア」
「それなら、どっちが正しいか、ジャンケンできめるか？」
「のぞむところだ。ハアハア、それも公平に百たびだぞ。それ、ジャンケンポンよ、ホイホイバーよ」
どうしてこんな勢いでジャンケンを丸一日もやっていたふたりが、人食い土人に見つからなかったのかふしぎだが、とにかくふたりは息をきらし、汗水たらしてジャンケンをやっていたのだ。
そんなことを知らないクプクプは、うれしさのあまり、夢中でそこへとびだしていった。
「ナンジャにモンジャ！　ふたりとも無事だったんだねえ！　よくつかまらなかったねえ！」
「なんだ？　クプクプじゃないか。いったいどうしたのだ？　まてよ、これで三対二だったな」
「ウソをつけ。二対三だ」
「よし、一回くらいまけてやる。さあこい、そら、ポンポンポンよ、あいこでグーよ」
クプクプはあっけにとられた。
「ふたりとも、それ、なんのまね？」
「見ればわかるじゃないか。ジャンケンをしているんだ」
「いったいなんでジャンケンをしているの？」
「なんでって……おい、モンジャ、おれたちはどういうわけでジャンケンをはじめたのだったかな？」

「さあ、なんだっけなあ。とんと覚えていない」
「ふたりともノンキだなあ」
と、クプクプはあきれかえってさけんだ。
「ジャンケンどころじゃないよ。みんな、人食い土人につかまっちゃったんだよ！」
「人食い土人？」
ふたりともサッと顔いろを変えた。そしてクプクプがきのうからの事件を物語ると、その場にヘナヘナと腰をぬかした。
「ああ、もうだめだ。どうもろくなものが住んでいないような島だと思った」
「でも、なんとかみんなを助けなくちゃ」
と、クプクプはふたりの手をひっぱろうとしたが、
「助けるって？　とんでもない。大ぜいの人食い土人に、いったいたった三人ぼっちでなにができる？　それに、おれたちゃ腹がへっている。考えてみりゃ、おれたちは食物をさがしにきたんだ。まだなんにも見つけてない。ああ、もうダメだ」
そのときである。うしろの草むらがガサガサとうごき、ヌッとひとりの男が姿をあらわした。キタ・モリオ氏である。
さっきクプクプといっしょにいたときは、ボロボロのシャツにしわくちゃのズボンだったが、今は腰に太いベルトを巻いている。ベルトのサックにはピストルらしいものがはいっている。ま

るで西部劇の一番下っぱの役者を水につけてカビをはやしたようなかっこうなのだ。

そんなあやしげなスタイルで、キタ・モリオ氏はノッシノッシとがにまたみたいな歩き方をしながら、三人のところに近づいてきた。

「これ、なげくな、そこの船員よ。わがはいがきたからには、もうディゼルエンジンつきの大船にのったようなものだ」

「な、なんじゃい、この人は？」

と、ナンジャとモンジャは口をあんぐりあけ、いっそう腰がぬけてしまったようだった。

クプクプはあわてて、ふたりの耳にこそこそとささやいた。

「え、じゃこの人が、魔法をつかって、ブドウ酒の川とルビーの浜をつくってくれるおかたか？」

ナンジャとモンジャは急にペコペコおじぎをしだした。キタ・モリオ氏は、なんだかわけはわからないが、大得意である。

「さあ、わがはいがきたからにはもうだいじょうぶ。人食い土人退治の作戦をねることにしよう」

クプクプは半分あきれながら、そっときいてみた。

「そのかっこう、どうしたの？」

「ぼくがかくしておいたカバンから出してきたのだ」

「そのピストル、本物なの？」

「実は音しかでないオモチャなんだ。しかしアタマのよわい人食い土人にはそんなことはわからない。いいか、彼らに目にものみせてくれるぞ」

キタ・モリオ氏は、てんでいい調子なのである。

「でも、いったいぼくたち四人ぼっちで、どんなふうに人食い土人を退治しようというの？」

と、クプクプはたずねた。

「そこだて」

キタ・モリオ氏は胸をそらし、あんまりそらしすぎて、あやうくひっくり返りそうになった。

「ぼくは、いや、わがはいは、クスノキ・マサシゲからロンメル将軍にいたるまでのいろんな作戦を知っている。頭を使うのだ、頭を」

「なんですね、そのクスノキだのロンメルだのってのは？」

と、デブのナンジャがおそるおそるたずねた。

ナンジャもモンジャも、キタ・モリオ氏が見たこともない奇妙なかっこうをしているうえに、ブドウ酒の川をつくることができると聞いているものだから、とてもえらい人なのだと思いこんでいるようだ。

「クスノキ・マサシゲを知らないのか？　たいへんハカリゴトのうまかった武将だ。難攻不落の大阪城という城をつくった」

と、キタ・モリオ氏はいばってこたえた。

「あれ？　千早城でしょう？」

と、クプクプはおどろいて口をはさんだ。
「そうだったかな。ロンメルというのは第二次世界大戦の、有名な将軍だ。さばくのタヌキといわれていた」
「タヌキじゃあない、さばくのキツネですよ」
と、クプクプは訂正した。
「うるさいな。タヌキでもキツネでも似たようなものだ。とにかく彼らはハカリゴトがうまかった。ハカリゴトをもってすれば、人食い土人ぐらいやっつけるのはわけはない」
「でも、楠正成だってロンメルだって、けっきょくは負けちゃったんじゃないの？」
と、クプクプはたずねた。
「うるさいな。それは相手が野蛮人じゃなかったからだ」
「それじゃ、どんなハカリゴトをたてるの？」
「まあ落ち着け」
と、キタ・モリオ氏はみんなを見まわした。それから、だしぬけに大声でわめきだした。
「ああ、おれたちはもうダメだ！　人食い土人にはとても勝てん。戦ったって負けるにきまっている。みんないさぎよく首をつって死んでしまおう！」
「どうしたの？　さっきまであんなにいばっていたのに」
と、クプクプはびっくりして叫んだ。
「首をつるのはイヤだ！　それくらいなら逃げましょうよ」

と、ナンジャとモンジャも顔いろを変えた。
「しーっ」
と、キタ・モリオ氏は口に指をあてた。
「おろか者めが。これもハカリゴトのうちだ。そこらに人食い土人のスパイがひそんでいるかもしれん。こういっておけば、やつらも安心するにきまっている」
「なるほど、なるほど」
ナンジャとモンジャはすっかり感心したようだった。
なんだか子どもだましだなあ、とクプクプは思ったが、だまっていた。
「みんな顔をあつめろ」
と、キタ・モリオ氏はブヨがなくほどの小さな声でささやいた。
「ハカリゴトは密なるをもってよしとする。いいか、スパイに聞かれんようにな。ヒソヒソヒソ」
「え？　いったいなんていったんです？」
「大きな声をだすな。いいか、ヒソヒソヒソ」
「ぜんぜん聞こえやしませんよ」
「きみたちに聞こえないくらいなら、まずスパイにも聞こえんだろう」
「冗談じゃありませんよ。もったいぶらないで早くいってください」
「よし。そんならいうが、まずワラ人形をつくろうと思う」

「ワラ人形？」

「これこそクスノキ・マサシゲのハカリゴトだ。ワラ人形を並べて敵軍をさそいかける。敵はむきになって攻めてくる。するとそこにはオトシ穴がほってある。敵軍はバッタバッタと穴の中におちこむ。そこを弓をつがえてヒョウ、ヤリをとってグサリ、ピストルをバババーン」

「ねえ、ちょっと」

と、クプクプはたまりかねてさえぎった。

「あなたは子どもマンガをよみすぎたんじゃない？　そんなにうまくいくはずがないよ。それに、ワラ人形をつくるったってワラなんかないし、オトシ穴をほるたって、ぼくたちにはクワ一本ないんだよ」

「オトシ穴なんぞほるのは、おいらもイヤだ」

と、ナンジャとモンジャも反対した。

「おれたちゃなんにも食べてないんですからねえ。腹がペコペコでとっても」

「それならばしかたがない」

と、キタ・モリオ氏はしぶい顔をした。

「作戦会議がそのように分裂するならやむを得ない。古今の名将も意気地なしの部下のために失敗したものだ。せっかくの名案もこれではだいなしだ。それではきみたちの仲間が食べられてしまうのを、だまって見ているより方法がない」

「そんなこといわないで、もっとほかのチエはないの？」

「いくらだってある」

と、キタ・モリオ氏はまた得意顔になった。

「チエなんぞゴマンとあるぞ。あんまりありすぎて、どれにしようか迷ってしまうくらいだ。なにしろぼくは、いや、わがはいは、土人学の大家なんでね」

「ゴマンもいらないから、一つ二つだしてくださいよ」

「そうだ」と、キタ・モリオ氏はひざをたたいた。「いくら相手が人食い土人でも、殺してしまうのはいけないことだ。ひとつ戦争をしないで、やつらを降参させることにしよう」

「そんなことできる？」

「たやすいことだ。ぼくはカバンのなかに手品の道具をもっている。それをみせれば、人食い土人はぼくを魔法使と思いこむだろう。いや神さまと思うにちがいない。そうなれば彼らはみんな平つくばって命令をきく」

「あなたは手品がうまいの？」

「うまくはないが、ちゃんと道具がある。野蛮人をだまくらかすことぐらいわけはない」

「もし失敗したら？」

「うるさいな。どうしてそういちいちうるさくきくのだ。もし失敗しても、ぼくは催眠術を知っている。ヤバン人には催眠術がかかりやすいのだ。どうだ、これで安心したろう？」

クプクプはあまり安心もしなかった。しかし、キタ・モリオ氏があまり自信ありげなので、とにかくコックリすることにした。

なにもしないでいれば、船長はじめみんなの生命があぶないのだ。

キタ・モリオ氏は三人をつれて、ジャングルの中をすこし引き返していった。昼なお暗い巨木がおい茂っている。木もれ日がまばらにこずえからふりそそいでくる。きのうは鳥の声ひとつしなかったのに、この朝はあちこちで小鳥がなきかわしている。

クプクプはすこし安心した。こんなふうに小鳥がないているのは、人食い土人の群れがそこらにかくれていない証拠ではないか。

ところが、クプクプはぎくりとして立ちどまった。頭上から、だしぬけに、笑い声がひびいてきたからである。

「ケラケラケラ」

その笑い声はそんなふうにきこえた。

キタ・モリオ氏もあきらかにギョッとしたらしかった。彼はいきなり腰のピストルをひきぬいた。ピストルといってもオモチャである。しかし、彼はそのピストルをピタリとかまえ、ふるえ声でさけんだ。

「だれだ？　何者だ？　このピストルが目にはいらぬか。オモチャではない本物のコルトだぞ」

ところが、葉の茂みからとびだしたのは、一羽の鳥だった。その鳥は、むこうの枝にとまると、ふたたび、「ケラケラケラ」と笑い声をたてた。まるで人間のしゃがれた笑い声そっくりなので

ある。

「わかった」

と、クプクプはさけんだ。

「あれはワライカワセミですよ。生物の時間に習ったことがある」

キタ・モリオ氏はバツがわるそうに、ピストルをかまえた腕をおろした。

「なるほど、そうらしい。いや、まてよ、ワライカワセミにしては羽の色がおかしい。あれは新種かもしれない。あれをつかまえて研究してみよう」

「そんなひまはありませんよ。とんでもない」

「それもそうだ。しかし、ワライカワセミの類がいるところをみると、この島はオーストラリアの近辺らしいな。どうだ、ぼくのように生物学の知識があると、ものごとがハッキリするだろう？」

「そんなことといったって、この世界はメチャメチャの世界なんだから、生物学の知識もなにも役にたちませんよ。船長の話によると、パイプをふかすヒキガエルがいる島だってあるんだから」

「それはほんとうかい？」

と、キタ・モリオ氏は目をまるくした。

「それならぼくは、ぜひその島にわたって、そのヒキガエルをつかまえよう。それも新種にちがいない。それにしても、そのカエルはどうやってパイプに火をつけるのかな？」

「ノンキなことをいってるときじゃありませんよ」

「だいじょうぶ。トランクはすぐそこにある」
キタ・モリオ氏は、大きな木が枯れたまま立っているところに立ちどまった。木の根元がうつろになっている。彼は手をさし入れて、ずるずるとかなり大きなトランクをひっぱりだした。それはずいぶん古いトランクだった。しかもイカダにしばりつけて長い航海をしたのであろう、あちこちにカキがこびりついていた。
ふたをあけると、中にはいろんな雑多なものがはいっていた。のぞきこんだナンジャがきいた。
「そこにある長っぽそいものはなんですかい？」
「これは万年筆というものだ」
「そっちにある紙の束は？」
「これは原稿用紙というものだ」
「あんたは、そのマンネンヒツとやらで、そのゲンコウヨウシに小説とやらをかくのですかい？」
「そうとも」
「そうすると、ブドウ酒の川でもなんでもできるってわけで？」
「まあ、そういうこともあるな」
と、キタ・モリオ氏は困ったように答えた。
「そいじゃひとつ、フカフカのパンとこってりしたチーズをかいてみてくれませんか。なにしろおれたちゃおなかがペコペコなんで」

「まあ待て」
と、キタ・モリオ氏はますます弱ったように答えた。
「そう簡単にやれるものじゃあない。これは魔法の一種だからな。よほどうまい時期にであわないとダメなのだ」
クプクプは、キタ・モリオ氏がしどろもどろに答えているのをきくと、おかしくなってたまらなかったが、急にあることを思いついた。
「ねえ、キタ・モリオさん」
と、彼はせきこんで話しかけた。
「もしこのメチャクチャの世界がほんとうにあなたのせいなのなら、ひょっとすると、みんなをすぐに助けられるかもしれませんよ」
「なんだって？」
「あなたがその原稿用紙に、人食い土人のことをかくんです、人食い土人は悔いあらためて、船長やヌボーやみんなを逃がしてやったって。みんなは喜んで、クプクプたちのところに駆けもどってきたって」
「そんなこといったって、そりゃむりというものだよ。さっきも話したろう？　そんなことですむのなら、なぜぼくがこんなふうに苦労しなくちゃならないんだ？」
「議論はあとにして、今は一刻を争うときですよ。ねえ、おねがいだから」
キタ・モリオ氏はしかたなしに、トランクのふたの上に原稿用紙をひろげた。しぶしぶ万年筆

を手にとった。そして彼は、のろくさと字をかいていった。

ナンジャとモンジャは、いよいよ魔法が見られるかと思って、目をさらのようにしてながめている。ふたりとも万年筆なんて見たことがない。奇妙な棒の先を紙にこすりつけると、なんだかへんてこな字がかけていく。それだけでも魔法のようだ。

クプクプも胸をワクワクさせながら、キタ・モリオ氏のかいていく字を見つめた。だが、それはなんとヘタクソな字だったことだろう。小学生でもこんな字はかくまい。おまけにキタ・モリオ氏はあまり漢字を知らないようだった。

「ええと、クイあらためるのクイってどんな字だったかなあ」

「そら、こうですよ」

と、クプクプはやきもきして教えた。

「船長のセンはフネって字ですよ。チョウはナガい。あ、一本棒が多すぎた。しようがないなあ」

いったいこんな男がどうして小説家といえるのか、クプクプはふしぎに思った。ようやくのことで、キタ・モリオ氏は数行の文字をかきおわった。

「……みんな喜んで、キタ・モリオ氏とクプクプとナンジャとモンジャのところに駆けもどってきた。マル。さあ、これでいいかい?」

クプクプは耳をすました。もしキタ・モリオ氏のかくものがほんとうにこの世界を変える力があるのなら、そろそろみんなの足音がきこえてもいいはずだ。

遠くで小鳥がないている。クプクプは胸をときめかして待っていた。今にもバタバタと足音がして、船長やヌボーが顔をだすのではないかと。

五分たった。十分たった。しかし、何事も起こらない。

クプクプはガッカリした。口をきく気さえなくなった。やはりキタ・モリオ氏にはなんの力もないのだろうか?

最後の切り札

「なんだあ。ちっとも魔法が起こらないじゃないか」

ナンジャとモンジャもつまらなそうにつぶやいた。ふたりともあまり期待が大きすぎたので、すっかり拍子がぬけてしまったのだ。今までキタ・モリオ氏をたいそうえらい人だと考えていたので、今度はふたりとも、バカにしたように小説家をジロジロとながめた。

そこでキタ・モリオ氏はあわてて、信用を回復しようとした。

「どうも大魔法には時期がわるいらしいな。もっと太陽や月や星の位置を定め、じゅもんをとなえてでなければダメなのだ。しかし、ちいさな魔術ならすぐにできるぞ」

そういって彼は、トランクの中をゴソゴソやって、一枚の白いハンカチをとりだした。

「いいかね、これは白い布きれだ。まっ白だろう? タネも仕掛けもない」

「あたりまえでさあ」

と、ヒョロのモンジャがいった。

キタ・モリオ氏はこぶしを丸め、小さくたたんだ白いハンカチをその間につっこんだ。それから、反対側からハンカチをひっぱりだすと、それはまっ赤なハンカチに変わっていた。彼はもう一度やってみせた。今度はハンカチは黄色になった。

これはもっとも簡単な手品である。彼のこぶしの中にはほそい木の筒がはいっているのだ。その筒の中に五色のハンカチが、はじめからはいっているのだ。

クプクプは、まだタローだったころ、夜店でこの手品の道具を買ったことがある。たしか八十円くらいだったと思う。

しかし、ナンジャたちのおどろきはたいへんなものであった。ふたりは口をアングリあけ、目をパチパチさせ、ホーッとため息をついた。

キタ・モリオ氏は調子づいて、ほかの手品もやってみせた。緑色にかがやくガラス玉をとりだし、それを宙でピタリととめてみせた。もちろん目に見えぬほどほそい糸がついているのだ。

カラの木箱の中から、いくつかの品物をとりだしてみせた。もちろん二重底になっているのだ。

ナンジャとモンジャはあっけにとられ、しまいにはガタガタふるえだした。

「この人はやっぱり大魔法使だ。ああ、アラーの神よ」

「えへん、えへん、ちちんぷいぷいよ」

と、キタ・モリオ氏は大得意である。

「さあこれで、わがしいがどんな力をもっているかわかったろう?」

「へえへえ、ようくわかりました」

「それならば、これから魔法の力をもって、人食い土人たちを征服してしまおう。そうだな、おいきみたち、デブにヒョロ、きみたちがオトリになって人食い土人をさそいだしてこい」

「あっしたちがですか?」

ナンジャとモンジャはまたガタガタふるえだした。

「あっしたちは腹ペコで、走ることもできないんでさあ。せめてその魔法でちょっぴり食物をだしてくれませんか」

キタ・モリオ氏は思案をした。それからひとりでうなずくと、トランクの中から、登山に使うコッフェルをとりだし、プラスチックの水筒から水を入れ、湯をわかしはじめた。それからゴソゴソとセロファンの包みをとりだした。

「あ、インスタント・ラーメンだね?」

と、クプクプはのどをごくりとさせてさけんだ。

「しっ。魔法の一種だ」

キタ・モリオ氏は、もったいぶって言って、四人まえのインスタント・ラーメンをつくりあげた。ナンジャとモンジャは、これにもたまげたらしかった。ふたりは夢中でラーメンをすすり、すっかりキタ・モリオ氏を尊敬したようだった。

クプクプも文句もいわずに、夢中で食べた。なにしろおなかがすききっていたから、すこしカビの生えたラーメンもすてきにおいしかった。

「さあ、これでいいだろう。ふたりで人食い土人をおびきだしてこい。あとはわがはいがひきうける」

キタ・モリオはすっくと立ちあがると、指令官のように命令した。

「へえ、へえ」

ナンジャとモンジャはおそるおそるジャングルの中へ消えていった。ふたりともおっかなびっくりだったが、小説家の魔法をすっかり信用したのであろう。

「ほんとうにだいじょうぶなの？」

クプクプは心配でならなかった。なにしろ相手は大勢である。しかもおそろしい蛮人である。

「まあ、まかしておけ。あのふたりだってすっかりおそれいっていたろう？　ましてや単純な野蛮人はキモをつぶしてしまうにきまってる」

キタ・モリオ氏はのんきなものである。

そうして、三十分くらいもたったろうか。

「ヒー、ヒー」

という悲鳴のような声がきこえたように思った。

ドン、ドン、ドン、というタイコの音がひびいてくる。なにやらホウホウというような叫び声もする。いよいよ人食い土人がやってきたらしい。

「さあ、ここだ」

キタ・モリオ氏は、いくらか色青ざめてはいたものの、あんがい落ち着いていた。クプクプに

トランクをもたすと、足音とタイコの音のするほうにとびだしていった。

すこし行くと、ジャングルがひらけて、見とおしのきく草原になっている。その草原を、ころがるようにデブのナンジャとヒョロのモンジャが逃げてくる。そのうしろから何十人という真っ黒な土人たちが群らがって追いかけてくる。手に手に弓矢やヤリをもっている。

ナンジャとモンジャは息もたえだえに駆けつけてくると、小説家のうしろに、陸にあげられた魚のように口をパクパクさせてはいつくばってしまった。

そのときである。キタ・モリオ氏はさっと前にとびだすと、せいいっぱいの声でさけんだ。

「やあやあ、土人ども！　遠からん者は音にもきけ！」

クプクプは今はからだが小きざみにふるえた。はたして、うまくゆくのだろうか？

あまりキタ・モリオ氏が大声をあげたものだから、勢いすさまじく追いせまってきた人食い土人たちも、思わず足をとどめた。しかし、こちらをおそれている様子はない。そのままジリジリと近よってくる。

「寄るな、寄るな」

と、キタ・モリオ氏はかなきり声をあげた。

「おまえらのうちで、ことばのわかる者はいるか？」

すると、ひとりの背の高いたくましい土人がすすみでてきた。きのう、船におしよせてきた土人の指揮をとっていた男である。これが酋長なのだろうか。いや、年が若すぎるから、彼は酋長

のむすこなのかもしれない。

「どんな国のことばでも、おれたちゃわかるぞ」

と、彼は小バカにしたようにいった。

「ほら、あのとおり、あいつらはとても文明的な人食い土人なんですよ」

と、クプクプはささやいた。

しかし、キタ・モリオ氏はコウフンのあまり、そんなことばは耳にはいらなかった。彼はせいいっぱい威厳をみせて、両手を前にさしあげながらどなった。

「それならば、わがはいのことばをきけ。わがはいは大魔法使である。大々々々魔法使なのだ」

「ほう、どんな魔法を使うのかね？」

と、相手の土人は小バカにしたようにきいた。

「わがはいが大々々々魔術を使えば、天はさけ地はくずれ、おまえたちはミナゴロシになってしまうだろう。しかし、それではかわいそうだ。ちょっとした魔法を見せてやろう」

そういってキタ・モリオ氏は、さっきの白いハンカチをとりだし、ひらひらと目の前でふってみせた。

「さあ、タネも仕掛けもないよ。ちちんぷいぷい」

彼は不器用にハンカチをこぶしの中におしこんだ。その手がかすかにふるえているのがクプクプにはわかった。平気なような顔をしていても、内心キタ・モリオ氏は人食い土人がこわかったのであろう。そうして、さてそろそろこぶしの反対側からハンカチをひきだしてみると、それは

やっぱり白いまんまだった。

「ほう、それが魔法なのかね？」

相かわらず、人を小バカにしたような皮肉な調子で、背の高い土人がきいた。

キタ・モリオ氏は顔をまっかにした。

「いいや、白いハンカチは白いハンカチだ。いまそれを証明してみせたところだ。ところがお立合い、今度はそれが赤くなる」

「赤くならないと思うね」

と、人食い土人がいった。

「ところがちゃんと赤くなる。ほうら、このとおり！」

キタ・モリオ氏はもう一ぺんやってみた。しかし、どこに手ちがいがあったのだろう、ハンカチはまたもや白いまんまだった。ただキタ・モリオ氏の顔が、赤くなったり黄いろくなったりした。

「どうもうまくいかんようだなあ」

と、人食い土人があざわらった。

「なにを、じゃあこれを見ろ！」

カッとなったキタ・モリオ氏は、クプクプがふるえながら持っていたトランクをひったくり、中から緑色の玉やら二重底の木箱やらをとりだした。

「魔法というものは、なかなか起こり得ないから魔法なのだ。そういう起こり得ない大魔法を、

いよいよこれから起こしてみせるぞ！」
「まあ、やめたほうがいいなあ」
と、人食い土人はくろい鼻先でわらった。
「それより、こちらの魔法を見てごらんよ」
「なんだと？　おまえたちも魔法ができるのか？」
「そうとも。おれたちの魔法使、エイヒム・ビイバブ・グラグラアを紹介しよう」
背の高い人食い土人は、そういってうしろにむかって合図をした。
すると、大ぜいの土人たちのなかから、ずいぶん年とった木のこぶみたいな老人がすすみでてきた。頭に鳥の羽をいっぱいさしている。腰ミノも鳥の羽でできている。手にはジュウタンのようにぶあつい布をもっている。
「おまえが、そのエイヒム・ビイバブ・グラグラアとかいうやつか？」
と、キタ・モリオ氏はふるえ声でさけんだ。
「おこがましくも、わがはいに魔法合戦をしかけるというのか？」
「べつに合戦ないね」
と、エイヒム・ビイバブ・グラグラアは、舌たらずみたいな声でいった。
「ちょいと、わたしの魔術見せるあるね。べつに木戸銭とらないよ。ロハあるね」
エイヒム・ビイバブ・グラグラアは、よちよち歩いてくると、枯枝みたいな腕をさしのべて、デブのナンジャとモンジャを手まねきした。

「そこの太ったひと、ちょいとこちらにくるあるね。べつに食べないあるよ。ちょいと魔術するだけ」
「お、おいらか？」
と、デブのナンジャは顔いろをかえて、ハチに刺されたブタのようにふるえだした。
「そっちのほそい人でもいいよ。どちらでも早くくるあるね」
「お、おれはいやだ」
と、ヒョロのモンジャも風にふかれたススキのようにふるえだした。
「おまえ行けよ」
「と、とんでもない、おまえがいいよ」
「そ、それじゃあ、ジャンケンできめるか」
「よ、よし、さあこい」
ふたりがまたもやジャンケンをはじめようとすると、酋長のむすこらしい背の高い土人がニヤニヤして声をかけた。
「あ、そのふたりのジャンケンはやめてくれよ。どうせ勝負がつかないんだから」
「な、なんだって」
「どうせまた百たびでやるんだろ」
「え？　お、おれたちがジャンケンやってたのを知ってるのか？」
「ああ、ちゃんと知ってる。だけど確率をしらべるのにちょうどいいから、わざと知らんふり

して観察していた。ジャンケンのように勝ち負けの確率が等しい場合は、はじめは得点がひらいても、たくさんやればやるほど、ふたりの得点は近づいてくるはずだ。その統計をしらべようと思ったんだよ」

「ね、あの人食い土人はとても文明的でしょう?」

と、クプクプは思わずキタ・モリオ氏にささやいた。

「野蛮人だなんてバカにしてると、ひどい目にあいそうだよ」

「な、なに。ヤバン人はヤバン人だ。ちょっとしゃれたことをぬかすだけだ」

と、キタ・モリオ氏はやせがまんをしているみたいにつぶやいた。

けれども彼もおどろいたらしく、さいぜんのような元気さはなくなっているようだった。

背の高い土人はそんなことにおかまいなく、もじもじしているナンジャとモンジャにいった。

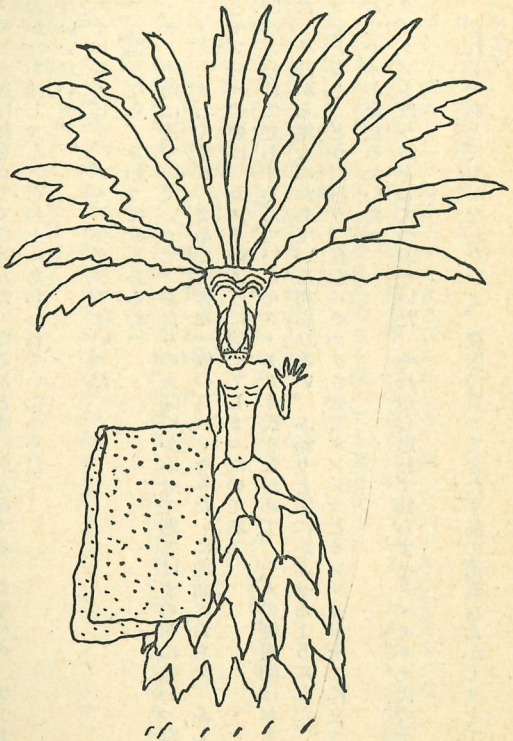
「さあ、そんなにゆずりあってないで、ふたりとも出ておいでよ。時間がもったいないからね。時は金なり、って格言もあるだろう?」

「なんにもこわくないあるね。タイチョブ、タイチョブ」

と、エイヒム・ビイバブ・グラグラアもふたりをうながした。

ついにナンジャとモンジャはおそるおそる鳥の羽だらけの老人のそばにすすみでていった。すると、エイヒム・ビイバブ・グラグラアは、厚ぼったい布をとりあげるや、ふわりとふたりの頭からかぶせてしまった。

「さあて、このふたりは布のなかにはいったね。もういないあるよ」



「そこにちゃんといるじゃないか！」

キタ・モリオ氏は腰を立ててさけんだ。なるほど布はかぶせてあったものの、デブとヒョロのふたりのかたちはちゃんと布の上にあらわれていたからだ。

「いないいないバア」

と、エイヒム・ビイバブ・グラグラアはいった。

「ウソと思うなら、さわってみるあるね」

キタ・モリオ氏は近づいていって、ふたりの人間にかぶせてあるはずの布にさわった。すると、布はグニャグニャとくずれ、まるで大きな一枚のフロシキみたいに地面におちた。ふしぎにもナンジャとモンジャの姿は、カスミのように消えてしまったのである。

あっけにとられて立ちすくんでいるキタ・モリオ氏をながめて、土人の魔術師はおもしろそうに笑った。それから地上におちている布をひろい、ふわりと宙にかぶせるようにした。ついでそれをサッととると、どうだろう、目をパチクリさせてナンジャとモンジャがそこに立っていた。

「まるでキオの魔法みたいだ」

と、クプクプもぼう然としてつぶやいた。それから思わず知らずキタ・モリオ氏のそでをひっぱった。

「ね、これじゃあとてもかなわないよ。夜店で買ってきた手品の道具なんかじゃとてもダメだよ」

「さあ、どうしますね？　あんたの魔法を見せてもらうかね」

と、相かわらず人をバカにしたように酋長のむすこらしい土人がいった。

「なにを！」

と、キタ・モリオ氏はうめいた。

彼はすっかり逆上したらしく、サッととびさがると、腰のピストルに手をやった。

「わがはいの魔法はこれだ！　この筒の中には雷電がはいっている。わがはいが合図をすると、火花と煙とともにとびだして、おまえらの血を吸ってしまうぞ！」

「それは雷電じゃあないね」

と、相手の人食い土人はいっこうにおどろかなかった。

「それはピストルというものだね。コルト・アーミー・リボルバーに似ているな」

「おや、知っているのか！」

キタ・モリオ氏はいきりたって歯を食いしばった。

「知っているのならかえって都合がいい。おれのピストルはすばやいぞ。抜く手も見せぬぞ。〇・六秒だぞ！」

「おどかしたってダメだよ。そのピストルはどうやらオモチャらしいな。プラスチックの弾丸さえとびださぬな。きっと音だけだよ」

「うぬッ！」

キタ・モリオ氏はうなったものの、すっかりいいあてられて、ピストルを抜くこともできず、ゼイゼイとあえいだ。

「もうとてもだめだよ。降参しちまおうよ」
と、クプクプもいまはすっかり絶望して、キタ・モリオ氏のそでをひっぱった。
しかし、小説家はあきらめなかった。
「まだ、奥の手があるぞ！」
そうさけぶと彼は、背の高い人食い土人の前にズカズカと歩みよっていった。
「さあ、もしおまえに勇気があるなら、一騎討ちをしよう」
「おや、なんだい？」
相手は落ち着きはらって、あざわらうようにいった。
「なんなりと相手しよう。武器はなににする？　それとも柔道かレスリングかい？　将棋かマージャンでもいいよ」
「そうじゃない。ニラメッコだ！」
「おやおや、笑うと負けかい？　子どもみたいだな」
「ぶつぶついうな。さあ、わがはいのマナコをにらんでみろ」
背の高い人食い土人はしずかにキタ・モリオ氏の目を見すえた。小説家もじっと立ったまま、相手の目をにらみつけた。そうやって目と目を見あわせたまま、キタ・モリオ氏はひくいぶきみな声でじゅ文をとなえだした。
「さあ、きみはだんだんとねむくなる。しだいにねむくなってくる。そら、マブタがおもーくなってきた。だんだーんとおもくなった。もっとおもくなる。もう目をあけてはいられなーい」

クプクプはハッと気がついた。キタ・モリオ氏は催眠術をかけようとしているのである。はたしてうまくかかるかどうか、もし成功しなかったら、それがクプクプたちの最後であろう。
キタ・モリオ氏は休まずにじゅ文をとなえつづけた。
「そら、からだがフワーッとしてきた。もう、ねむーいねむい。ものすごーくねむい。ねむいったらねむい。ねんねんこーろころ」
相手の土人はしずかに、まだ目を見ひらいて小説家を見つめている。キタ・モリオ氏は死にものぐるいだ。
「ねーむれ、ねむれ、はーはのむねーに。ぼうやのおもりはどこへいったあ。でーんでんたーいこにしょうのふええー」
彼の声はだんだんと眠そうになってきた。そのうち彼のからだがぐらりとかたむいた。そのままヘナヘナと土の上に横になる、と思ったら、いっしょうけんめい催眠術をかけていたキタ・モリオ氏は、もうグウグウ大いびきをかいて、自分が安らかに眠りこんでしまった。
クプクプは思わず息をのんだ。人食い土人たちは、なんとあらゆる術にひいでていることか。
「さあ、なにをやってもこの人はおれたちにはかなわない」
背の高い土人がニヤニヤしながらいった。
「それとも、そこのおデブさん、おヒョロさん、おチビさんたち、きみたちなにかやってみるかい？」

「い、い、いんや」

ナンジャもガタガタとふるえていた。彼らはたよりにしていたキタ・モリオ氏がごく簡単にやっつけられてしまったので、もう生きた心地もしなかったのだ。

クプクプはそっとあたりを見まわした。ナンジャとモンジャに目くばせをし、なんとか逃げだせるすきがないものかと考えたのだ。しかし、人食い土人はそんな心理をちゃんと見ぬいたようだった。

「ムダなことはするんじゃない。それ！」

命令一下、大ぜいの土人たちはたちまちバラバラと三人のまわりをとりかこんだ。もうどうすることもできない。

意外な結末

人食い土人たちはイビキをかいているキタ・モリオ氏をかつぎあげ、クプクプたちを追いたてながら、部落へひきあげはじめた。歩きながら、彼らはヤリを天にむかってふりあげ、こんな歌をうたった。

やわらかな小羊の肉
歯ごたえある野ブタの肉

おいしいことはおいしいけれど
ほっぺたがおっこちるのは　やっぱり人間！
ゴクリゴクリとツバをのめ！
おっこちたほっぺたは
たいせつにナベにあつめろ
とろ火でとろとろと煮つめろ
そいつを食べて　またほっぺたを落っことせ！
ゴクリゴクリとのどは鳴る！

ああ、もうこれで最後だなあ、とクプクプは思った。

やがて、ドンドンドンとタイコの音がきこえはじめた。人食い土人の部落である。本の中で見るような、土人の部落である。ところがおどろいたことに、石づくりの宮殿みたいな家もある。

「あれは議事堂だよ」

と、ひとりの土人がクプクプに教えた。

「それから、あれが原子力研究所」

と、モダンなプラスチックの建物の前をとおったときに、その土人はまた教えた。

「それから、あれが料理学校だ。グラタンやバーベキューやコールドビーフやフリーカッセなんかの作り方を教える。フリーカッセというのは、マッシュルームというキノコを入れてホワイ

トソースで煮るんだ。すてきにうまいぜ」

クプクプはすっかり仰天してしまった。なんという文明的な人食い土人であろう。これでは野蛮人どころではない。それだけに、この頭のよい土人からのがれることはとても不可能だろう。

「さあ、ここが牢屋だ。つまり収容所だ。しかしナチスのような真似はしない」

そういってクプクプたちはうすぐらい大きな部屋に入れられてしまった。まだ眠っているキタ・モリオ氏のからだも、どさりとそこの床にころがされた。そして、ギーッと厚いがんじょうな戸がしまった。

「おお、クプクプじゃないか！」

うすぐらいすみのほうから声がして、ばらばらと人かげがかけよってきた。見れば船長に、ジッパヒトカラゲの七人の男たちである。

「あ、船長さん！」

と、クプクプも思わず泣き声をたてた。

「ああ、よかった。まだみんな食べられないでいたんだねえ」

「しかし、いずれは食べられる」

と、船長は沈んだ声でいった。

「やつらは、わしたちを太らせようとしている。バナナやマンゴーやいろんな果物をくれる。それからなにかわからんが、動物質のパイのようなものをくれる。これがとてもおいしい。太ってはならんと思うが、みんながまんできんのじゃ」

「ワア、ワア、ワア」

と、デブのナンジャがかたわらで泣きだした。

「そのパイとかを早く食べたいよう。だけどそのあとで自分が食べられるんじゃいやだあ」

「ヌボーは？　ヌボーはどうしたの？」

クプクプはあたりを見まわして叫んだ。いまとなっては最後のたのみのつなである力持ちのヌボー、その大きな姿が見当たらない。

「まさか、もう食べられてしまったのじゃないね？」

「ヌボーはまだ生きている」

と、船長は首をふりながら説明した。

「だが、やつらは大男のヌボーを警戒している。そのため彼だけひとり、もっとがんじょうな牢屋に入れられている」

「だけど、ヌボーも食物を与えられているのかしら？　おなかがいっぱいになったら、あの力持ちのヌボーは牢屋くらい……」

「それがダメなのじゃ」

と、船長の顔いろはさえなかった。

「彼らはどうやらヌボーの食物に精神安定剤（トランキライザー）を入れているらしい。それでヌボーも牢屋をやぶる気力がでないらしい」

ああ、とても文明的な人食い人種たちは、なにもかも手ぬかりがないのだ。クプクプはホッと

ため息をついた。

「ここにいるこのへんな人はなんじゃね？」

と、はじめて気がついた老船長が尋ねた。

「あ、この人はね……」

クプクプはもう小説家のことなんかどうでもいい気分だったが、きかれるままに説明しようとしたとき、床でイビキをかいていたキタ・モリオ氏が身うごきをした。

「う、うーん。おや、ぼくは眠ったのかな？」

そんなことをつぶやきながら、彼はもぞもぞと起きあがってきた。

キタ・モリオ氏は、ねぼけマナコをこすった。

「ふしぎ、ふしぎ。どういうわけでぼくは眠ったのかな？　おや、なんだかへんなところにいるぞ」

「あなたって人は、ほんとにだらしがないなあ」

クプクプは自分たちが死ぬほどこわい目にあっているのに、のんきにねぼけている小説家に腹が立った。キタ・モリオ氏はいざというときには、すぐ気ぜつしたり眠りこんだりしてしまうのだ。

クプクプは腹を立てながら、あれからどんなことになったかを小説家に話してきかせた。

「あんなに自信ありげにいばっていたのに、とうとうぼくたちはみんなつかまっちゃったじゃないですか。あなたのおかげで、もう完全に絶望だ！」

「絶望だって？」

と、キタ・モリオ氏は、まだ事態が本当にのみこめないようだ。

「望みを失ってはならない。こういうときにはチエをださねばいけない。相手はたかがヤバン人だ」

「でも、あなたよりはよっぽど知能がすすんでるみたいですよ」

「とんでもない。さっきはついしくじったのだ。おおかた昨夜よく休んでいなかったからだろう。さて、どういう具合にこの困難な立場からぬけだすかな。だいじょうぶ、だいじょうぶ。そんなことはぼくにとってはわけはないことだ。なにしろ土人学は子どものころから、ようく研究してきたからな」

そういってキタ・モリオ氏はこんな話をした。

「いいかね、むかしフランスの探検家が人食い人種につかまったのだ。もうあすにも食べられる運命だった。ところが沈着な探検家は、頭を働かせて、みごとにその窮地からぬけだすことができた。どんなふうにやったかって？　彼はジタバタさわがなかった。人食い土人の酋長にむかってこういった。わたしはもう逃げようとは思いません。喜んで食べられましょう。あなたのようなりっぱな土人の王さまに食べられるのは光栄です。しかし、どうせ食べられるのなら、せめて一番おいしく食べられたい。その方法をあなたに教えてあげましょう」

「ほう、で、その人はどんなことといったのですかい？　食物をうんとこしょ持ってこさせたのですかい？」

と、まわりできいていた連中は思わずつりこまれて尋ねた。

「食物ももちろんだが、そのほかに探検家はフロをたてさせた。入浴するとからだの肉がやわらかくなってとてもおいしいといったのだ。土人の酋長はなるほどと思って、さっそく部下に命令してフロをたてさせた。そこで彼は、毎日フロにはいって、のんびりと暮らしていた」

「だって、酋長はそのうち彼を食べたがるでしょう?」

「そのとおりだ。酋長は探検家にむかっていった。おまえの肉はもうやわらかくなったろう? わしはそろそろ食べたくなったぞよ。しかし探検家はあわてなかった。わたしも実は食べてもらいたいんです。しかしただひとつ心のこりがある。わたしの肉は、あるソースをかけて食べると、それこそすてきにおいしいんです。ああ、あなたがそのソースを手に入れられたらなあ。酋長はツバキをのんできいた。そのソースはどうやったら手にはいるかね? 探検家は、じゃあ、わたしが手紙をかきましょう。これをフランス領にとどけてくれれば、じきにそのソースを送ってきますよ。そういって、ソースの注文ではなく救援隊をたのむ手紙をかいた。酋長は字がよめないから、苦労してその手紙をとどけた。すると鉄砲をもった救援隊がやってきて、探検家は無事に助かったのだ」

「なるほど、なるほど」

と、デブのモンジャは感心したように首をふった。

「ぼくもこの手を使おうと思う。カレー粉だとかケチャップだとかコショウをかけると、天下一品の料理になるといって土人たちをだますのだ。そして一個大隊の救援隊と機関銃と毒ガスとバズーカ砲を注文してやろう。どうだ。名案だろう?」

「そりゃダメですよ」

と、クプクプが口をはさんだ。

「だって、ここの人食い土人はとっても文明的だもの。彼らは料理学校から原子力研究所までもってるんだよ。もちろんコショウやケチャップくらいちゃんとそろえてますよ。なにしろぼくの聞いたこともない料理の名まえを、すらすらっといったもの」

「コショウもカレー粉もかい?」

と、キタ・モリオ氏は信じられないといった顔をした。

「もちろんですとも」

「それじゃソースはどうだろう?」

「ソースだってショウユだってそろってるにきまってますよ」

「だが、まさかカラシを使うことは知るまい?」

「にぶいなあ、あなたは」

と、クプクプはため息をついた。

「相手はあなたよりよほど文明的なんですよ。原子力まで知ってるらしいんですからね」

「そうか」

さすがにキタ・モリオ氏もがっくりしたように首をたれた。彼のことばにわずかな希望をもったらしいナンジャやモンジャも、泣きべそをかいて首をたれた。つづいて、船長もクプクプもジ

ッパヒトカラゲの船員たちももうなにも考える気力もなく首をたれた。
そうやって、みんなは黙りこくってうす暗い牢屋の中にすわっていた。もうみんなの運命はきまってしまったのだ。

数日はなんのこともなくすぎた。
朝、昼、晩、いろんなごちそうが与えられる。新鮮な野菜、くだもの、それからごくやわらかなひき肉のようなパイ、どれもこれもたまらないほどおいしい。ながい漂流のあいだにおなかをへらしてやせほそっていたみんなにとって、がまんできないごちそうなのだ。これを食べて太ってしまっては、人食い土人に料理されることがわかっていても、みんな食べずにいられない。
ことにナンジャとモンジャはやけになってガツガツと食べる。
「ウイッ。こいつはうめえ。このやわらかな肉パイみたいなのはなんの肉だろう?」
「わからない。わからないけど、とにかくうまい。こっちのサラダもおいしいぞ。ちゃんとサラダオイルがかかってる。あの土人たちは料理の天才だ。これでおれたちを食べないでくれれば天国みたいなものだが」
「食べられることは忘れよう。とにかくこいつはこたえられん。どれそのバナナをもう一本!」
こうしてみんなは、だんだんと栄養がよくなって太ってきた。顔いろもつやつやしてくる。老船長も十歳ばかり若がえったような顔つきになった。
それでも、そんなふうにごちそうをたらふく食べながら、みんなの胸の中には、やがてくるおそろしい運命のことがこびりついていた。だからむりに冗談をいって笑っても、その笑い声はどこかうつろなものだった。

とうとう、おそれていた日がやってきた。
ある晩、みんなはうしろ手にゆわえられて、部落の中の広場へひきだされた。広場には祭りのじゅんびがととのっているようだった。中央にたくさんのマキがうず高くつまれている。その前に石の壇がすえつけられている。人食い土人たちは、鳥の羽をつけたり、いろんな色の絵の具で顔や手足におしゃれをして、ぐるりと広場のまわりにすわっている。
大きな丸い月がジャングルの上にのぼった。月光はこうこうとして、その広場をてらしだした。正面に、白い羽かざりを頭につけた、ずいぶんと年とった土人が椅子に腰かけていた。りっぱな椅子である。これがおそらく酋長なのであろう。彼は広場につれだされたクプクプたちを見ろと、おもおもしくうなずいた。
「祭りをはじめよ!」
すると、そのわきにすわっていた背の高い酋長のむすこが、なにやら声高に命じた。
ポンポンポン、とタイコが鳴りだした。
カチャカチャカチャ、とこちらではカスタネットの音がする。
ジャーン! と広場のすみでシンバルが鳴った。
すると、いったいどこで手に入れたのか、土人たちは、ラッパやらクラリネットやらバイオリンやらコントラバスなどを、いっせいに鳴らしだした。どうやら音程をあわせているらしい。

と、彼らのまえに、まっ白なキモノをきた人物がすすみでてきた。どうも見たことがあると思ったら、それはあの大魔術師、エイヒム・ビイバブ・グラグラアらしい。彼は手に長いつえをもっている。そのつえをさっとあげると、それまで鳴いていたいろんな楽器の音がぴたりとやんだ。

エイヒム・ビイバブ・グラグラアはころあいを見はからって、さっと指揮棒をふりおろした。と、聞きなれた楽の音が、雄大に、おごそかにわきおこってきた。それはなんとベートーベンの運命交響曲を編曲したものであった。すばらしい演奏である。この人食い土人たちはそのままカーネギー・ホールに出演できそうな腕まえをもっていた。

しかし、音楽がいくらすばらしくても、これからどんなことをされるかわからないクプクプたちはそれを聞くどころではなかった。クプクプはふと、自分たちのうしろのほうに大男ヌボーもつれだされていることに気がついた。彼はクプクプたちとちがい、太いクサリでしばられている。しかし、ほんとうにヌボーが力をだしたら、そんなものはなんでもないはずだ。

「ヌボー、ねえ、ヌボーったら」

と、クプクプは呼びかけた。

だが、いったいどんな薬を与えられているのか、大男ヌボーはぼんやりした顔つきで、それどころかほとんどうっとりとした表情で、自分たちの死への前奏曲にきいっている。

クプクプはムダとは知りつつも、横のほうにしばられているキタ・モリオ氏にささやいた。

「ねえ、なんとかならない？　もうチェは終わりなの？」

「ああ、もうダメだ。こんなことなら、がんばって小説をかいたほうがまだよかった」

キタ・モリオ氏もいまはまるきり元気を失い、弱弱しげにつぶやくだけだ。

そのうちに音楽が終わった。酋長のむすこが中央にすすみでて、おごそかにいった。

「これから、首切りの儀式をとりおこなう」

そのときである。急にキタ・モリオ氏がなにか思いついたように頭をあげた。彼はクプクプにささやいた。

「シメタ！　たしか今夜は月食のはずだ。もうじき月がかけてくるはずだ」

日食や月食を野蛮人がおそれることは、いろいろな本に書かれている。普通、野蛮人たちは、森や海や空やすべての自然の中にそれぞれの神が住んでいると信じている。だから思いがけぬ自然の変異を、神の怒りと考えておそれるのだ。

キタ・モリオ氏はそれを思いだすと、のびあがってさけんだ。

「待て！　儀式をおこなうのはすこし待て！　おまえたちのおこないには天の神も怒っておられる。あそこにかがやく月を、くろい手でおしやってしまうとおつげがあった」

「ほう、そうかね？」

と、酋長のむすこは落ち着きはらっていった。

「だけど、それはあたりまえだよ。地球が太陽と月の間にはいるのだからね。おれたちの天文研究所の報告では、それはあと十分十三秒ではじまるね」

ああ、文明的な人食い土人たちは、なにもかも知りつくしているのだ。キタ・モリオ氏はもう口をきく元気もなくなってうつむいてしまった。

「おれたちの儀式は、月食とともに人間の肉をカマに入れるんだよ。まず最初にひとりだけ首を切る」

みんなぶるぶると身ぶるいをした。どうせ殺されるにしろ、やっぱり早く死ぬのはいやなのだ。

「待て」

と、そのとき老船長が声をだした。

「船員たちをこんな島につれてきたのは、わしの責任じゃ。どうかまずわしの首を切ってくれ」

いつもガンコでカンシャクもちの船長も、いざとなると船員たちをかばうのだ。クプクプはふいに胸がいっぱいになって叫んだ。

「待ってください。ぼくの首を切ってください。ぼくはちっちゃいけど、きっとおいしいと思います。ニワトリだってヒナ鳥のほうがおいしいもの」

酋長のむすこはふたりを見て微笑した。

「ほほう、なかなかりっぱな心がけだ。わが人種はそういう心がけの者をあとにする。だまっている者をイケニエにしよう。そこのデブがいいかな」

「ウヒャー、ウェーン」

と、デブのナンジャは泣き叫んだ。

「いや、まてよ。そこの色の白いやつのほうがおいしそうだぞ」

指さされたのはキタ・モリオ氏だった。彼はナンジャのようには泣き叫ばなかった。そのかわり彼は一声ウームとうなると、そのまま気ぜつしてしまった。

土人たちは、気を失ったキタ・モリオ氏を石の台のうえにかついでいった。魔術師エイヒム。ビイバブ・グラグラアがすすみでてきた。大きなマサカリのような刀をさげている。

彼は、石の台の上のキタ・モリオ氏めがけて、ふりかざした大刀をエイとふりおろした。

クプクプは目をつぶった。

キタ・モリオ氏の首はコロリところがりおちた、とだれもがそう思った。しかし首は落ちないで、彼をしばっていたナワがばらりと切れた。

そのとき、広場のまわりにすわっていた土人たちがバラバラとかけよってくると、てんでに刀をふりかぶってクプクプたちに切りつけてきた。みんなはキャッと叫んだが、首はおちずに、しばってあったナワだけが地上に落ちた。

これはまたどうしたことだろう?

みんなはアッケにとられて目をパチクリさせた。クサリをほどかれたヌボーもきょとんとして突ったっている。

すると、人食い土人たちは、そこらじゅうをおどりまわりながら、うれしそうに楽しそうにゲラゲラ笑い、次のような歌をうたった。

アッハッハ　アッハッハ
空の月よ　笑え

暗いジャングルよ　笑え
鳥もケモノもミミズもみんな笑え
自由に笑え　腹のそこから
アッハッハ　アッハッハ

「こ、これはまた、どうしたことだ？」
みんなはぼう然として、おどりまわり笑いつづけている土人たちを見まわすばかりである。
すると、正面にすわっていた老酋長が立ちあがった。さびた声でこういいはじめた。
「船乗りたちよ、おどろかして申しわけない。だが、安心してほしい。わしたちはけっして人を食べたりしない」
「え、人食い人種じゃないって？」
「そのとおり。しかもわしたちはケモノも鳥も食べない。もっぱら野菜とクダモノを食べている。そのためわしたちは、広い農園をつくり果樹園をつくっている」
「だって、それならあの肉パイは？　魚の肉なの？」
と、クプクプはあやしんでたずねた。
「あれはプランクトンじゃ。深海からわしたちはプランクトンをどっさりとってくる方法を考えだした。プランクトンで百三十種の料理をつくることをくふうした。それがわしたちのただひとつの動物たんぱく質の食べものなのじゃ」

「それなら、なぜヤリなんか持っているの？」
「あれはアクセサリーじゃ」
と、老酋長はこたえた。
「それにスポーツに使う。もっとも毒ヘビや毒グモは殺すがな。わしたちは無害なケダモノたちをけっして殺しはしない」
「へえ」
「ききなさい、船乗りたち」
と、老酋長はつづけた。
「わしたちは高い文化をもっている人種じゃ。深海の底のことも原子力のことも研究している。わしたちの技術をもってすれば、ここに大都会をつくり、電気をおこし、文化的な生活を送るのはやさしいことだ。けれどもわしたちはそれをしない。文化というものは便利ではあるが、あまりに勝手にすすみすぎると、人間はつい目標を見失ってしまうものだ。なんのために生きるか、幸福とはどういうことか、とかいうことをついに忘れてしまうものだ。だからわしたちは、研究だけはするけれど、やはりハダカで腰ミノをつけて暮らしている。太陽をあび、風にふかれ、大地をかけまわる。そしてわしたちはそれで満足しているのじゃ」
「そ、それなら」
と、クプクプはどもっていった。老酋長のいうことはよくわからないけれど、半分心をうたれるところがあった。しかし、それにしても合点のいかぬことがある。

「それなら、あなたたちはどうしてこんなひどいイタズラをするの？　ぼくらはてっきり殺されると思っていたんだよ」

「それは申しわけない」

と、老酋長はニコニコした。

「しかし、わしたちはあんたたちが、土人をバカにしている精神が気にくわない。ハダカで暮らしている者を見ると、自分たちより劣った人種だときめこんでしまう。それで、ちょっとおどかしてみただけなのじゃ」

「それなら口でいってくれればいいのに」

と、クプクプは口をとがらせた。

「そう思うじゃろう？　ところが、ただ話してきかしても、あんたたちには理解できなかったろう。ヤバン人がなにをいいやがると思うじゃろう。それなのに、いまはあんたたちもわしの話をきいて、なるほどと思うじゃろ」

そういわれればそうかな、とクプクプは思った。しかし、かたわらからヒョロのナンジャが叫びだした。

「それにしても、あんまりひどいじゃないか！　おれはきもっ玉がどこかへ行っちまった！　いくらなんでも、イタズラがひどすぎる！」

「それじゃ」と、老酋長はニコニコした。

「それをイタズラと呼んでもらいたくない。それはユーモアというものじゃ。あなたたちのよ

どんだ心に刺激を与えるユーモアの精神というものなのじゃ」

老酋長がいいおわると同時に、土人たちはワッとかん声をあげた。またもやゲラゲラ笑いながら、そこらじゅうをおどりだした。

アッハッハ　アッハッハ
丘の草よ　笑え
砂浜のヤドカリよ　笑え
チョウも　サカナもナメクジもみんな笑え
自由に笑え　腹のそこから
アッハッハ　アッハッハ

きょとんとしていたクプクプたちも、いつか彼らといっしょに笑いだしていた。

ただひとり、笑わなかったのはキタ・モリオ氏である。彼はまだ気ぜつしたままだったからだ。

ふたたび海へ

みんな自由の身となった。

土人たちはうって変わって親切にしてくれる。こんな心のやさしい、いつもニコニコ笑ってい

る人間たちをクプクプは知らなかった。彼らは粗朴で、ときに子どもっぽく、ときに原始的であったが、同時にりっぱな文明人でもあった。

南国の太陽がぎらぎらとかがやくとき、彼らはジャングルや海べで喜喜として遊びたわむれた。なんの悩みもなく。それから農園の世話をしたり、カヌーに乗ってプランクトンをとりにでかけにいった。カヌーは原始的なものだったが、彼らはアクアラングをちゃんともっていた。

「どうしてカヌーなんか使うの？　あなたたちだったら、りっぱなモーター・ボートを作ることもできるのに」

と、クプクプはたずねた。

「そりゃできるさ」

と、ひとりの土人がニコニコしてこたえる。

「でも、おれたちは、手でカイをこぐのが好きなんだよ。機械にたよらず、こうやって自分の力で波を乗りこえてゆくのが好きなんだよ」

ジャングルに日が沈むと、さわやかな風が吹きおこってくる。虫の声がくさむらに一杯になり、ふしぎなトッケー（トカゲの一種）の声もきこえてくる。月かげの下で、土人たちは楽器をひいたり、あるいはひとりで、あるいはつれだって散歩したりする。

「あの月にはね」

と、ひとりの土人が明るい月を見あげながらクプクプにいった。

「おれたちの女神が住んでいるんだ。そういう伝説がのこっている」

「ぼくの国じゃあね、あそこでウサギがモチをついているのだというよ」

と、クプクプはいった。

「だけど、そんなことはうそっぱちさ」

「それは美しい話だ」

と、土人はいった。

「月までの距離はおよそ三十八万キロメートル、その直径は三四七六キロメートル、そしてあそこには死火山ばかりしかない。おれたちの天文学研究所ではそうちゃんとしらべてある。けれどもおれたちは、女神の伝説もばかにしちゃいない。なぜって、その物語の中にはおれたちの祖先の血がながれているんだからね」

船長はじめ船員たちは、浜べに乗りあげた船を修理にかかった。さいわいそんなにひどくこわれていなかったし、土人たちが親切に手つだってくれるので、もう二、三日したなら海に乗りだせそうだ。みんなは木を切ってきたり、いたんだ舟べりに板を打ちつけたり、毎日いそがしい。

それでもみんな元気いっぱいだった。土人たちは毎日とりたての果実、野菜、プランクトンで作った栄養たっぷりのパイをくれるので、船員たちは生まれてからこの方、こんなにからだの調子がいいことはなかったといいあった。

そのなかで、キタ・モリオ氏の存在は奇妙なものであった。彼は船長にたのんで、いっしょに船に乗せていってもらうことになった。そのために彼は船の修理を手つだうのだったが、手つだ

わないほうがはるかにましであった。彼が木を切りたおそうとすると、木はたおれないでオノのほうがこわれてしまった。板を打ちつけると、クギは反対側につきぬけたり、まがって打ちつけたり、ろくなことをしなかった。

「もういい、もういい。あんたは休んでいてくれたほうが、船がこわれなくって安全じゃ」

そう船長にいわれると、キタ・モリオ氏はニッコリ笑って、木かげにはいってひる寝をした。ときどきカニを追っかけた。それからまたひる寝をした。

「あいつはね、口だけいい調子なことをいうけれど、いざとなるとからきしダメだ」

ナンジャとモンジャは一時はキタ・モリオ氏を尊敬しただけに、そのあとの彼のだらしのなさに、よけいシャクにさわるようだった。

「ブドウ酒の川ができるだと。できるもんか。あいつの魔法をおれは一度見たんだ。そのときはおどろいたが、なあに、あの土人の魔術師とくらべれば、子どもだましだ。人食い土人なんか赤子の手をひねるようだなんてぬかしおって、ぜんぜんかないはせん。さいわい人食い土人でなかったからいいようなものの、もし本物だったら、おれは今ごろ胃の中でこなれちまってるところだった」

「ほんとうだ。あのマンネンヒツとやらでゲンコウヨウシになにか字をかいたけど、ぜんぜんなにも起こりゃしなかった。あのペテン師め、あんなやつは船に乗せてやるのももったいない。イカダで流れていくのがちょうどいいのさ」

ナンジャとモンジャが、キタ・モリオ氏のわる口をいっているのを、大男ヌボーが耳にはさん

だ。彼はすぐさまクプクプのところに走ってきた。

「クプクプ。たいへんなことを忘れていた。おれは土人たちから精神安定剤をのまされたもんで、なんだかすっかりのんびりしちまっていた。さあ、クプクプ、おれたちはキタ・モリオといっしょにいるんだ。ようやく追いついたわけなんだ。彼にたのんで、原稿をかいてもらおう。おれはもっといい名まえと、もっとデコボコじゃないスマートな頭をつけてもらおう。そしてクプクプ、きみはいよいよ家へ帰れるんだ」

「だって、ダメなんだよ」

と、クプクプはいった。

「あの人にはなんの力もないよ。ぼく、もうためしてみたんだよ。人食い土人が悔いあらためて、みんなを逃がしてやったって書いてもらったけど、なにも起こりゃしなかった」

「そうか、ふしぎだなあ」

大男ヌボーは考えこんだが、しばらくするとはたとひざをたたいた。

「ひょっとすると、彼の万年筆はそこまで力がないのかもしれないぞ。そういう物語のはしっこまでは力がおよばないのだ。だけどクプクプ、おまえは彼のへんちくりんな小説の主人公だ。なにしろ表題についてる名まえなんだからな。いくらキタ・モリオが三文作家だとしても、きっとおまえのことだったら成功するよ。さあクプクプ、さっそく彼のところへ行こう」

クプクプもそういわれてみると、なんだかそんな気がしてきた。それに失敗したってもともとではないか。いや、自分はあの小説の主人公なのだ。その証拠に、ふしぎな手によってこのメチ

ャメチャの世界にとびこんできたのではないか。
そう思うと、クプクプはまた胸がワクワクしてきた。

のんきにひる寝をしていたキタ・モリオ氏は、大男ヌボーの話をきいても、うかぬ顔だった。
「だって、そりゃムリというものだよ。そんなことはだいたい不可能だ。もう一回やってみたじゃないか」
「しかし、クプクプについてです。ためしに、もう一回だけ書いてみてください」
と、ヌボーは辛抱づよく頼みこんだ。
「ためしだってイヤだよ。ぼくは原稿用紙を見るだけでゾッとするのだ。ぼくにすらすら小説がかけるのなら、なにもこんなところへ逃げてきていないよ」
キタ・モリオ氏はふきげんそうに首をふった。とても原稿用紙と万年筆を、カキのこびりついたトランクからとりだす気配もない。
「しかし、みんなあなたのことを、ペテン師だの大ボラふきだのといっていますぜ」
と、ヌボーがいった。
「なんだって？」
「そのうえ、バカのマヌケのヌケサクのクルクルパーのコンコンチキだとわるロいってますぜ」
「なんだって？　クルクルパーのコンコンチキだと！」

クプクプにはヌボーの作戦がわかった。彼はキタ・モリオ氏をおこらして、原稿をかかせようとしているのだ。
「そうですよ。そのうえガニマタでオタンコナスでヌカミソのカビみたいだといってますよ」
と、クプクプもいった。
「ヌカミソのカビだと！」
「つまり、原稿をかけもしない小説家はそんなものだといってるんです！」
「けしからん！　ひどいやつらだ。なあに、書こうと思えば、ちゃんと書ける。ただぼくは書こうと思わないだけなのだ」
はたしてキタ・モリオ氏は腹を立てて作戦にひっかかってきたようだった。
「そんなら、ちょっと書こうと思ってくださいよ」
「なんて書くのだ？　どうもちかごろスランプでねえ」
「ただこう書けばいいんです。さて船乗りクプクプは、うとうとと眠った。ふと気がつくと、彼は東京の自分の家の、見なれた勉強机のまえにすわっていた」
「それだけでいいのか。そのくらいならわけはない。しかし、書くだけだぞ。あとでなんにも起こらなくっても、ぼくは責任をとらないぞ」
キタ・モリオ氏はプンプンしながら、それまでまくらにしていたトランクのふたをひらき、原稿用紙と万年筆をとりだしかけたが、急になにか気がついたように、大きな声をだした。
「待てよ。たしかこのまえぼくは、人食い土人が悔いあらためて、みんなは喜んで逃げてきた、

と書いたっけな？」

「ええ、あのときはなんにも起こらなかったけど」

「いやいや。ひょっとすると起こったのかもしれないぞ。なるほどだれも逃げてこなかった。しかし人食い土人は人食いではなく、ユーモアのある友好的な土人だった。だが、ほんとうはやはり人食いだったのかもしれないぞ！　それがぼくの原稿によって、あのように変わったのじゃないかな？　いや、たしかにそうらしい！」

どうもこのキタ・モリオってかなりのウヌボレ屋だな、とクプクプはおかしくなった。しかし今は、うぬぼれさせておいたほうが都合がよい。

「いや、自分では知らなかったが、ぼくはあんがい大作家なのかもしれない。どれ、ではひとつ、その原稿をかいてやろう」

キタ・モリオ氏はもったいぶって、やおらトランクの上に原稿用紙をひろげ、おもむろに万年筆をにぎった。

さすがにクプクプの胸はときめく。なにも起こらないかもしれない。しかし、いつかのようなふしぎが起こるかもしれない。ヌボーは、確信ありげにじっと小説家の手もとを見つめている。キタ・モリオ氏は紙に万年筆の先をつけた。ものすごくへたくそな字でかきはじめた。

さて、船乗りクプクプは

彼はそこまで書いた。そしてつぎの字に移ろうとした。

そのとき、ダ、ダ、ダ、ダ、というモーターのようなひびきが聞こえてきた。こんな島では耳なれぬもの音である。キタ・モリオ氏はけげんそうに万年筆をとどめ、音のきこえてくる海のほうを見やった。

クプクプも大男ヌボーも思わずそちらへ目をやった。すると一そうのモーター・ボートがすさまじい勢いで浜べへ突進してくる。日にやけた男がハンドルをにぎり、まっすぐにこちらに進んでくる。いったい何者なのだろう？

モーター・ボートが砂浜につき、乗っている男の顔が見えるようになったとき、かたわらで、

「ウヒャア！」

というような悲鳴がおこった。

キタ・モリオ氏である。見れば顔いろはまっさおだった。せっかく書きかけた原稿用紙も万年筆もトランクの中にバタバタとつめこむと、トランクをかついで、やにわにジャングルのほうへ駆けだしてゆく。アッというまのできごとであった。

「あ、待って、待ってよう！」

クプクプはかなきり声をあげたが、キタ・モリオ氏はそんな声にふりむかばこそ、おしりに火がついたように走ってゆく。たちまちその姿はジャングルの中にかき消されてしまった。

クプクプと大男ヌボーがあっけにとられていると、今度はドタバタと走り寄ってきた男がある。砂浜にモーター・ボートを乗りつけてきた男であった。

いまにもかみつきそうな顔つきで、

「いまここにいたのは、キタ・モリオじゃないか？」
と、息せききって尋ねた。
「ええ、そうですが」
「シメタ！」
男は叫ぶが早いか、身をひるがえしてドタバタとジャングルのほうへ走ってゆく。背中になにやらいっぱい背おっている。しかしその姿は、もう大木の茂みの中へ消えた。
「なんじゃい、あれは？」
大男ヌボーが、目をパチクリさせてつぶやいた。クプクプはハッと思いあたった。
「もしかしたら、あの編集者じゃない？　きっとここまでキタ・モリオを追っかけてきたんだよ」
「なるほど、そうかもしれない」
と、ヌボーもうなずいた。
「だが、いったいどうなるんだろうなあ」
「ぼくらも行ってみようか」
しかし、クプクプがそういうかいわないうちに、だれかがジャングルからとびだしてきた。キタ・モリオ氏である。トランクを片手にさげ、ころがるように逃げてくる。
「さようなら、バイバイよ」
彼はクプクプたちのそばを走りすぎるとき、たしかそうさけんだようだった。しかしクプクプ

がとめようとしたときには、もう彼は波打ちぎわに駆けつけていた。ヒラリと、そこにあったモーター・ボートにとびのると、たちまちエンジンの音がひびき、ボートはまっしぐらに走りだしてゆく。
「ああ、待って！」
クプクプは絶叫した。
しかし、モーター・ボートは白波をけたてて、みるみる遠ざかってゆく。
そのとき、おくればせにさっきの男もあとを追って波打ちぎわに駆けつけてきた。モーター・ボートが遠ざかってゆくのを見ると、彼は髪の毛をかきむしり、二、三度とびあがってどなりたてた。
「かえせ！　もどせ！　こら、ドロボウ！　ヒキョウ者！　目玉をほじくりだしてやるぞ！　戻らないと、あとでひどい目にあわすぞ！　こら、逃げるのかあ！」
そんな呼び声におかまいなく、モーター・ボートははるか遠くに小さくなってゆく。男はまた髪の毛をかきむしり、ジダンダをふんだ。
「ええ、チクショウ！　もう一歩というところでつかまえてやるところだったのに！」
「あなたは、あの編集者なの？」
と、クプクプは尋ねた。
「え？　おれか？　そうだが……きみはだれだい？　ええ、それどころじゃない！　キタ・モリオのチクショウめ！」

「その背中にいっぱいしょってるのはなんなの？」
「これか。これはトンカチとノコギリとハンマーとドリルとマサカリだ。これでキタ・モリオのやつをズタズタにしてやるのだ」
「ほんとにズタズタにしちゃうの？」
「ほんとにはしないさ。しかし、ヤツを木にしばりつけて、おどかしてやるのさ。そうでもしなければどうにも腹の虫がおさまらない」
事情を知っているクプクプは、さすがに編集者にも同情をした。しかし、こんな男がとびだしてこなければ、小説家はまさに肝心の文字をかきあげるところだったのだ。
キタ・モリオ氏が乗り逃げしたモーター・ボートは、もう海のかなたに見えるか見えないかくらいのツブになってしまった。
クプクプは急にしょんぼりとなって、気ぬけしたように、いつまでもそのケシ粒のようなボートを見つめていた。それももう見えなくなりそうだ。
「クプクプ」
と、かたわらからヌボーが声をかけた。
「元気をおだし。キタ・モリオは永久に消えっちまったわけじゃない。この世界のどこかにいるかぎり、きっとまた見つかるさ。おれたちの船も、もうすぐ出帆できる。さあ、元気をおだし」

三日後のことである。
すっかり元気になった老船長は、すてきに大きな声をはりあげた。
「おーい、野郎ども、じゃない、者ども、じゃない、おーい、みんなあ、出船じゃあ！」
エッシ、オッシ、と勇ましいかけ声がかかる。新しいカイでこぎだされた船は、たちまち海岸から遠ざかる。
「早く帆をおろせーい、いや、まちがい、帆をあげーい！」
ズルズルズル、ギコギコと、つぎはぎだらけの帆があがる。帆はさっと海風をはらんで、船はかるやかに沖にむかう。
浜べではたくさんの土人たちが手をふっている。船の者も負けずに手をふり、ハンカチをふる。出港というものは勇ましいなかに、いつもいくらか悲しいものだ。
ザブーン、ザブリと、早くも舟べりにあたる波の音がきこえる、なつかしい新鮮な潮のにおいが、みんなのからだにこびりついてくる。
ジッパヒトカラゲの七人の男たちも、いそがしく働きながら、楽しそうに声をそろえて歌をうたう。

波はザブザブ　帆柱ギコギコ
空は青く　風はさわやか
船はすすむよ　どこへとも知らず

まるい水平線のそのまた先へ
おいら船乗り　死ぬまで船乗り
けれど悔いない　後悔しない
海はおいらのふるさとだもの

船長も満足そうに、お気にいりの十八番のホラ貝よりも大きなパイプで、プカーリプカリとタバコをふかしている。

大男ヌボーは考えぶかそうに、遠ざかってゆく島を見つめている。

ナンジャとモンジャはロープをまきながら、うれしそうに笑いあっている。

そのかたわらでは、モーター・ボートをとられて仕方なしにこの船に乗りこんだ編集者が、こわい顔をして、ベンケイのような七つ道具をみがいている。

かたわらを通りぬけたクプクプは、思わずクスリとわらった。はじめはがっかりしたクプクプも、今はすっかり元気をとりもどしていた。

もちろん東京の家には帰りたい。そのためにはキタ・モリオ氏をぜひともさがしださなければならぬ。しかし、考えてみれば、自分の家の勉強べやで宿題をなまけていたのでは得られない貴重なものを、彼は経験することができたのだ。それに、大男ヌボーはもちろん、がんこな船長にもナンジャやモンジャたちにも、クプクプはすぐには離れたくないような気持ちをいだいていた。なぜって、彼らはクプクプといっしょに海をのりこえ、さまざまな生活を送り、そしてたいへん

な難儀をへてきたのだから。

クプクプは船のへさきに立った。彼はもう、すぐおろおろしたり、すぐ泣きベソをかいたりするような少年ではなくなっていた。冒険が、海が、彼をたくましくさせたのだった。

クプクプはへさきに立って、広く広くどこまでも広いまっさおな海を見まわした。潮風が彼の髪をなびかせる。潮の香が彼の鼻をくすぐる。ザブーンザブリと舟ばたにぶつかる波の音が、まるで子もり歌のように彼の耳をやさしく打った。

船はどこへ行くのだろう？　そしてクプクプの行く手には、どんな運命が待っていることだろう？　しかしクプクプはしっかりと船のへさきに立ち、髪を潮風になびかせながら、いつしか歌のようにつぶやいていた。

海、海、海。どこまでもつづく広い海。やさしくそしてあらあらしい海。ぼくはおまえが好きだ。ほんとうに好きだ。ぼくはもっとおまえのなかへはいっていこう！

解説

わたしは、長い間、北杜夫さんの愛読者であった。が、仕事の関係もあって、氏の作品を、ラジオやテレビ向きに脚色する機会も多い。

この「船乗りクプクプの冒険」も、六年前ラジオのミュージカルとして一回、NHKから放送したことがあるし、今年はテレビで、六回連続で放送することになっている。

番組が終わったからこんなことが言えるのだが、最近までNHKから放送していた「ひょっこり・ひょうたん島」にも、北杜夫さんの影響は大であって、なんとも申しわけもない次第ながら「ひょうたん島」初期の「タムレ王国の巻」などは、この「船乗りクプクプの冒険」の結構をかなり拝借した。その前年、ラジオで「クプクプ」を脚色したときに、この本から学びとったものが、自然に「ひょうたん島」のほうへ、流れ込んだのであろうか。

いま、自責の念にたえかねて、生命の危険をも省みず、あえてここに告白する次第である。

いつか、これも同じテレビのフィルム番組で北さんの一日の生活をルポルタージュすることになり、その台本の執筆を仰せつかったことがある。このとき、わたしは初めて北さんにお目にかかったのであったが、「北杜夫は、小説など読まず、マンガばかり眺めて暮らしている」という噂どおり北さんは「少年マガジン」や「少年サンデー」など、少年週刊誌の山の中にかこまれて、

ニコニコなさっておった。

わたしの提出した常識的な台本を読んで北さんは「わたしはこんな常識のかたまりではない」と絶叫され、物凄い勢いで、ぴーっとわたしの台本を真っぷたつにやぶくと、さらさらさらと、勝手に、台本をお書きになった。

その台本の構成は次のようなものであったと記憶する。

小説家北杜夫氏は極度のスランプにおちいり、どういうわけか、自分の家を外国人に高く売りつけて外資を稼ごうと試みる。が、この節の外国人はこすっからくて、あべこべに北さんは二束三文で、家を外国人にとりあげられてしまう。すっかり落ち目になった北杜夫氏は、生活の糧を得るために、親友の小説家なだ・いなださんのお嬢さんたちとともに「てんぷくトリオ」なるコーラス・トリオを結成し、マスコミに売り込みにかかるが、各放送局のディレクター諸氏、ことごとく氏の極度の音痴さ加減に恐れをなして、全くお呼びがない。そこで北氏は、ついに、にっちもさっちもいかなくなり、厳冬の真夜中、ドテラ姿に身をかため、寒さと緊張にガタガタ震えながら必死の形相もの凄く、ふたたび、小説の筆をとる。

それまで、こういった仕事でお会いした有名人は、わたしの台本を一読するや否や異口同音に「あんた、こりゃあんまりです。わたしは世間では〝おもしろいことをいう有名人〟で通っていますが、本質はまじめなんですから、こういうふざけた台本では困ります」とおっしゃるのが常であった。ところが、北さんはまるであべこべではないか。しかも、嬉々として、その後一週間ほど、カメラの前で「落ち目の小説家北杜夫氏」を演じられたのである。

そこで、わたしは思ったのであった。

「北さんのユーモアは断じて口先ばかりのものでは決してない。北さんの存在そのものがユーモアである」と。

さて、ピーナッツをひとつぶたべてやめられる人以上に勇気のある人はなかなかいないのと同様に、北さんのユーモア小説を一ページ読んでやめることのできるほど勇気のある人はなかなかおるまい。とくに、この「船乗りクプクプの冒険」はそうである。

そして、「ドン・キホーテ」に匹敵する構成の奇抜さと前衛性、「ガリヴァー旅行記」を凌駕する文明や常識人間に対する批評の鋭さは、このユーモア童話を、単なる童話に終わらせていない。もはやこれは「新しい古典」として、人類の共通財産であろう、というとあまり常識的で、北さんは眉をしかめられるだろうか。

ところで、北さんのユーモアの特徴はまずその独得の命名法にある。「怪盗ジバコ」や「どくとるマンボウ航海記」と同様、「クプクプ」も、氏の天才的な造語能力を示すもので、こういう人工造語は、凝りすぎてもだめ、ストレートでもなおだめ、さらっとひとひねりして、ポイと投げだす呼吸が大切なのだが、その美事な見本がここにある。

北さんのユーモアの第二の特徴は、こまかい数字にこだわるくせである。その好例は、ナンジャとモンジャが、クプクプにじゃがいもを何個むかせるかで口論するくだりや、同じこのふたりが、人喰土人のいる島を探検に行くことになるが、お互い尻込みして蜒々ジャンケンをするくだりは、その好例であろう。もちろん、この手法は、日本の童話作家にも愛用はされているが、ほ

とんどの場合、モノローグでこのギャグは使われている。北さんはそれを対話で使う。北さんの童話の持つ迫力は、そのへんに原因があるのではないだろうか。

第三は、誇張癖である。クプクプが船長のパイプをトンカチとノミで掃除すると、一時間もしてから、バリバリともものすごい音がして、十何年かたまっていたヤニの表面がくずれ、その中から乾燥してかたまっていたヤニの粒とススとホコリがもうもうと立ちのぼり、パイプはもくもくと黒煙を吐きだし、水夫たちにおそいかかる、というのがひとつの例であるが、この手の誇張は各所にばらまかれ、読者を煙にまき、ついには笑死させることになっている。誇張が誇張を生み、ホラがホラを生む調子のよさ、なんとも至芸である。

そして、おしまいに方向の倒錯、あべこべ性。その最たるものがこの物語の構成である。とにもかくにも、本というものは、購買者がノートと間違えないようにどのページにも活字が、ぎっしりと並んでいなければならないのに、クプクプが買った本は、ページの大部分が白紙という、常識とはあべこべの本である。したがって、読者はクプクプにならって、本の空白を埋めるために行動しなければならない。

「読書とは、自分の頭でなしに、他人の頭で考えることである」（ショペンハウアー）らしいのだが、読者は、己の才覚で行動し、自分なりの「冒険」を経験しないかぎり、良い読者とはなりえないのである。人喰土人のはなしの中にもりこまれた逆説も、また、おしまいで「クプクプ」が「タロー」であることを放棄して「クプクプ」であることを選択することの意味も、読者がこの本の中身に深く参加しないかぎりわからない。そういった意味で、これは、「読んだとい

うために読む」作品ではない。読んだことによって世界がちがってみえてくる、といった、まことに稀有な文学の中のひとつであろう。

井上ひさし

角川文庫
船乗りクプクプの冒険

昭和四十四年九月三十日　初版発行
昭和四十八年五月三十日　二十二版発行

定価は、帯・カバーに明記してあります

著作者　北杜夫
発行者　角川源義
印刷者　村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

発行所　東京都千代田区富士見二ノ十三　株式会社角川書店
郵一〇二　振東京一九五二〇八
電話東京(262)二二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　旭印刷・本間製本
0193-127104-0946(1)

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であつた以上に、私たちの若い文化力の敗退であつた。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかつたかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとつて、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあつた。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあつた我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎すためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもつて出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによつて、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

雨の中に消えて　石坂洋次郎　180
陽のあたる坂道　石坂洋次郎　260
何処へ　石坂洋次郎　140
金の糸・銀の糸　石坂洋次郎　160
風と樹と空と　石坂洋次郎　160
颱風とざくろ　石坂洋次郎　280
だれの椅子？　石坂洋次郎　260
如何なる星の下に　高見順　120
今ひとたびの　高見順　100
胸より胸に　高見順　120
昭和文学盛衰史　高見順　280
母系家族　石川達三　180
人生画帖　石川達三　180
悪の愉しさ　石川達三　220
骨肉の倫理　石川達三　140
花と竜　全二冊　火野葦平　220
悦ちゃん　獅子文六　200
胡椒息子　獅子文六　160
金色青春譜　獅子文六　180
厄介　丁羽文雄　200
小説作法　丹羽文雄　240
バナナ　自由学校　獅子文六　180
晩告白　丹羽文雄　120
年太宰治　180
女生徒　太宰治　140

ろまん燈籠　太宰治　160
走れメロス　太宰治　160
斜陽　太宰治　120
人間失格・桜桃　太宰治　160
愛と苦悩の手紙　太宰治　160
白痴・二流の人　坂口安吾　200
道鏡・狂人遺書　坂口安吾　200
堕落論　坂口安吾　180
暗い青春・魔の退屈　坂口安吾　180
ふるさとに寄する讃歌　坂口安吾　200
外套と青空　坂口安吾　200
ジロリの女　坂口安吾　220
夜長姫と耳男　坂口安吾　240
李陵・弟子・名人伝　中島敦　160
ちゃん　獅子文六　200
悦ちゃん　獅子文六　200
胡椒息子　獅子文六　160
金色青春譜　獅子文六　180
小説作法　丹羽文雄　240
バナナ　自由学校　獅子文六　180
晩告白　丹羽文雄　120
年太宰治　180
女生徒　太宰治　140

コーヒーと恋愛　獅子文六　200
大番　全二冊　獅子文六　各240
信子・おばあさん　獅子文六　290
少年死刑囚　中山義秀　70
若草物語　草福田清人　200
天平の少年　福田清人　160
浮雲　林芙美子　200
し林芙美子　120
忘れ霜　壺井栄　140
大根の葉　壺井栄　120
二十四の瞳　壺井栄　120
草の実　壺井栄　140
あしたの風　壺井栄　180
若い樹　壺井栄　120
々壺井栄
リツ子・その愛　檀一雄　160
リツ子・その死　檀一雄　140
石川五右衛門　全三冊　檀一雄　160 180 160
夕日と拳銃　全二冊　檀一雄　各180
お市御寮人　舟橋聖一　260
白秋詩集　北原白秋　110
萩原朔太郎詩集　萩原朔太郎　140
月に吠える　萩原朔太郎　140

新訂版 石川啄木 金田一京助 140
新編短歌入門 土屋文明 歌集 五味保義解説 140
土屋文明の話 北川冬彦 240
詩 様々なる意匠 文への手紙 小林秀雄 140
ドストエフスキイの生活 小林秀雄 140
無常という事 小林秀雄 140
私の人生観 小林秀雄 120
ゴッホの手紙 小林秀雄 160
作家の顔 小林秀雄 160
モオツァルト 小林秀雄 100
常識について 小林秀雄 160
人間教育 亀井勝一郎 160
我が精神の遍歴 亀井勝一郎 140
恋愛論 亀井勝一郎 120
愛の無常について 亀井勝一郎 120
青春論 亀井勝一郎 100
美貌の皇后 亀井勝一郎 160
私の美術遍歴 亀井勝一郎 140
大和古寺風物誌 亀井勝一郎 260
現代俳句 山本健吉 320
二十歳のエチュード 原口統三 140

俳句歳時記 春夏秋冬新年 角川書店編 各120
藤村詩集 島崎藤村 160
千曲川のスケッチ 島崎藤村 120
桜の実の熟する時 島崎藤村 120
土井晩翠詩集 土井晩翠 140
詩集道程 高村光太郎 140
高村光太郎詩集 高村光太郎 140
美について 高村光太郎 200
堀口大學詩集 堀口大學 100
中原中也詩集 中原中也 180
立原道造詩集 立原道造 140
佐藤佐太郎歌集 上田三四二解説 140
宮柊二歌集 釈迢空解説 岡野弘彦解説 140
近藤芳美歌集 高安国世解説 160
新しい俳句の作り方 中村草田男 120
次郎物語 全二冊 下村湖人 320
女 坂口安吾 120
私も燃えている 円地文子 300
愛情の系譜 円地文子 200
千姫春秋記 円地文子 160
肉体の門 田村泰次郎 120
けむりよ煙 永井龍男 260

エデンの海 若杉慧 180
青春前期 若杉慧 160
真空地帯 全二冊 野間宏 140
武蔵野夫人 大岡昇平 120
火 大岡昇平 100
俘虜記 大岡昇平 200
愛の渇き 三島由紀夫 120
純白の夜 三島由紀夫 120
夏子の冒険 三島由紀夫 140
不道徳教育講座 三島由紀夫 240
森と湖のまつり 武田泰淳 260
足摺岬・絵本田宮虎彦 140
別れて生きる時も 田宮虎彦 140
春の海図 井上靖 120
真田軍記 井上靖 140
無頼 井上靖 240
青衣の人 井上靖 160
春の嵐・通夜の客 井上靖 160
満ちて来る潮 井上靖 260
愛と風と雲と砦 井上靖 180
ある落日 井上靖 280

海 峡 井上靖 200
白い風赤い雲 井上靖 180
波濤 井上靖 160
河口 井上靖 180
淀どの日記 井上靖 200
渦 井上靖 320
昨日と明日の間 井上靖 240
城砦 井上靖 340
傾ける海 井上靖 200
舞 井上靖 220
群化 石井上靖 340
大安吉日 全二冊 源氏鶏太 160
向日葵 娘 源氏鶏太 140
幸福さん 源氏鶏太 160
初恋物語 源氏鶏太 140
鶴亀先生・億万長者 源氏鶏太 120
火の誘惑 源氏鶏太 120
家庭の事情 源氏鶏太 180
悲喜交々 源氏鶏太 200
御身 源氏鶏太 280
東京・丸の内 源氏鶏太 280
大願成就 源氏鶏太 280

人事異動 源氏鶏太 240
東京一淋しい男 源氏鶏太 160
重役の椅子 源氏鶏太 140
川は流れる 源氏鶏太 340
ボタンとハンカチ 源氏鶏太 160
花のサラリーマン 源氏鶏太 180
流れる雲 全二冊 源氏鶏太 260
浮気の旅 源氏鶏太 180
愛情の悲しみ 源氏鶏太 200
或る「小倉日記」伝 松本清張 120
顔・白い闇 松本清張 140
カルネアデスの舟板 松本清張 140
無宿人別帳 松本清張 200
真贋の森 松本清張 120
小説帝銀事件 松本清張 120
かげろう絵図 全二冊 松本清張 各240
霧の旗 松本清張 160
徳川家康 松本清張 120
黒い福音 松本清張 280
落差 松本清張 340
天保図録 全三冊 松本清張 各300
太陽の季節・若い獣 石原慎太郎 160

完全な遊戯 石原慎太郎 120
亀裂 石原慎太郎 200
海の地図 石原慎太郎 140
殺人教室 石原慎太郎 160
青年の樹 石原慎太郎 260
おゝい雲 石原慎太郎 340
日本零年 石原慎太郎 340
青春とはなんだ 石原慎太郎 300
悪童 今東光 160
お吟さま 今東光 100
こつまなんきん 今東光 200
悪太郎 今東光 260
春泥尼抄 今東光 240
河内風土記 今東光 200
悪名 全二冊 今東光 各200
乃木と東郷 戸川幸夫 340
荷車の歌 山代巴 100
旅人―ある物理学者の回想― 湯川秀樹 140
姉妹 畔柳二美 120
夜の河 沢野久雄 140
落葉樹 沢野久雄 140
吉野秀雄歌集 斎藤正二解説 120

裸の王様・流亡記　開高　健　160
日本三文オペラ　開高　健　180
岸辺の祭り　開高　健　180
片隅の迷路　開高　健　260
ロビンソンの末裔　開高　健　180
海と毒薬　遠藤周作　120
おバカさん　遠藤周作　180
ヘチマくん　遠藤周作　240
闇のよぶ声　遠藤周作　220
恋愛とは何か　遠藤周作　120
ぐうたら生活入門　遠藤周作　140
太宰治論　奥野健男　140
現代詩人全集　全十冊　平均160
歌原田康子　200
挽歌の部屋　吉行淳之介　140
娼婦の部屋　吉行淳之介　160
闇のなかの祝祭　吉行淳之介　200
街の底で　吉行淳之介　140
薔薇販売人　吉行淳之介　140
藤村名詩鑑賞　吉田精一　100
がしんたれ　菊田一夫　240
父夏目漱石　夏目伸六　140
父・萩原朔太郎　萩原葉子　140

海の牙　水上　勉　160
霧と影　水上　勉　160
五番町夕霧楼　水上　勉　120
銀の庭　水上　勉　140
越後つついし親不知　水上　勉　160
死の流域　水上　勉　140
湖の琴　水上　勉　240
湖の笛　水上　勉　340
棺の花・那智滝情死考　水上　勉　200
絵巻の巣　水上　勉　180
火の笛　水上　勉　220
波影・貴船川　水上　勉　180
有明物語　水上　勉　180
紅花物語　水上　勉　240
弥陀の舞　水上　勉　280
婉という女　大原富枝　120
紀ノ川　有吉佐和子　160
非色　有吉佐和子　200
有田川　有吉佐和子　220
ぶえるとりこ日記　有吉佐和子　120
図々しい奴　全二冊　柴田錬三郎　260
田村俊子　瀬戸内晴美　180

美は乱調にあり　瀬戸内晴美　180
鬼の棲む（栖）　瀬戸内晴美　160
黄金の浜　瀬戸内晴美　200
ゴメスの名はゴメス　結城昌治　140
夜の終る時　結城昌治　180
白昼堂々　結城昌治　240
幻の殺意　結城昌治　180
あるフィルムの背景　結城昌治　200
背徳のメス　黒岩重吾　160
休日の断崖　黒岩重吾　160
脂のしたたり　黒岩重吾　280
腐った太陽　黒岩重吾　160
天の踊り　黒岩重吾　260
昼と夜の巡礼　黒岩重吾　200
西成山王ホテル　黒岩重吾　220
廃墟の唇　黒岩重吾　340
飛田ホテル　黒岩重吾　240
花園への咆哮　黒岩重吾　340
象牙の穴　黒岩重吾　240
人間太宰治　山岸外史　280
どくとるマンボウ航海記　北杜夫　120
どくとるマンボウ昆虫記　北杜夫　120

幽霊　北杜夫　120
船乗りクプクプの冒険　北杜夫　120
王朝　海音寺潮五郎　220
天と地と　全二冊　海音寺潮五郎　270
蒙古来たる　全二冊　海音寺潮五郎　260
海と風と虹と　全二冊　海音寺潮五郎　各240
明治太平記　海音寺潮五郎　240
コタンの口笛　全二冊　石森延男　260
バンのみやげ話　石森延男　220
ふしぎなカーニバル　石森延男　200
桐の花・グスベリ　石森延男　220
大風呂敷　杉森久英　280
啄木の悲しき生涯　杉森久英　340
天才と狂人の間　杉森久英　160
苦悩の旗手　太宰治　杉森久英　140
牛をつないだ椿の木　新美南吉　180
孤島の野犬　椋鳩十　180
戦艦大和　吉田満　160
小林秀雄　江藤淳　200
夏目漱石　江藤淳　140
芥川龍之介の世界　中村真一郎　140
熱愛者　中村真一郎　240

谷川俊太郎詩集　大岡信解説　180
寄席紳士録　安藤鶴夫　140
巷談本牧亭　安藤鶴夫　180
天国にいちばん近い島　森村桂　160
違っているかしら　森村桂　160
三好達治詩集　石原八束編　200
山びこ学校　無着成恭　180
新選組血風録　司馬遼太郎　280
尻啖え孫市　司馬遼太郎　340
北斗の人　司馬遼太郎　300
豊臣家の人々　司馬遼太郎　280
新選組始末記　子母沢寛　280
逃げ水　子母沢寛　340
遺臣伝　子母沢寛　200
昼の月　子母沢寛　260
花の雨　子母沢寛　320
蝦夷物語　子母沢寛　140
マジメ人間　山口瞳　160
春宵十話　岡潔　120
春風夏雨　岡潔　140
一葉舟　岡潔　200
風に吹かれて　五木寛之　180

男だけの世界　五木寛之　200
白夜物語　五木寛之　160
こがね虫たちの夜　五木寛之　180
お登勢　船山馨　320
幕末の暗殺者　船山馨　240
北国物語　船山馨　200
現代不作法読本　高橋義孝　160
夏倉由美子　200
悪い剣ケ崎　立原正秋　180
薪能　立原正秋　180
白い礫　立原正秋　200
ながい午後　立原正秋　160
恋人たち　立原正秋　160
辻が花　立原正秋　200
死者の時　井上光晴　200
妊婦たちの明日　井上光晴　220
荒廃の夏　井上光晴　260
乾草の車　井上光晴　220
書かれざる一章　井上光晴　280
騒動師たち　野坂昭如　180
ゲリラの群れ　野坂昭如　240
火山列島　曾野綾子　300

ぜったい多数　曾野綾子　340
黎明　曾野綾子　260
遠来の客たち　曾野綾子　200
生贄の島　曾野綾子　240
雪の記憶　富島健夫　180
黒い河　富島健夫　180
恋と少年　富島健夫　280
人民は弱し官吏は強し　星新一　200
きまぐれ星のメモ　星新一　160
きまぐれロボット　星新一　120
八つ墓　村　横溝正史　300
悪魔の手毬唄　横溝正史　300
犬神家の一族　横溝正史　260
獄門島　横溝正史　240
悪魔が来りて笛を吹く　横溝正史　280
幻想の未来　筒井康隆　160
アフリカの爆弾　筒井康隆　180
にぎやかな未来　筒井康隆　180
六本木心中　笹沢左保　200
乾いた空の流れ　笹沢左保　200
招かれざる客　笹沢左保　220
死化粧　渡辺淳一　240

大いなる幻影　戸川昌子　140
猟人日記　戸川昌子　200
小説日本銀行　城山三郎　340
重役養成計画　城山三郎　300
アポロンの島　小川国夫　160
生のさ中に　小川国夫　160
一本の鉛　佐野洋　180
メルヘン諸島　庄野英二　200
感傷旅行　田辺聖子　240
寺山修司青春歌集　中井英夫解説　140
家出のすすめ　寺山修司　160
戦争を知らない子供たち　北山修　180
悲しみの器　高橋和巳　260
セルロイドの塔　三浦朱門　140
天然記念物の動物たち　畑正憲　200
意志表示　岸上大作　200
男友達　河野多恵子　140
人斬り半次郎（幕末編）　池波正太郎　320
人斬り半次郎（賊将編）　池波正太郎　300
髑髏銭　角田喜久雄　340
わだつみのこえ消えることなく　和田稔　200
現代ジャーナリズム入門　扇谷正造　220